このすばアフター！カズマ＆めぐみんのターン

ぽいんと

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カズマとめぐみんの関係をメインにした、魔王討伐後の話です。とはいえ他キャラの話も普通にやります。また、原作よりもカズマさんを少しだけ強化してお送りします。1話目の独自設定にご注意下さい。

他愛もない日常の話をメインにストーリーはほどほどになる予定です。

★設定は主に書籍版に準拠

★足りない部分はｗｅｂ版から

魔王討伐後想定のストーリーですのでネタバレにはご注意ください。

※申し訳ないです、プロットはあるのに筆が動かなくなったので更新停止してます。

目次

短編集
この素晴らしい世界に大富豪を！【短編】 1
第一章
第1話　カズマはレベルが上がった！ 38
第2話　他の誰にも渡したくないんです 59
第3話　お嬢様はいつだってブレない 90
第4話　アクアと居場所とカズマと 112
第5話　めぐみん盗賊団と〝お頭様〟 129
第6話　悪女めぐみんとカズマのお仕置き 157
第7話　のほほん王都デート 184
第8話　背中合わせの爆裂魔達 213
第9話　報酬ください 246

短編集

この素晴らしい世界に大富豪を！【短編】

「勝負よめぐみん！今日こそ決着をつけるわよ！」
「はぁ、またあなたですか。あなたも懲りない人ですねぇ。でもいいでしょう格の違いというのを思い知らせてやります」
俺たちの屋敷の前にいつものようにゆんゆんがめぐみんと勝負しにきていた。
出会った頃は極度の人見知りと持ち前のぼっち気質を遺憾なく発揮して、俺たちのパーティに遠慮して屋敷を訪ねてこなかったゆんゆんだが、最近はそれも改善されつつある。
「あっカズマさんどうもです。これ皆さんで食べてください！」
・・・・・・と思ったのだが、やっぱりそうでもなかったらしい。冬になって暇が出来たのか毎日屋敷を訪ねてくるのだが、そのたびに手土産を持ってくる。
しかもそこそこ高級なものばかりを持ってくるあたり俺たちに遠慮しているのだろう。高級タルト、高級ケーキ、高級焼酎に霜降り赤ガニまで持ってくることがあった。
・・・・・・いや、嬉しいんだけどね！心遣いはありがたいし、おいしいし、ごちそ

うさまでした。
　ちなみに大半はアクアの酒のつまみとなる。一人で大半を食い散らかすので腹が立つ。今度ぶっ飛ばしておこう。
「ありがとうな、でも土産なんかなくったって気にせず遊びに来てくれよ。俺たち友達なんだから」
「と、ともだちですか！ふぇ、ぇぇ友達だなんてそんな・・・・」
　ほのかに頬が赤くなったゆんゆんは嬉しそうに俯いている。いやちょろすぎだろ。
　ゆんゆんはまだ若いけどかなりの美人だし、スタイルだってかなり良い。アークウィザードとしての実力もアクセルの街でトップクラスだろう。
　そして俺の仲間たちと違って外見だけじゃなく中身もいい。本来なら俺が土下座して友達になってくれと頼みこむレベルの人間だろう。・・・・・・いやしないけど。
　だからこそ思うところがあるわけで
「チョロいな」
「チョロいですね」
「チョロいって言わないで！」
　プリプリと体を振るゆんゆん、・・・・・・たゆんたゆんのゆんゆんが目に入ったのは俺のせいじゃないはずだ。

瞬間めぐみんの冷ややかな目が俺の体を射抜く。やめてっ！そんな目でみないでっ！これは男の本能として仕方のないことなんだ。俺は声高にそう主張したかった。したかったのだが俺も馬鹿じゃない。すればいつものゴミを見るような目線が飛んでくるのも分かってる。俺は学習する男なのだ。

めぐみんが睨みつけてきているので、何か言われる前に強引に口を開く。

「ま、まぁすぐに勝負しないんならとりあえず入れよ、俺は飲み物でも取ってくるから二人とも居間のソファーにでも座って話でもしててくれ」

めぐみんは不満げな表情をしていたが、すぐにいつも通りに戻った。

俺は玄関を開け二人を招きいれる。二人の表情を見ると、勝負に向けて気合を入れているゆんゆんと、悪巧みを始めた悪女のめぐみんが対称的だ。

・・・・・・というかめぐみんはいつも卑怯なことばかりして勝ってる気がする。あいつも俺のこと卑怯だの何だのと言えた口じゃないだろ。

「それじゃあカズマはホールケーキを切り分けて来て下さい、勝負の景品にしましょう」

「えっ私の土産が景品なの？おかしくない？」

「おかしくありません。そのケーキはカズマの手に渡った瞬間私たちのものになったのです。私たちのものをどうしようと私たちの勝手でしょう？」

「な、なんだか激しく納得がいかないけどいいわ！今日はこれで勝負よ！」

ゆんゆんはポケットから2組のトランプを取り出す。
どうやらトランプタワー作りで勝負するようだ。ゆんゆんの得意分野なのだろうが、相手は悪辣なめぐみんだ。
うん・・・・・・これは結末が見える気がする。
ケーキやらジュースやらの準備をしていると2人の声が聞こえてくる。
「めぐみん遅いわ、遅すぎるわよ！」
「ちょっ、あなたが速すぎるんですよ！指で挟んで4枚持ちだなんてインチキですよインチキ！」
「長年の一人遊びで鍛えられた私の実力よ！これは私の圧勝ねめぐみん！」
長年の一人遊びっておまえ・・・・・・重い重い。ゆんゆんの過去は時折、重力魔法になる。聞いてて悲しくなってくるので割と真剣にやめてほしいな。
めぐみんにも精神攻撃は結構効いているらしい。
「ぐぅ・・・・・・あなたが精神攻撃をしてくるならこっちにも考えがあります。ねぇあなたの今の紅魔の里での二つ名はなんでしたっけ？えーと確かー『青き稲妻を背負う者』ゆんゆんでしたっけ？」
「あっあわわ私はそんなんじゃないから！」
「あっそうそう思い出しました！ホーストとの対決の前日あなたは寝ている私になんて

言いましたっけ？確か『あなたは私の一番大事なともだ』」
「うわあああああああああああ、やめなさいよおおおおおおおおおおお」
えぐいなめぐみん。さすが悪女のめぐみんだ、勝つためには手段を選ばない。　っていうかそんなことあったんだな、今度それとなく聞いてみるか。
結局勝負は、精神攻撃から持ち直したゆんゆんが競り勝っていたが、めぐみんが机を脚で蹴り上げるという卑劣な行為に出て、トランプタワーを崩して勝利した。
っていうかそれありかよ。もちろんゆんゆんは抗議していたがめぐみんは知らん顔していた。
ケーキを切り分けた俺はジュースと共にリビングルームへと持っていく。涙目のゆんゆんは俯き何やらブツブツ言っている。ちょっとかわいそうだ。
「というかカズマ！どうしてゆんゆんの分のケーキまで切り分けているのですか！これでは勝負の意味がないでしょう！」
「いや、俺も食べるんだからついでだよ。ほら大きい方をおまえに渡すからそれでいいだろ」
「まったく、アクセル一の鬼畜男だの成金クズ野郎だの言われてるあなたは、妙なところで気が利くのですね」
「な、なぁめぐみん？誰だ？そんなこと言ってるのはどこのどいつだ？というか、もしか

しておまえもそんなこと思ってるのか・・・？」
　本当に誰だそんなことを言ってるやつは。アクセルには人に気づかれずに噂を流せる人でもいるのだろうか？清廉潔白な俺には鬼畜男だのクズ野郎だの言われる筋合いはないはずだが。
・・・・・・いやちょっとだけ、ほんとさきっぽだけ心当たりがあるな。パンツとったりケンカ売ったり売られたり。
　というかめぐみんにまでそう思われているのか。
　悲しくなってきた・・・・・・他の奴らは割とどうでもいいが、仲間たちやめぐみんにはそう思われたくないのだが・・・・・・
「さぁどうでしょう？カズマの気の多さが治ればその噂も改善するかもしれませんね？」
「す、すみませんでした・・・・」
　申し訳なくなって謝る俺を見てめぐみんは微笑みながらクスクスと笑っている。
むぅ・・・・・・気が付けばいつも手玉に取られているような気がする。
　するとめぐみんはとんでもないことを口走る
「まぁ私にとってはそんな噂が流れている方が都合がいいかもしれませんけどね」
「ま、まさかめぐみん・・・・・・お前が！」

するとめぐみんは目をカッと見開きすごい剣幕で迫ってくる

「そんなわけないでしょう!どうしてカズマのことを一番大事に思ってる私がそんなことしなければならないんですか」

遠慮のないの大胆発言にピクリと固まってしまう。どうしてこんなにストレートに言えるんだろうか?というかいまだにコイツのドキッとさせる発言になれない。

自分の顔が赤くなっていくのを感じる。前を見ればめぐみんの顔も赤くなっている。おまえもかい。

「うっっ・・・・・・そ、そうか・・・・・・そそうだよなめぐみんごめんな」

「まったくですよ、人の気持ちも知らないで」

プイッとそっぽを向いて頬を赤くしているめぐみん。かわいい・・・・・・

「はーめぐみんも変わったよね・・・・・里にいた時は1に爆裂、2に爆裂、3に爆裂の話を聞かない、恋愛のれの字もない子だったのに」

「あなたは私のことをなんだと思っていたのですか!まぁ爆裂魔法に関しては否定しませんが・・・・・それに私はもう子供ではないのです。恋愛ぐらいして当然でしょう」

「そんなこと言ってるけど、カズマさんと風呂に入った話も布団に入った話もただの事故だったんでしょ?めぐみんも子供じゃない」

「なにおーっ!そんなこというゆんゆんはどうなのですか!」

二人が何やら言い争っているが俺はスルーする。このやり取りももう何度も見てきたのだ、流石に飽きる。

ちなみに俺たちは友達以上、恋人未満の関係を続けている。しかし俺は今のこの関係が心地よいと思ってるし、俺たちが恋人になればパーティの関係がどうなるか心配だ。

俺の自惚れでなければダクネスにも悪く思われてないと思うし下手なことして傷つけないか心配なのだ。・・・・・・というのは半分で残り半分は俺がビビりなだけだ。だって告白してフラれるのとか怖いし・・・・・・

さすがにこの雰囲気のままだと恥ずかしいので提案することにする

「なぁせっかくだしそのトランプ使って遊ばないか？」

「おっ！いいですねカズマさん！やりましょう！」

「ふむ、いいでしょう。それでは何をやりますか？トランプを使ったゲームはいろいろありますが」

「そうだなぁ大富豪とかどうだ？３人だとちょっと少ない気もするが」

「「大富豪？」」

「ん？ああそっか知らないのか。大富豪ってのはな、カードをプレイヤーにすべて配り、

手持ちのカードを順番に場に出して早く手札を無くすことを競うゲームなんだ。前回順位が次ゲーム開始時の有利不利に影響するってのが特徴だな」
「あれ、私そのゲーム知ってるかもしれません、『友達ができたらやりたいことノート』に書いた覚えがあります」
「あなたはいちいち重いんですよ！でも私もそのゲームは本で見たことがありますよ」
「なーんだ、そんなこと言うめぐみんだってやったことないんじゃない。そっかめぐみんってぼっちだったもんね」
「なにおっ！私はボッチなどではありません。平凡な人々とは群れない孤高の存在といってください！」
「まぁそう興奮するなよ、孤高のぼっちめぐみん」
「あ、あアナタまでそんなことを！いいでしょう。やってやりますよ。売られたケンカは買うのが紅魔族の掟なのです」
　言葉だけは自信ありげに言い放っているめぐみんだが、その肩は少し震えている。多分思い当たる節があるのだろう。
「まぁそんなことはおいといて」
「そんなこと!?そんなこととはなんですか！」
「いいから、話が進まないから黙っててくれ孤高のぼっち」

めぐみんが襲いかかってきた！
「ま、まぁルール知ってるのならいいや、本当は４人か５人でやるのがちょうどいいんだがな、ここにいないならしかたなって痛い痛い痛い首筋に爪を立てるなって、やめろやめろやめろ痛い、ごめんごめんごめんいやごめんなさいめぐみんさん」
「ふっ、また勝ってしまった」
服と首から手を放しどや顔するめぐみん、この後絶対へこましてやる・・・・・・
そんなことを考えていると、騒いでいる声で目が覚めたのかアクアが起きて降りてきた
「まったく～朝っぱらからうるさいわねアンタたちは」
「朝っぱらからってもう昼前だろ、早く起きて来いよ」
「ヒキニートにそんなこと言われたくないんですけど！ってゆんゆんも来てるのね、昨日のタルト美味しかったわよ。また持ってきなさいな」
「あ！はい、また持ってきますね」
「おいゆんゆん、あの駄女神を甘やかさなくていいからな、あいつ際限なく調子に乗るから」
「ちょっとアンタ何様よ！って、トランプ？何かみんなでやろうとしてたのかしら？ねぇねぇ私も混ぜなさいよ」

「ちょうどよかった、大富豪やるから参加してくれ」
「わかったわ！」
　というわけでウキウキのアクアも参加して４人でやることになった。大富豪はローカルルールが多く、しっかりとルールを確認してからやった方がいいとのことでまずは確認をした。
　幸いというべきか、紅魔の里に大富豪を伝えた日本人はかなり詳しく情報を残していたらしく、大半のルールは分かるそうだ。
　しかしほとんどやったことないゲームを覚えているとは、２人の記憶力はなかなかのものだ。神経衰弱ならかなりの苦戦を強いられるかもしれない。
　ちなみにアクアは娯楽の女神なのでもちろんルールを知っていた。ところどころ怪しかった気もするがまぁいいだろう。どうせ雑魚だし。
　ちなみにルール
　・・・・・・・革命あり
　・・・・・・・都落ちあり（大富豪がトップ陥落するとビリになるルール）
　・・・・・・・８切りあり
　・・・・・・・ジョーカー２枚
　・・・・・・・大貧民が親

に加えて
紅魔の里のローカルルール
・・・・・・7渡し（7を出したときにいらないカードを好きな人に押し付けられる）
を入れたルールになった

ちなみに順番はじゃんけんの結果
俺　↓　めぐみん　↓　ゆんゆん　↓　アクア　↓　俺だ

～一戦目～

「よーし俺からか、それじゃあ9のトリプルだ」
「む、序盤から飛ばしてきますね。強い手札を温存しておくのはセオリーだと思うのですが。パスで」
「私もパスかな」
「カズマ？あんた本当にルールわかってんの？パスよ」
　ニヤニヤしているアクアに心配されるのは腹が立つがまぁいい。ちなみに俺の手札はさっきのトリプル9が最弱だった。あと11枚だが負ける気がしない。

「流れたなーそれじゃ次は１０のトリプルだ」
「ちょっ、か、カズマ？パスです」
「パスです」
「パスよ」
　あと８枚
「それじゃあ次は１１のダブルだ」
「っ・・・・・・どうやらカズマの手札はかなり強いようですね、しかしここで止めれば……いや、でも２位を狙った方が・・・・・・」
　めぐみんはどうやら俺をここで止めるべきか悩んでいるらしい。おそらくめぐみん１か２のタブルを持っているのだろう。すぐにパスしないというのはそういうことなのだ。頭はいいが経験が足りないな。ちなみに俺の残り手札は１が２枚、２が２枚、ジョーカーが２枚だ。負ける気がしねぇ。
「カズマ、私の目を見てください」
「どうした？まぁいいけど」
「・・・・・・２位狙いにします、パスです」
「どういうことだよ、意味がわからないぞ」
「私はカズマの目をみれば大体考えていることがわかるのです」

「っ・・・・・・そうか」
　えっなにそれは、心の奥底まで見透かされてるみたいでコワいコワい。通じ合ってるみたいでなんか嬉しい気もするけど。ちなみに俺もなんとなくだがめぐみんが2を2枚とKを3枚持っているのが分かった。
「私もパス」
「私もよ」
　後の展開が読めているのか冷静に残りのカードを数えているゆんゆんと、なぜか余裕しゃくしゃくのアクアがパスを宣言する。というかあのバカは状況分かってないだろ。
　さて、終わりしようかね。1とジョーカー2枚を場に出す。
「やっぱりそうでしたね。パスです。というかもう流していいのでは？」
「一応確認はしないとな2人は？」
　ゆんゆんもアクアも首を振る。まぁ当然だ。俺はこの状態を勝ち確ラッシュと呼んでいる。こうなればだれも手出しはできない。
「それじゃ2が2枚、絶対出せないはずだから流すぞ。それじゃ最後に1だ、よしこれであがり」
「は、はやすぎますカズマさん。私たちなんてまだ1枚も出してないのに・・・・・・」
「そうよカズマ！あんたインチキしたでしょ！返して！私の大富豪の地位を返してよ

！」

「うるさいぞー大体カード配ったのはお前だろ！」

そうなのだ、俺たちにカードを配ったのはこの駄女神アクアである。カードを配るのは任せなさいと言った後、両手でカードの束を包み込み空中にカードをばらまいたらなぜか４つの束が出来ていた。

もう一度言う、なぜか美しい４つの束ができていた。相変わらず物理法則に中指を突き立てているような謎能力を披露するアクアだが、配ったのはアクア本人である。文句を言われる筋合いはない。

おれはめいいっぱい下衆な笑みを浮かべたあと言ってやることにした。このゲームではヒール役も大事なのだ。

「まぁせいぜい2位を争っててくれ、俺は大富豪らしく下々のお前らを眺めててやるよ」

「うわぁ・・・・・・カズマさんったら最低ね」

「カズマさん・・・・・・最低」

「やっぱり鬼畜じゃないですか」

「だーまーれ貧民どもが、口の利き方には気をつけろよ」

「プークスクス、カズマったらあの薄汚い豚領主に似てきてないかしら」

「え、いや、あの、そそれはまじでやめてくれ・・・・・と、ともかく早く2，3位を

決めてくれ」
「言われなくてもわかってるわよ、それじゃこの1はどうするの？」
「私はパスします、全員がパスすれば結局私の番ですし」
「私もパス」
「パスするしかないわね」
　ということでめぐみんの番となる。そこからはめぐみんとゆんゆんの一騎打ちが始まった。
「6のダブルです、どうしますかゆんゆん」
「かかったわねめぐみん！あんたが6のダブルを出してくるのなんてお見通しよ！7のダブル！」
「なっ、さっきはアクアの5のダブルをスルーしてたはないですか」
「より危険な方を倒すのは定石よ、ということで7渡しでいらないカード2枚あげるわね」
「い、いらないですよ、ヤメ、ヤメロオオオオオオオオオオオオオオオオ、いや本当に要らないです勘弁してください。わ、私の必勝コンボが・・・・・・」
「ねぇ、地味に私のこと雑魚扱いしてないかしら？あの？私もいるんですけど～」
「私はあと3枚、勝負あったわねめぐみん！」

「くっ・・・・・・ではJのダブルでどうです」
「これで決まりね！Qのダブルよ」
「ふっふっふふっふっふ、ここまで上手くいくとは想定外でした。Kのダブルです！」
「え〝っ」
「これで上がれると思っていたのでしょう？残念でしたね。私はあなたの切り札を見抜いたうえで、演技をしていたのですよ」
　得意げに何か言いだしためぐみん、俺にはわかるあれは嘘だ、だって額に汗かきまくってるもん。
「嘘つけ、さっき7渡しされてビビりまくってただろ、本当は負けたって思ってたんだろ！」
「ちっちがわい！と、ともかくこれであなたは残り1枚です。好きなように料理してやりましょうか」
「う、うううううううううううううう」
「4のダブルです。ほらほらー出せないんですかー出せないですよねー残念でしたね」
　残り手札が1枚のゆんゆんはパスするしかない。こうなると弱いのが大富豪の恐ろしさだ。しばらくの間ずっと置いてけぼりを喰らっていたアクアは目を輝かせる。
「やっと私の出番ね！5のダブルよ！」

おい、なんであいつは5を4枚持ってるのに小分けにして出したんだ。馬鹿なのか？ちらっとアクアの手札を覗くと手札の大半が9以下のあまりものであった。これはひどい。3と4に至ってはトリプルだ。

ゴミのようなダブルやトリプルを抱えていたアクアだが終盤においては結構強い、アクアの7渡しがゆんゆんに炸裂しゆんゆんは絶望的な表情になっていく。

しかしこの展開はめぐみんの意図的なものだろう。アクアの次の番のめぐみんは次々といらないカードを処分していく。

「ふぅ一時はどうなるかと思いましたが、これで上がりです。4ですよ」

「あっ私も上がれるよ！8で場を流して3を出すわ！これで3位ね」

「くうぅぅ、女神である私が大貧民だなんて屈辱だわ」

・・・・・・明らかにアクアが3位になれる試合だったのだが、というかなんで7渡しで自分の手札の中で一番強いやつ送るんだよアホか、ゆんゆんもかなり動揺してたぞ。

さて、ここまではただの運の勝負だ、しかしここからは本当の大富豪が始まる。大貧民から最強のカードをむしり取ってやるか。

・・・・・・と思っていた時期がありましたとさ、うん、甘かった、確かに俺の運はいいんだ。俺の運は。

　それは大貧民から大富豪へ一番強いカード2枚が贈られる時に起こった。まだ見ぬ最強の手札に心を躍らせていたところ、アクアから9と7が贈られてきたのだ。なめてんのか。

「おいアクア、強いカード渡したくないのは分からんでもないがルールは守れよ」
「ハァ?、たださえアンタにカードなんて渡したくないのにルールだから仕方なく一番強いカード渡してるんじゃないのよ!」
「これが!?これが一番強いカードか?ふざけんなよお前どんだけ運悪いんだよ」
「文句言うんだったら返してよ!私のカードたちを返してよこのヒキニート!」
「返せるならとっとと返品してるわこんなゴミ!この穀潰しの大貧民が!」
「ふあああああああああああああ、カズマが、カズマがいっちゃいけないこといった!」
　いやほんとに、冗談抜きでいらないのだ。俺の手札が既にジョーカー2枚にK、1、2を3枚づつと7を2枚持っているというものあるがそれにしてもひどい。いや、まぁ7はありがたいが。
　ちなみにあげるカードがなかったので俺はKを2枚送り付けてやった。アクアは機嫌を直して『ほんとにいいの?』とでも言いたげな嬉しそうな表情をしていた。純粋な

やつだ。いつもこうならかわいいのだが・・・・・・・

～二戦目～

「あと4枚で上がりだ、おれの番だな、さてどうするか・・・・・・・」

勝負が始まったが俺は速攻で試合を片付けにいった、俺は抜け目のない男、勝てる勝負を手加減して遊んでやるほど間抜けではないのだ。そして最後にジョーカ2枚と7が2枚残った。ふと気が付くと、テーブルの下の足を優しくつつかれていた。周りを見渡すとめぐみんが目を潤わせて懇願するような眼でこっちも見つめてきている。目を合わすと口を小さく動かし始めたので盗聴スキルで確認すると『そのジョーカー私にくれませんか?』と言っていた。か、かわいい・・・・・・・普段なら絶対やらないが今日は気分がいい。うむ、くれてやろう。

「これで上がりです!やはり私の頭脳の前ではゆんゆんなど敵ではないのです」

「ぐっ、それは私から毎回カード受け取ってるからでしょ。今回は3位だけど次こそ痛い目みせてやるんだから!」

「ねぇ・・・・・・?ゆんゆん?まだ勝負はついてないわよ・・・・・・・?」

「あっこれで上がりです」

「う゛っ」

その後の勝負は一方的なものであった。ジョーカー2枚を受け取っためぐみんは持ち前の頭脳で的確に相手を追い詰め2位を勝ち取った、後にゆんゆんが続く。アクアは大貧民だ。

～三戦目～

「うーん、張り合いがなくてつまらんな。おいそこの大貧民ジュースを持ってこい」
「たかがゲームで偉そうにしてんじゃないわよ！っってあああ、待ってゆんゆん！そ、そこはパスしない？ね、ね？」

～七戦目～

「私もそろそろ富豪の地位に飽きてきましたね。そろそろ大富豪を狙いたいのですが」
「おっ？富豪風情が大富豪の俺に歯向かう気か？その場合お前への支援は打ち切ることになるが」
「あーちょちょっと何を言ってるんですか。（だ、黙っててくださいよそのことは！）」

～十戦目～

「ふあああああああああああああああ、ああああああああああああああみんながいじめるううううううううう」

「おい泣くなよアクア、お前の運が悪いのが悪いんだろ！」

余裕があれば7渡しでジョーカーをめぐみんに渡し、かわりにめぐみんは俺の邪魔をしない。そんな無言の共同戦線が張られているおかげか順位は１０戦しても全く変動しなかった。そんな光景に異常を覚えたのかゆんゆんが愚痴るように口を開いた。

「ねぇーーーめぐみんー、なんでいつもジョーカーを2枚持ってるの？そしてなんでいつもカズマさんが上がるまで使わないの？」

「さぁどういうことでしょうか？そこの男に聞けばいいのではないですか？」

「えー答えなさいよー。じゃあカズマさん、どういうことですか？」

俺がめぐみんの方をちらっと見やると、めぐみんは目配せして『言わないでくださいね』と伝えてくる。よし分かった！決めた。

「俺が毎回7渡しでジョーカーを2枚ともめぐみんに渡してるからだぞ」

「ちょっとカズマ!?う、裏切ったのですか!?」

「やっぱりズルしてたんじゃない！卑怯よめぐみん！」

「そうよ！めぐみんったらカズマさんがロリコンなのを利用して強いカードをもらうなんて卑怯だわ！」
「おい、だれがロリなのか聞こうじゃないか。いいのですか？これ以上私をロリ扱いするなら我が爆裂魔法が炸裂することになりますがいいのですか？」
「だ、だれがロリコンだこら！アクアだって俺から毎回強いカード受け取ってるくせにどの口言ってるんだよ」
「う、う受け取ってなんかないわよ！それはアンタにとっていらないカードをってだけでしょうが！」
「文句があるならこっちにだって考えがあるぞ。一番いらないカードを1枚ずつ渡してやってだな・・・・・・」
「やめてよ！そんなことされたら私ビリになっちゃうじゃない！」
「いや今もビリだけどな」
「皆さんずるいです！私にもカードをくださいカズマさん！うぅ・・・・・でも部外者の私がこんなこと言うのもおこがましいですよね。やっぱり私の友達はサボちゃんとデメちゃんしかいないのかもしれません・・・・・・」
　このままだと面白くなさそうなのでネタばらしをしてやった。アクアとゆんゆんに取り囲まれているめぐみんがこっちを睨んできているが無視だ。あと、ゆんゆんは不意

打ちで重力魔法を放つのはやめてほしい。サボテンもデメキンも喋らないし意思疎通もできないのにそれと同列にされても困る。・・・・・・時間がある時はこっちからめぐみんと一緒に遊びに誘ってやろう。なんだかんだ言ってめぐみんも喜ぶはずだ。

　それはともかくそろそろ俺の欲望を果たさせてもらおうか。

「よーしそれじゃあお前らこうしよう。このジョーカー2枚は1番可愛く俺におねだり出来たやつにくれてやる。よーしそれじゃあ採点スタート！」

「!?」

「ねぇねぇカズマさん？カズマさんってその～、なんかそこはかとなくいいと思うの」

「0点」

「なんでよーーーー！」

　せめて何か考えてから喋ってほしい、というかあれでいけると思ってるアクアが謎だ。大体そういう対象に思えないアクアの時点で大幅減点だ。

「甘えたりするのはいやなのですが・・・・・・あぁもう・・・・・どうしてこんなことをしなければいけないのでしょうか」

「ほれ、ほほほーれ、この2枚が欲しくないのか？」

「ぐっ・・・・・この男は・・・・・・いつもヘタレなくせにどうしてこういう時だけ堂々とセクハラをしてくるのでしょうか・・・・・・。わかりました、やればいいんで

しょう！『そのジョーカー私にくれませんか？』」
「３７点」
「低っ！さっきはこれで渡してくれたじゃないですか！」
「さっき見たからな、それで大幅減点だ。ちなみに上目遣いで加点して、声に出したってことで減点だ」
「意味が解りませんよ!?なんですかその採点基準は!?」
「いやーみんなの目がある中、小声、もしくは口の形だけでやり取りするってのが可愛いんじゃないか。わかってないなお前は」
「ぐっ、無駄に採点基準が細かいのが腹が立ちますね。」
　いや、まぁ正直可愛かったけどね。うん・・・・・・ドキッとしたし衝動的に渡しそうになった。でも簡単に点をくれてやるわけにはいかないのだ。
　すると突然、ゆんゆんが俺の隣に座り服の小さく袖をつかみ、頬を赤くし俯きながら呟く。というか俺の腕にいろいろ当たっているのだが・・・・・・
「か、カズマさん、私じゃ・・・・・・私じゃだめでしょうか・・・・・・」
「!!８２点！」
「ちょっどういうことですカズマ！ゆんゆんはただ恥ずかしがっているだけではないですか！」

「分かってないなお前は、本当は欲しいのに遠慮がちに求めてきてるところが可愛いんじゃないか。あと体をさりげなく当ててくる部分もプラスだな」
「私はそんなつもりなかったんですが・・・・・・・って、え！私は８２点ですか？やった！めぐみん！この勝負は私の勝利よ！」
「こんなふざけた勝負なんて無効ですよ無効です！あなたも私と勝負するなら内容にプライドを持ってください！」
「そうよヒキニート！あんたさっきゆんゆんの胸が当たった時、鼻の下伸ばしてたの知ってるんだからね！」
「の、のばしてなんかねーし！文句言うならカードやらないぞ！」
　そうあくまでも俺の方がみんなより立場は上なのだ。大富豪とはそういう役職でそれ以下は大富豪に従わなければならない存在なのだ。そう思っていたのだが。
「いーわよそんなカードなんていらないわ！めぐみん！ゆんゆん！協力してあの不届き物に天罰を喰らわせましょ！」
「いいですね。私もちょっとカズマには痛い目に遭ってもらいたいと思っていたところなのです」
「わ、私は・・・・・・」
「我が唯一無二の友ゆんゆんよ、私に協力してください」

「分かったわめぐみん！カズマさんを消し飛ばすわよ！」
　お、おいなんて物騒なこと言ってるんだ。しかもこいつらあっさり敵に回りやがった。でもまぁいい、ここで圧倒的な格の違いを見せつけてやることにするか。
「わかったよ。それじゃあ賭けをしよう。次の試合お前らが勝ったら一つだけなんでも言うことを聞いてやる。その代わりお前らが負けたら俺の言うことを聞けよ？」
「いいですよ。受けて立とうじゃありませんか」
「・・・・・・分かりました、その勝負受けます」
「私に楯突いたことを後悔させてくれるわ！覚悟しなさいヒキニート！」
「アクア、私たち二人にも補助魔法お願いします」
「分かったわ『ブレッシング！』」
「あっ汚ねぇ！こいつら魔法で運を上げやがった！」
「ふっ、運も実力のうちというものですよ。我々の本気見せて差し上げましょう」
　というわけで３ＶＳ１の不平等マッチが始まってしまった。とはいえ、大富豪は元々、大富豪以外が協力して大富豪を落とすゲームだからな、こっちのほうが健全な遊びなのかもしれない。
　しかし負けたら言うことを聞かなければならないので是が非でも勝たなきゃいけないな。ちなみに俺の幸運値は、３人の幸運値の合計＋『ブレッシング』補正より少しだ

け低い。これは案外キツい勝負になるかもしれない。
　３人は集まってなにやら相談しているようだ、せっかくだし俺も状況を整理しておこう。
　まず俺の勝利条件だが１位になることだ。これは今までと変わらない。そして注意すべきは７渡しか。７渡しでいらないカードを押し付けられ続けると流石に辛い。そして立ちはだかるのはめぐみんとゆんゆんのコンビだな。めぐみんは俺の目を見るだけで大体手札が分かるみたいだし、ゆんゆんは高い知力に従ってアクアと違ってミスをしない完璧なプレイをする。これは中々厄介だ。アクアは自分自身に補助魔法掛けるの忘れるぐらいの馬鹿だからどうでもいい。どうせ敵にもならないだろう。
「そっちの３人相談はもういいかー？」
「いいですよそれじゃあ始めましょう、我らの最終決戦を！」
　あっ、なんか気分が盛り上がってきた、折角だし厨二っぽいこと言って紅魔族風に盛り上げるか。
「我が名は大富豪カズマ！アクセル随一の幸運の申し子にして、栄華を極めしもの！」
「我が名はめぐみん！アクセル随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を極めし者！カズマの野望を破壊するもの！」
「わ、我が名はゆんゆん！紅魔族随一の魔法の使い手にして、やがては里の長となるもの

！大富豪に勝利するもの！」
「我が名はアクア！この世界を見守る美しくも儚い女神にして、水を司るもの！ヒキニートに天罰をくだすもの！」
「「そうなんだ！すごいね！」」
「信じてよっーーー！」
　案外ノリノリだっためぐみん、恥ずかしそうだけどどこか楽しそうなゆんゆん、早速女神説を否定され、しょぼくれるアクアの全員が名乗りを済ませたのでゲームを開始する。うちご自慢の高慢駄女神の華麗な手札捌きで４つのカードの束が一瞬で出来あがったのでそれを受け取る。そして確認するのだが・・・・・・
（ジョーカーが1枚しかない・・・・・・だと？しかも他の手札もいつもより弱めだな・・・・・・）
　さすがに３人合計の幸運値には叶わなかったらしく他の３人にジョーカーを1枚奪われてしまった。明らかにいつもよりいい手札が配られたのかめぐみんとゆんゆんは目を丸くしている。そして２人で何やら手で合図をしている、どうやら手札に合わせていくつか作戦を考えていたらしいな。なら真正面から叩き潰してやろう。俺は他のチート持ちと違って普段は無双なんてできない、ならせめて俺の土俵だけでは無双したっていいじゃないか。

いつもよりも運が悪いとはいえ、それでも俺の手札は十分に強力だ。７が２枚に残りはすべて１０以上でペアばかりだ。負ける要素なんてない。ちなみにアクアからは９と６が贈られてきたので俺は仕方なく１０のペアを送り返すことにした。損しかしてないんだが・・・・・・

～最終戦～

「アクア、分かっていますね？作戦通りお願いしますよ。」
「ええ、分かってるわ。それじゃあ５よ」
「作戦って言ってる割には普通なんだな、じゃあ俺はこのいらない６で」
「私の子をいらない子扱いしないでよ！」
「私はパスしますね」
「えーと、じゃあ私は７です。えっと７渡しは・・・・・・」
やはりきたか７渡し、どうせ対象は俺だろうがこれも計算の内だ。序盤のうちに７を出させてしまえば終盤に決め手に欠いて苦しめられることもない。そもそも俺の手札

は7以上なので1度番を取れば7すら出させないことが可能だ。
「アクアさん、このカードをどうぞ」
「い、いらないわよそんなかーどー、やりやがったわねゆんゆんー」
???ゆんゆんはやたら棒読みなアクアにカードを渡した。どういうことだろうか。確かに俺の手番の前のアクアに強力なカードを渡せば俺は自分のカードの処理に困るだろう。でもそれもたった1回だけの話だ。それで何ができるというのだろうか。その後7をアクアはパスして俺の番になった
「それじゃあ俺は9を出すぞ」
「やはりそう来ましたかカズマ。それじゃあ私は2です」
こいつ序盤から飛ばしすぎじゃないだろうか。いくら俺を止めるのが大事とはいえ切り札の2をたかが9に切る必要はないと思うんだが・・・・・・。なんとなくめぐみんの表情を覗き見ると瞬間、背筋に悪寒が走る。めぐみんは表面上はいつも通りの表情を装っている。しかし、いつも行動を共にしている俺には分かる。これは企みが上手くいく寸前の顔だ。クソゲーもといなんでもありのボードゲームで対戦するときもこんな顔をしている時がある。そういう時は決まって俺が負ける。ならば・・・・・・
「・・・・・・・・・・っ、ジョーカーだ」
「ほぉー流石カズマですね。そうあっさりとはいきませんか」

「ジョーカーに勝てるカードはないからな、この場は流すぞ」
ちなみにスペ3返しは無しでやっている。もちろん俺に都合がいいからだが。しかし仕方なかったとはいえジョーカーを失ってしまった、でも強力なペアカードがあるから勝てるはずだ。
「それじゃ11のペアだ」
「パスです」
「・・・・・・1のペアを出します」
ゆんゆんもかなり強気で攻めてきている。俺も2のペアを持っているから場を取ろうと思えば取れるのだが、あくまでゆんゆんは貧民なので、最重要警戒対象のめぐみんに意識を割くべきだろう。ちなみに当然アクアはパス。というかもはやパスするかどうかすら聞かれていない。聞いてよーーーーっとか言ってるが実際問題ない。場が流れたので次はゆんゆんからだ。
「それでは2を出します」
「えっ？」
思わず声が出てしまった、2を出せば場は確かに流れるだろう。でもそれだけだ。それだけで切り札を捨てるなんて意味がないと思うんだが。するとめぐみんがくつくつと笑い出した。

「パスだ、おいめぐみん！なにがおかしい！」
「いえいえ、ここまで上手くいくとは思ってもいなかったもので」
「ん？どういうことだ」
「こういうことですよ」
　まるで勝ちが決まったかのように、そう言い放っためぐみんは、なんとジョーカーを単体で突き出してきた！
「・・・・・・お前がジョーカーを持っているのは分かってたが、こんなバカな使い方をするとは思ってなかったぞ？」
「同じ使い方をしたあなたには言われたくありませんよ。この場は流しますよ、さて次は私の番ですね」
「そりゃそうだが、もうお前に強い手札なんて残ってないはずだぞ。もちろんゆんゆんにも」
「ふふっ、そうですね。たしかに今は強い手札はないかも知れません。でも作ればいいんですよ」
「強い手札を作る？・・・・・・っ！まさか！」
「ええそのまさかです、私は7を出します、アクア！このカードをどうぞ。そして後は任せましたよ！」

「パスです！アクアさんお願いします！」
　自分の番となり7を出しためぐみんはアクアにカードを送り付ける。ゆんゆんは間を置かずにパスを宣言。アクアはもうその笑みを隠そうともしていない。
「やっと私の時代が来たわ!!8切りよ！」
　7渡しで受け取ったであろう8を使ってアクアは強引に自分の手番を勝ち取る。そしてそれを2人は満足そうに眺めている。そしてアクアは4枚のカードを叩きつけてきた！
　そうか、そういうことだったのか。なんで序盤から全員強いカードを切ってくるのかと思っていたけどその理由が解ってしまった。
　あいつらは強いカードを切ってたんじゃない。弱くなるカードを捨ててただけだったんだ。そしてあの謎の7渡しはアクアに必要なカードを渡していただけだったのだ。そう全ては・・・・・・
「カズマ！女神の前に跪きなさい！これが革命よ！」

4、4枚による革命を喰らった俺はあのあと成すすべなくアクアに蹂躙された。元々

強い手札しかもっていなかった俺はジョーカーも切っていたので、弱さを凝縮して固めた手札を持つアクアに対して本当に何もできなかったのだ。多分めぐみんはこうなることを見越して、俺にジョーカーを切らせてきたのだろう。革命返しできたら俺の勝ちだしな。作戦の主導者はめぐみんだったらしい・・・・・・・やっぱりめぐみんには適わないな、いつも手玉に取られてしまう。

「見なさい！あのカズマのしょぼくれた表情を！私たちの友情の勝利よ！」

「やりましたねアクアさん！私すっごく楽しかったです！」

「いくら幸運なカズマといえど、我らの共同戦線には叶わなかったようですね。それでは一緒に・・・・・」

「「イェーイ！」」

満面の笑みでハイタッチをしている三人組、俺もあの中に入りてぇ・・・・・・。ふとめぐみんがこっちを見てきたので手招きして呼び寄せる。

「なぁめぐみん。どこからこの作戦を考えてたんだ？」

「そうですね、カズマが私との取引をばらしたところからですね。どうにか仕返しをしてやろうと考えていたのですよ」

「それって戦うの決める前からじゃないか・・・・・そういえばなんでアクア自身に『ブレッシング』をかけさせなかったんだ？」

「ああそれですか。アクアの運が悪ければ悪いほど低いカードの集まりがよくなるからですよ。もっとも、アクア一人では革命に必要な4枚のカードが揃うのは稀みたいですが」
「そうだったのか、てっきり馬鹿なだけかと思ってたぞ。それにしてもどうやってアクアの革命に必要なカードを渡したんだ？」
「簡単な話ですよ。アクアには最初に3枚揃っているカードの一つ上のカードを出すように指示してたんです。一か八かだったんですが、上手くいってよかったです。」
「まぁ実際はどれ渡しても4枚揃うぐらいひどい手札だったみたいだけどな。」
「ですね。アクアの不運は本当に飛びぬけて酷いです」
　クスクスと笑っているめぐみんは、笑いを収めて俺に向き直って
「さて、それでは約束なので言うことを一つ聞いてもらいましょうか。」
「うっ・・・・・・お手柔らかにお願いします・・・・・・」
「私はカズマと違って、そんなひどいことはお願いしませんよ」
「一言多いって」
「そうかもしれませんね。それでは今度の女神エリス＆アクア祭を私と2人だけでまわってください」
「えっ」

めぐみんさん？それ罰じゃないですよね？ご褒美ですよね？去年もそうしたかったのだが、色々あって２人では回れなかったのだ。というわけで俺にとっては願ったり叶ったりな申し出なわけで・・・・・・

「めぐみーーーーーんっ、ありがと、ありがとなーーーー！」

「ちょっと、飛びかからないでください！髪も撫でないでくださいよ！あー髪がクシャクシャに、ってどこに顔押し付けてるんですか！うううぅ・・・・・・おい！いい加減にしないと私の爆裂魔法が、ってどこ触ってるんですか！ハッ倒しますよ！」

ちなみにゆんゆんにはボランティア清掃への参加を命じられ、アクアには王都までいって高級酒を大量に買って来いと命じられた。その時、間違って悪魔を漬けてできた高級酒を買ってきたせいでぶん殴られた。理不尽な・・・・・・

第一章
第1話　カズマはレベルが上がった！

――俺たちは激戦の末に魔王討伐を果たした。

その数日後、いつもの屋敷で、俺はいつになく真剣な目をしためぐみんと向き合っていた。

「単刀直入に聞きます。カズマはどうやって魔王を倒したのですか？」

・・・・この質問は俺が一番答えたくない質問だった。

なぜなら、あまりカッコいい魔王の倒し方だとは思えなかったからだ。

・・・・・だってただの自爆だし。そんな話をすれば折角の勇者の株が落ちてしまう。

答えたくなかったので今の今まで適当なことを言って誤魔化してきた。

アクセルの街の連中には、適当にでっち上げた魔王討伐話をしている。

しかし、俺の仲間たちにはまだ本当のことを話していなかった。信じて任せてくれた仲間たちに嘘をつくのは流石に気が引ける。というわけで今のところ真実を知ってい

るのはアクアだけだ。
　そんなわけで、ここ数日、めぐみんとダクネスは必死に聞き出そうとしていた。あれやこれやと理由をつけて逃げてきていたのだが、ついに限界が来たらしい。
　・・・・・・・・・でも、話したくないなぁ。
「・・・・・・・なぁめぐみん？　どうしても話さなきゃダメか？」
「ダメです。話してください」
　そういうめぐみんの声には怒気すらこもっている。どうやら逃げ続けたことに随分怒っているらしい。
　さすがに潮時かな・・・・・・・
「はぁ・・・・・・・テレポートで移動した後、ダンジョンの最下層で爆裂魔法を使ったんだよ・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」
　黙ったまま俯いているめぐみん。
　あれだけ魔王討伐のことを熱く語っていためぐみんのことだ、きっと・・・・・・・
　しばらく沈黙が続いた後、ぽつりぽつりと口を開く。
「それでは・・・・・・・・どうしてカズマは生きているのですか・・・・・？」
「いやもちろん死んだぞ？　俺みたいなやつが生き埋めになって死なないわけないだ

ろ。生きて帰ってきたのは魔王討伐の報酬で生き返らせてもらったからだよ」
　それを聞いた途端に沈鬱な表情になるめぐみん。今度こそがっかりさせてしまったのだろう。
「見損なったか？　でもああするしかなかったんだよ。それこそ俺なんかの命で倒せたんだから儲けもんだろ？」
「・・・・・・やはりそうだったんですね。カズマのことです・・・・・・真っ当なやり方で・・・・・魔王を倒したのだとは・・・・・・・・・思っていませんでしたから」
　俯いためぐみんは心底悲し気に呟く。そうか、そんなにガッカリか。まぁ仕方ないよな。でも俺なりに頑張ったんだ、少しは褒めてほしい。
「おっとそんな顔したって駄目だぞ、俺に勇者としての活躍を期待したって無駄だからな」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
　俺の言葉に反応しためぐみんは小刻みに震えている。・・・・・こいつまさか笑ってるんじゃないだろうな？
　しかしそんな俺の思いに反してめぐみんは。
「ふざけ・・・・・・ないで・・・・・・・」

「おいめぐみん？どうした」
「ふざけないでくださいと言ってるんです！何が『俺なんかの命』なんですか！」
悲憤の表情を浮かべためぐみんが、俺の言葉を遮り激しく言い放つ。
「あなたは・・・・・・あなたは・・・・・・魔王を倒して本当の意味で死ぬつもりだったというんですか！」
「・・・・・・っ！」

声を張り上げ、俯いているめぐみんの目には涙が浮かび、目はいつになく紅く光り輝いている。

「馬鹿です。あなたは大馬鹿ですよカズマ。カズマが死んで魔王を倒せたとしても！私たちは喜ぶわけないでしょう！」
「・・・・・バカバカって、結局魔王を倒せたんだからいいじゃないか、現に俺もここにいるだろ？」
俺だって死にたくはなかった。出来るだけ楽したいとは今だって思ってるし、魔王だってミツルギあたりが倒してくれれば楽だったのにとすら思ってる。それでも何故か、俺がやらなきゃと思ってしまった。結果として俺は魔王討伐を果たしたし、新しく

体も貰って生き返ることが出来た。全てが丸く収まったんだからそれでいいんじゃないのか・・・・・・・?

「分からない人ですね!それではあなたは最期の瞬間何を考えていましたか!?言ってみてくださいよ!」

そう言われて初めて、俺は大きな間違いに気が付いた。俺は、俺の気持ちは・・・・・。それ以上にみんなの気持ちだって蔑ろにしていたのかもしれない。

「・・・・・・もうみんなと会えなくなるのはたまらなく寂しいって考えてたよ、本気で死ぬと思ってたからな」

「何故その心を持っているのに、私たちの気持ちが分からないのですか!私たちを、私をおいて逝かないでくださいよ・・・・・・・ぐすっ・・・・・・・・うぅ・・・・・・・ひっく」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

言い切る前に大粒の涙を流しはじめためぐみんの体はあまりにも小さかった。元々小さいめぐみんの体だが、今のめぐみんからは引き留めなければ吹き飛ばされてしまうような儚さを感じた。だから俺はめぐみんの肩から手を回し、そっと抱きしめた。

「あっ・・・・・・・・・」

めぐみんは小さな体を震わせながら、俺の胸に収まり涙を流している。

――――そのまま過ごすこと数分、顔を上げためぐみんはぽつりぽつりと呟く。
「・・・・・・だいぶ落ち着きました。ありがとうございます。そしてごめんなさい。優しいけど臆病なあなたのことです、カズマ一人なら絶対に逃げていたでしょう。城で闘う私たちのために無茶をしたのですよね？つまり私たちのせいでもあるわけです」
そう言ってうって変わって穏やかな表情を浮かべるめぐみん。
・・・・・・確かにその通りなんだけど、あんまりはっきり言われると・・・・・・。
「ベベ、別にアンタたちのためってわけじゃないんだからね！」
「茶化さないでくださいよ、いえ、まぁこれもカズマらしいといえばらしいですね。それでは私からお願いがあります」
そう言って嬉しそうに微笑み、俺の目を真っすぐ見つめてくる。
「お願い？」
「ええそうです。私と約束してほしいことがあるんですよ」
「約束するかどうかは分かんないけど聞くだけなら聞いてやるよ。なんだ？」
では、と俺に向き直り襟を正し、まっすぐに俺を見つめる深紅の光を湛えためぐみん。
「もう二度と私たちを、いえ、私をおいて逝かないことを約束してください」

・・・・・・・・こういう雰囲気は苦手だなぁ、自然と俺の顔に熱が乗っていく。
それに心臓もうるさい。というかこれ告白じゃないのか？こういう時に俺の人生経験の少なさが恨まれる。
・・・・・・・だったらいつも通りに振舞うしかないな。
「おいおい俺を誰だと思ってる？こと保身においては右に出ることのないあハイごめんなさい。誓います誓いますからそんな目で見ないでください」
間違ったらしい。
・・・・・・・真面目な雰囲気に耐えられなくなってふざけてしまったせいで、いい雰囲気が台無しになっちゃったな。まぁわざと台無しにした面もあるっちゃあるが。
怒りと呆れが混じった複雑な表情で俺を見てくるめぐみん。うぐっ・・・・・・・・その目は結構つらい。
「・・・・・・・誓うよ。もう俺の命を捨てて敵を倒すなんてことはしない」
「本当にお願いしますよ」
「分かったよ。でもさ、めぐみん。俺は本当に弱いんだ。うっかり死んじゃうってこともあるかもしれないぞ」
そうなのだ、実際今でも俺は弱い。養殖を経て数多のスキルを習得しすっかり高レベ

ルになった俺だが、それでも最弱職の冒険者であることは変わらない。より器用貧乏になっただけである。しかも上級魔法などはまだ教えてもらってないので使えない。・・・・・・何故か体に力がみなぎっている気がするが多分気のせいだ。

「私たちがそんなことにはさせませんよ」

嬉しいことを言ってくれるなめぐみん。でも実際今までのピンチのいくつかはこいつのせいでもあるわけで・・・・・・・

「おい、この際だから言っとくが俺が今まで何度も死んできたのは、大半はお前らが好き放題やるからだからな！そこらへんのことちゃんと理解しろよ？」

「まぁそうですねぇ、ダクネスもアクアも大概自分勝手ですからね。まったく、冷静沈着な私がいなければ今頃、って痛いっ・・・・・・いらいでしゅって！ほうぉひっぱらないでくりゃさい」

「言っとくがお前もだぞ！せいぜい頭を冷やすことだな！『フリーズ』！」

「ひゃあああああああああああ」

自分の事を棚に上げてどや顔で話すめぐみんにイラッとしたので頬引っ張った上で頭を冷やしてしやった。うん！すかっとした！・・・・・・・と思ったのだがめぐみんの頭の上に盛大に氷塊が出来てしまった。

「ひ、ひどいですよカズマ、しかもちょっと冷やすどころじゃなくて凍り付いてますっ

て、痛いので早く溶かしてください。頭がキーンとします。」
「あ、あれおかしいな、かなり弱めに打ったはずなんだが、『ティンダー』」
「あっつ！熱いですよカズマ！今度は熱でいじめですか！私焦げちゃいますって！どれだけ私に恨みを持っているんですか！」
「いやいや、本当にそんなつもりないんだって！あ、あれっおかしいな、こんな威力出なかったはずなんだが・・・・・・・」
　フリーズは少し冷やすつもりで、ティンダーは氷を解かす目的で撃ったはずなのだが、実際には氷塊ができ、危うくめぐみんの頭が燃えそうになった。いつもと同じ感覚で魔法を撃ったはずなのだが・・・・・・怒るめぐみんに誠意をもって謝り、何故か意図したより強い魔法が出たことをを説明すると。
「なるほど、つまり急に魔力が上がったというわけですね。杖や特別な装備をを持っていたわけじゃないんですよね？ということは問題はカズマ自身にあると思います。・・・・・・確かに今のカズマからは前よりは遥かに強い魔力を感じますね、まぁ紅魔族には及ばないとは思いますが、それでもかなりの魔力ですよ。冒険者カードを見せてもらえませんか？」
「そういやあれ以来、冒険者カード見てなかったな。ほい、これが俺の冒険者カード・・・だ・・・・・・ぞ？・・・・・・・・・・・・・え？」

「ついに爆裂魔法を覚えたと聞いたので見てみたかったのですよ。それじゃあ見させてもらいますね。・・・・・・・・・・・・・え？」

そこには燦然と光り輝く【レベル７９】の文字があった！

「「なんじゃこりゃああああああああああああああ」」

その日アクセル郊外に、けたたましい二人の声が鳴り響いた。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「・・・・・・・つまり、生き埋めになった超高レベルモンスター達の経験値がすべて俺に入った結果こうなったと」

「そうだと思います。世界最大のダンジョンは２０階層からなり、そこに生息するモンスターは階数に４を掛けたレベルの冒険者が攻略可能なレベルだそうです。」
「ということは６０レベルや７０レベルのモンスターたちがあそこにはいたわけか・・・・・・それら全てをまとめて全て押しつぶせばこのレベルも納得か・・・・・」
「あと、もし爆裂魔法を使ったのが私ならそこまでレベルは上がらなかったと思います・・・・・・・・・・・・あの、なんというか・・・カズマはレベルが上がりやすい体質なので・・・・・・・」
「あーもうわかってるよ！はっきり言っていいぞ、俺は才能がないからレベルが上がり易いってな」
「べ、別にそういうわけでは・・・・・・・」
　ちょっと悔しいけど、俺に才能がないのはこの世界を生きてきて嫌というほど思い知らされた。まぁ才能の塊のようなアイリスや紅魔族みたいな連中を見てきているというのもあるとは思うが・・・・・・
　でも、だからこそこのステータスは少し疑問が残る。少し前、３０レベルもいかないうちにレベルが上がっても能力が殆ど上昇しなくなっていたのだ。てっきり俺のステータスはそこから伸びないのだと思っていたのだが・・・・・
「俺が言うのも恥ずかしい話なんだけどさ、俺みたいな冒険者がたかが８０レベル程度

でこんなにステータスって上がるもんなのか？」
「・・・・・・いえ、さすがにここまでは上がらないはずです。冒険者が最弱と呼ばれる所以の一つがステータスキャップ（能力値の限界）ですからね。そこにカズマの圧倒的な才能の無さを加えればこのステータスの上がり方は不自然です」
「・・・・・・なぁめぐみん、そこまではっきり言われると悲しいんだが」
「あなたが言ったんでしょう！めんどくさい人ですね！」
「うーん、でも確かにこれは不思議だな、いや、まぁありがたいんだがってふわあああああああっ」
突然俺の横にクリスが現れた！
「キミも勇者らしくなってきたってことなんじゃないかな？って助手君？ちょっと驚きすぎでしょ」
「お・・・・・・お頭ですか・・・心臓とまるかと思いましたよ。てっきり暗殺者のアンデッドでもやってきたのかと」
俺の言葉を聞いたクリスは、いやエリス様は突然凄まじい剣幕で俺を睨みつける。
「・・・・・・女神である私を薄汚いアンデッド扱いとは冗談にしてはたちが悪すぎますね。天罰を喰らわせますよ。具体的にはジャンケンに勝てなくなる呪いや、旅先で財布を落とす呪いなどです。」

「ちょ、ごめんなさいごめんなさい。でも、さすがに今その口調はまずいですよ」
　エリス様の天罰は割と洒落にならないな。アクアのしょうもない天罰とは大違いだ。でもこんなこと言って大丈夫だったんだろうか。めぐみんはキョトンとした目でクリスを見つめている。
「え?·どうしてクリスが天罰を喰らわせるのですか?というか今女神って言いませんでした?」
「えっ・・・・・・あっ」
　普段はたった一人で世界を見守るこの世界で最も尊敬する女神様なのだが、何度も一緒に盗賊稼業をやってきた俺には分かる。エリス様は割とぽんこつだし後先考えない部分がある。今更ながら自分の発言に気が付いたクリスが真顔で固まっている。仕方ないフォローを入れるか・・・・・
「クリスはな、エリス様が好きすぎて女神の振りをしちゃうほど敬虔なエリス教徒なんだよ。だからたまーにこういう発作が起こるんだ」
「ちょっ!何言ってるのさ助手君!」
「いやいや、去年の女神エリス&アクア祭りでエリス様の仮装をしてミスコンに参加してたじゃないですか」
「ちょっと!?それは助手君がそうしてくれって言ったからでしょ!?」

「うわぁ・・・・・・・・」

めぐみんは銀髪盗賊団のお頭を見つめる尊敬の眼差しから一変して、可哀想な子を見る眼差しをクリスに向けた。

「クリスはアクセルでは数少ない常識人であり、義賊としても尊敬できる人間だと思っていたのですが、そんな趣味があったんですね。驚きです。でも私はその趣味を否定はしませんよ、人はそれぞれ秘密を抱えているものですから」

「あ、ありがとうめぐみんって違うよね!?私にそんな趣味ないからね!?」

「大丈夫ですよ。ダクネスの被虐気質のようなものでしょう?でもあんまり人前で披露しない方がいいですよ。クリスのイメージダウンに繋がってしまいます」

「だから違うんだってばあああああああああああ」

可哀想な子を見る目に耐えかねたクリスは、覚えてろよぉとでも言いたげに俺を睨んでくる。いや、俺がフォローしなければ正体がバレてたんだからむしろ感謝してほしいくらいで恨まれる覚えなんてないわけなんだが。

それはそうと何故クリスはやってきたのだろう。からかって遊んでいるうちに本来の目的を忘れさせてしまったみたいなのでこっちから聞いてみるか。

「それでお頭はどうしてここに来たんですか?何か目的があったんですよね?」

「あーそうそう、話が変な方向に行っちゃってたから忘れてたよ。わた・・・・・・エリス様が助手君に伝え忘れてたことがあったらしいから、私が言伝を預かってきたんだよ」
「クリスが女神エリスの言伝を・・・・・・？本当ですか？ごっこ遊びならちょっと今は辞めてほしいんですが・・・・・・」
「これは本当だよ！私が今から言うのは本当にエリス様の言葉だよ！」
「エリス様になりきりたがっている今のクリスは信用なりません。というかなぜ一人の盗賊であるあなたがエリス様の言葉を受け取れるんですか？」
「そ、それはあれだよ。私はエリス様に命じられて神器回収をしている由緒正しき盗賊だからね。ちょっとだけ特別扱いされてるんだよ」
「そういうものなのでしょうか・・・・・・・・？」
　焦りからか挙動不審になっている今のクリスは怪しい。俺だって正体を知っていなければこんな人の言葉は信じられない。
「まぁまぁめぐみん、お頭がエリス様の言葉を代弁できるってのは本当だからそう怪しい目でみなくていいぞ。俺が保証する」
「その怪しい目をさせている助手君がそれをいうかなぁ!?まったくもう・・・・・・・」
「仕方ないですね。カズマがそういうなら信じますよ」

やっと話がまとまってきたな、クリスがめぐみんに正体を明かしてくれればいいのにとは思わないでもないが・・・・・・

そして咳ばらいをして、クリスが話し始めた。

「勇者特典、それが今キミの身に起こってる変化の原因だよ。それはね――――」

クリスによると俺の不自然な伸びは、俺が勇者になったこと、正確には『勇者になったのに弱すぎたこと』が原因なのだとか。

魔王を倒した勇者は少し大げさに言えば、平和の象徴ともいえる存在でもある。しかしその平和の象徴があまりにも弱すぎるというのは非常にまずい――――そういうわけで俺を蘇生したときに少しだけ手を加えてくれたのだ。

具体的には才能の限界の解放・・・・・・だそうだ。この世界の人間の能力の限界は、大半は生まれによって決まってしまう。平和な日本に生まれヒキニート生活を送っていた俺に、才能なんてものは全く存在しなかった。その証拠がレベル２０代の頃に経験した能力上昇の限界だ。

だから、レベルが上がる時にステータスが大幅に上昇する特典を付けてくれたらし

い。そのおかげで超高レベル冒険者の俺は中級冒険者と上級冒険者の中間ぐらいの力を手に入れたのだ。

・・・・・・・これだけの特典をおまけでもらっておいて、超高レベルの俺が中級冒険者とたいしてステータスが変わらないことにはちょっと思うところはあるが。

その代わりといってはなんだが、スキルポイントはとんでもない数になっていた。それこそ俺が今まで見たスキルをすべて覚えてもまだ余るぐらいだ。

スキルポイントの使い方は色々ある、今までは効率が悪くて取れなかったが各魔法の威力上昇スキルや、ステータス上昇のスキルを取っても良いのだ・・・・・これは中々面白いじゃないか。ここにきて俺の異世界無双が始まったかもしれない！

「お頭、俺にお頭のありったけのスキルを教えてくださいよ！」

「んー？なるほどね。その余りに余ったスキルポイントを活用しようってわけだね！最初に私のスキルに目を付けるとは良い目をしてるよ。さすが助手君。でもそうだね、その代わり今度の神器回収に付き合ってもらうけどいいかな？」

「もちろん」

俺が二つ返事で引き受けると、少し困惑した笑顔を見せてくれた。

「こ、こんなに素直に従ってくれるとは思ってなかったよ。捻くれた普段のキミからは考えられない素直さだね」

今の俺は気分がいいのだ。そしてクリスはお頭である以前に、俺に新たな能力を授けてくれた女神様だ。おれは貰った恩を返さないほどクズじゃない。そして俺は大げさに腕を振り、めぐみんを指差す。

「そしてめぐみん！めぐみんは俺に爆裂魔法関連の補助スキルを教えてくれ。実は俺の今の魔力じゃ爆裂魔法1発すら打てないからな、爆裂魔法消費魔力減少のスキルが欲しいんだよ」

俺の言葉を聞いためぐみんはパァッと表情を輝かせ駆け寄ってくる。

「なんと！カズマも我が爆裂道を歩むというのですか！なんという至福。これこそ我が望みし邂逅！いいでしょういいでしょう、もちろん大歓迎です！爆裂魔法を極めし者としてカズマに手取り足取り教えて差し上げますよ！あ・・・・・・でも今日はもう爆裂魔法を撃った後なので勘弁してください。明日以降にお願いします。あと、その・・・・私も・・・・・・いえなんでもないです」

クリスとめぐみんにスキルを教えてもらう約束を取り付け、クリスを玄関まで送っていく。めぐみんが何か言いたそうにしているが、どうも言い出せないでいるようだ。

「それじゃあ助手君、約束した日に迎えに行くから。よろしく頼むよ！」

「分かりましたよ。それじゃあ細かいことはその日に」

俺がクリスに別れを告げると、頬を少し赤くしためぐみんが飛び出してきて。
「あのっ！私も連れて行ってはもらえませんか？」
「お、おいめぐみん、小さな屋敷のドネリーの時とはわけが違う。さすがに今回は危ないんじゃないか？どうなんですかお頭？」
めぐみんの言葉を受けたクリスは断りを入れるのかと思いきや、何やら考え込んでいる。
「うん・・・そうだね、今回は・・・・・いや・・・・・・・むしろ？・・・・・・・・・・・・・・・うん、決めた！今回はめぐみんの盗賊団の力を借りよう！」
「あ、ありがとうございます！私の盗賊団についに活躍の時がきたのですね！」
「おいめぐみん、さすがにこれは遊びじゃないんだぞ、というかめぐみんの盗賊団ってよく知らないな、どんなのなんだ？」
「そうですね・・・・・・世間知らずの下っ端や、ぼっち紅魔族、アクシズ教徒の変態プリーストなどが参加していますが・・・・・・・」
「そういえば前もそんなこと言ってたな・・・・・・・、というか全員思い当たる節があるんだが」
「あと、入団希望者がアクシズ教徒、紅魔族、王都の騎士なども合わせて３００名以上いますよ」

「何それ凄い！というかもう盗賊じゃなくて傭兵団やれよ」

めぐみん傭兵団について驚愕の事実を聞かされたが多分そのメンバーは全員知っている人だ、というか俺の『妹』はこんな犯罪まがいのことに参加していいのだろうか。そんな疑問を口にする前にクリスが。

「そうだよ、それなんだよ。今回はモンスターである鬼族の館に盗みに入る予定なんだ――」

――鬼族。それは2本、もしくは1本の角を持つ人型のモンスターである。屈強な肉体と高い知能を持ち、上位魔法を使えるものや、人間でいうソードマスターのような立ち回りをする者もいる。言ってみれば人間の上位互換ともいえる存在である。

今回潜入する館は、壊滅した魔王軍の残党が滞在している屋敷らしく、魔王城の宝物庫から持ち出された神器や神器級のアイテムが隠されているらしい。例によって貴族や王族に助けを求めないのは、神器の行く先が保証されないからだ。

「というわけで、いつもと違って相手はぶっ飛ばしちゃっても問題ないわけなのさ。でもそうなると、あたしと助手君だけじゃどうにも戦闘力に不安があってさ、だから戦闘力の高いめぐみん達にも協力してもらえると助かるかなって話でね」

「ふっふっふ、分かりましたよ。この紅魔族随一の魔法の使い手である私をぜひ役立て

てくださいね」

「いや・・・・・あの、どっちかというと残りの人たちに期待してるんだけどね？」

こうして俺たち仮面盗賊団と、その自称下部組織のめぐみん盗賊団との協力が約束された。めぐみんは仲間たちに連絡をとり、予定を合わせるらしい。アイリスに会える日が楽しみだ。・・・・・・というか万が一にもアイリスが怪我をすれば俺の首が飛びそうだな・・・・・・全力で守らなきゃな。

そのためにも早くスキルを教えてもらおう。そうすれば俺は最強になれるはずだ。そういえばウィズに上級魔法を教えてもらう約束をしてたな、明日頼みに行ってみるか・・・・・・

ちなみに、後から気が付いたのだが威力上昇スキルは覚えると魔力消費が増えすぎてあまり使えず、ステータス上昇スキルは元々のステータスが低すぎて殆ど能力が上昇しなかった。この世界はどこまでも俺に冷たいらしい。

第2話　他の誰にも渡したくないんです

「単刀直入に言う。俺を弟子にしてくれ！」
　クリスと盗賊団の活動の約束をした次の日、俺は上級魔法をはじめとする多種多様な魔法を教えてもらうために、アクセル一の魔法使いの元にやってきていた。
「ええっ！で、弟子ですか・・・・・・。時間のある時に魔法を教えるのは一向に構わないのですが、私にもお店がありますし・・・・・・。弟子を取ること自体には憧れがなくもないのですが・・・・・・」
　もちろんその魔法使いとはウィズのことである。めぐみんも大魔法使いではあるが、あれは当たれば勝ちのギャンブル魔法しか使えないので例外である。
　上級魔法を教えてもらうだけならゆんゆんに頼んでもよかったのだが、俺はリッチーのスキルも欲しいのでウィズに頼むしかない。お店があるとのことで俺の弟子入りを断っているウィズだが、弟子を取ることに憧れがあるのか、ウィズはあと二押しぐらいで承諾してくれそうだ。
「前にウィズが魔法を使った時を見て思ったんだが、ウィズって本当に凄い大魔導士だ

よな。若くて美人だし、大人で優しいし。俺が知ってる中で最高の大魔導士だと思うよ」

「そ、そうですか？　わ、私なんてまだまだですから……！しかも若くて美人だなんて・・・・・・」

俺の言葉に照れて慌てているウィズは、まんざらでもなさそうな表情をしている。あと一押しで引き受けてくれそうだ。しかし、店の奥から出てきたバニルが余計なことを言う。

「おっとそこのハーレム小僧よ、貴様の言う若くて美人の大魔導士とは一体誰の事であるか？ここにいるのはとっくに結婚適齢期を過ぎ、実年齢がおばあさんの域に入りつつある店主しかおらぬが。おっとその悪感情、大変美味である。フハハハハハハハハ」

「おいふざけんなよてめぇ！せっかくあと一押しでウィズを説得できそうだったのになんてことを言ってくれるんだよ！」

「・・・・・・・・バニルさん。何度も言いましたが私は２０歳です」

ピシッっという音とともに俺の前にあったコップの中の茶が凍り付く、ウィズは魔力を練り始め、空気が張り詰める。頼むから流れ弾をこっちに当てないでくれよ・・・・・？そんなことを祈っていると、バニルが呆れたように口を開く。

「・・・・・・だから店の中で魔法を使うなといつも言っているであろうが。それにだな、

実際問題貴様がこの小僧の師匠になられると困るのだ。店はどうするのだ?貴様は吾輩との約束を破る気であるか?」
「うっ、それは確かにそうですね。仕入れを担当している私がいなければお店は成り立ちませんもんね・・・・・・・」
「いや?負債生産装置の貴様に求めるのは店番だけであるが。というわけで小僧、貴様の要望は叶わぬ。この店主にはやらねばならぬことがまだまだ残っておるのだ。もっとも、この大量の不良在庫を掃けさえすれば店主にも暇ができるであろうがな」
　そう言ってバニルは俺の方を見てくる。・・・・・・・こいつ、最初から俺に不良在庫を処理させる気だったのか。まぁアンデッドの王であるリッチーにスキルを教えてもらう授業料と考えれば安いくらいか・・・・・。魔王討伐報酬もあるから金ならいっぱいあるしな。
「それじゃあ、授業料としてウィズの店の売れ残りの品を全部買い取るってのでどうだ?それならウィズにも時間ができるだろ?」
「へい毎度!おいそこの人間でもないのに人間の弟子を望む店主よ、さっさと才無き小僧の師となるがよい!」
「ええっ!?店はどうするんですか?というかカズマさん、うちの店の在庫を全部買い取ってくれるんですか?」

「金さえ入れば貴様などいらぬわ！フハハハハハハハ！先日、小僧がマナタイトを買った金を合わせてこれでかなりの金額になるな。この街にカジノを作る計画を進めても良いかもしれんな！フハハハハハハハハハ！」

俺から金を巻き上げたバニルは実に愉快気に笑っている。でも、どうせいつものようにウィズに使い込まれるんだろうなぁ。ほぼ確定しているであろう未来に思いを馳せていると一つの考えが浮かんだ。もしかしたら俺に負債生産装置を押し付けてその間に大掛かりな商売を始めるつもりなのかもしれない。・・・・・・さすが見通す悪魔だな。

こういうわけで、ウィズは一時的にお店をバニルに預け、しばらくの間俺の師匠となってくれることになった。

★★★★★★★★★★

ウィズが俺の師匠となってから一週間が流れた。

朝は早起きして魔法の素振りをし、昼からはウィズの手ほどきを受ける。そして夜は魔法関連の書物を読み込み、早めに眠りにつく。日本でヒキニートをやっていたころに

は考えられないほど勤勉で真面目な生活を送っていた。正直いって家でダラダラしているのが至高の幸せだと思っている俺には似合わない生活だ。こんな生活を送っているのにはいくつか理由がある。

まず一つ目として、単純に魔法の習得難易度が高かったことだ。単純に、名前を叫べば発動する初級魔法。ちょっとした手順が必要な中級魔法。このあたりの言ってしまえば誰でも使える魔法と違って、上級魔法はその習得だけでもかなりの難易度を要する。上位魔法は魔法ごとの身振りや専用の詠唱、魔力の流れなども正確に習得しなければならない。それに、いくらスキルを覚えるだけで魔法が使えるとはいえ、しっかりと魔法の動作や仕組みを理解している者としていない者では大きな差が出るのだそうだ。そのため、ウィズに宿題として魔法の素振りと魔導書の読み込みを課せられたのだ。

そして二つ目だが、ウィズが想像以上の魔法ガチ勢だったことだ。そのため俺も真剣にならざるを得なかった。

「それではカズマさんに質問です。多数の陸上に生息するモンスターと相対した時、どのように対応しますか？」

「ええっと・・・・・・・確か、ボトムレス・スワンプで足止めし、範囲系の大技で仕留める。・・・・・・・で合ってますかね？」

「・・・・・・・５０点、といったところでしょうか。陸に足の着いたモンスターを足止

めをするところは良いのですが、時間のかかりすぎる大技は相手に脱出させるチャンスを与えることもあり、有効打にならないことがあります。こういう時は早めの魔法で、集団の外側の敵の足を重点的に負傷させるといいですよ。そうすれば内側の敵は出られなくなり、大きなチャンスが生まれます。他にも――――」

　それらは普段の温厚なウィズからは考えられないほど、戦略的でガチな戦術だったり・・・・・・・

「それでは今日は私の得意魔法でもある『カースド・クリスタルプリズン』についてお話しますね。この魔法は、古代の魔術大国ザーディアスで開発されたと言われていまして――――」

　必要なのか分からないような魔法の歴史の話だったり・・・・・・・・・・

「今日紹介する魔道具はこちらです！これって私のオススメなんですよ！食べるだけで防御力がとんでもなく上昇するというキューブです！」

　見たこともない謎の魔道具の紹介だったり・・・・・・・・。というか最後のは関係ないだろ。それにウィズのオススメの商品ってことは絶対ろくでもないデメリットがあるに決まってる。ちなみにそのマジックアイテムは食べると防御力が上がる代わりに、普通の人だと気絶するレベルの激痛に襲われるというアイテムだった。・・・・・・・ダクネスが欲しがりそうだし買っておくか。

そして最大の理由は・・・・・・

「それでは今日はここまでです。お疲れさまでした！最近カズマさんはかなり真剣に鍛錬に取り組んでくれてるみたいですね。師匠の私としても嬉しいです。この調子で頑張ってくださいね？」

「は、はいっありがとうございます、これからも頑張ります！ウィズ先生！これからもよろしくお願いします」

自分でも似合わないことを言っているのは分かるのだがこんなことを言っているのは、ウィズの褒めて伸ばす方針に俺がどっぷり浸かってしまったからだ。いざこの状況になって初めて分かったことなのだが、俺は褒められることに心の底から飢えていたらしい。確かに今思えば、この世界を生きてきてカスマだのクズマだの罵倒された覚えはいっぱいあるのに、褒められたことなんて殆どなかったな。

しかもこの状況はよく考えると、美人で巨乳のお姉さんに毎日家庭教師をしてもらっているようなものだ。そんな中で頑張れば頑張った分だけ、お世辞かもしれないが先生に褒められるのだ。恋愛云々はともかく、この状況を喜ばない奴なんてそれこそ男じゃないと俺は思う。

――そんな訳で気合を入れて朝から魔法の詠唱の練習をしていると、ダクネスが心配そうに俺に尋ねてくる。
「なぁカズマ？お前が自主的に努力するなんていったい何があったのだ・・・・・？私は不当な権力の行使はしないつもりだが、お前が困っているようなら手を貸すのもやぶさかではないぞ？」
・・・・・・・は？
「いや、別に何もないけど？　俺は数多の魔王軍幹部に加えて、魔王すら倒した勇者カズマさんだぞ？　そんな勇者が鍛錬をしてたって何もおかしくないだろ？」
「はぁ、お前でなければ何も思わないのだが。・・・・・いや、努力すること自体はいいことなのだが、カズマがやっていると考えると奇妙でな。」
失礼にもほどがあるだろ！謝れ！俺の努力に謝れ！湧き上がる怒りに任せてダクネスを睨みつける。
「おいふざけんなよ！こんなに頑張ってる俺の行動が奇行に見えるのか？そんなに俺が努力するのがおかしいのか？」
「ああおかしいとも。カズマという男は金を得れば怠慢になり、冒険者の責務も果たさず家でダラダラし、風呂上がりの私に嘗め回すようないやらしい視線を向けてくる、そんな鬼畜男のはずだ。それが今のお前はなんだ？毎日早起きして鍛錬に励み、昼は真面

目に討伐クエストを果たし、夜は必死に勉学に取り組む。私の知っているカズマはそんな男ではなかったはずだ！」

こいつ！言わせておけばいい気になりやがって、そもそも今回は本当に文句を言われる筋合いはないはずだ。

「真面目になったんだったらいいじゃねぇかよ！お前はダラダラしてる俺にいつも文句言ってくるくせに、真面目になっても文句を言うんだな。どっちかにしろよこの融通の効かないドＭの変態が！」

「くううううぅぅぅぅ、この容赦ない罵倒！やっぱりお前は私の知っているカズマだったのだな」

こいつの判断基準はどこにあるんだよ。前から思ってたがダクネスは本当にめんどくさい性格してるな・・・・・・・。

と、俺たちのやり取りを眺めていたアクアが俺の方に駆け寄ってくる。

「ねぇカズマさん？　最近、アンタとウィズってば何をやってるの？　街では『ついに貧乏店主さんにも手を出し始めたハーレム野郎』やら『借金まみれの店主さんに体で借金を返させてる鬼畜男』だの噂されてるけど、さすがにそんなことはないわよね？」

「おい待て、なんだその噂、いったい誰が流してるんだ！」

街の連中も好き勝手言ってくれるな！　スキルを揃えたら噂を流している張本人を

見つけてシバいてやる・・・・・・・・・・・・。そういえばこいつらにはまだ俺が弟子入りした話を伝えてなかったな。

「本当は全部のスキルをマスターしてから話そう思って黙ってたんだが、今俺はウィズに弟子入りして魔法を教えてもらってるんだよ。朝の鍛錬は上級魔法を使うために必要だからやってるだけだよ」

そう聞くとアクアはこぶしを机に叩きつけ、ダクネスは期待するような眼差しを向けてくる。

「ちょっと!?女神の従者であるアンタがリッチーに弟子入りするなんて認められないんですけど!」

「誰が女神の従者だ!大体、お前らが不甲斐ないから俺がいろいろスキルを覚えて穴を埋めてやろう思ってやってるのに、どうしてここまで言われなきゃならないんだよ!」

魔王を倒したとはいえ、実際問題俺たちのパーティーはジャイアントトードの群れにすら苦戦する点は何も変わってない。勇者御一行がそれはさすがに恥ずかしすぎる。

そんなことを考えていると、さっきから目を輝かせて俺を見つめてくるダクネスが。

「な、なぁカズマ?その魔法とやらはどこまで覚えてるんだ?」

「・・・・・・一応、上級魔法とリッチーのスキルは一通り教えてもらってるから使えるぞ。練度が低すぎて安定してないけど・・・・・・」

「まさかカズマが上級魔法を覚えたのか!?しかも先ほどから練習している詠唱は上級雷魔法か!!凄いではないか!」

「ま、まぁそうだけど。そこまで言われると照れるな・・・・・・。いやうん、今の俺は前までとは違うんだ、尊敬を込めてカズマ様と呼んでくれたっていいんだぞ?」

さっきは努力を否定されてイライラしていたが、逆にここまでまっすぐに褒められると照れるな・・・・・・。そんなことを考えていると、ダクネスは頬を赤らめながら。

「その・・・・・・。カズマ、私は高い魔法耐性を持つ。どうだ、ここは一つお前の雷魔法を私に試してみないか?私たちはパーティーメンバーだ。ならば仲間のスキルの威力を把握するのは当たり前ではないだろうか!?」

変態は息を荒くし、俺の方を期待するような眼差しで見つめてくる。・・・・・・・こいつ俺を褒めてるわけじゃなくて、自分が魔法を受けたいだけだったな。

「いや、お前話聞いてたか?バインドの時とはわけが違う。俺が練習してるのは高い威力を持つ上級魔法だぞ?それに、今の俺は大幅にパワーアップしてるからな。いくらダクネスが硬さ全振りとはいえ無傷では済まないぞ?雷魔法を試したいなら中級魔法なら使ってやってもいいが・・・・・・」

前までの俺なら上級魔法を覚えても、無駄に硬いダクネスには電気マッサージぐらいの効果しかなかっただろう。だが今の俺は大きく上がった魔力とウィズの指南により

一撃熊ぐらいなら難なく倒せるようになっている。さすがにそれを変態とは言え仲間に撃つのは・・・・・・・・・・。

だがそこの変態はそんな俺の言葉にさらに興奮した様子で。

「上級魔法がいい!!そうでなければ気持ち良くな・・・・・・・・ではなく、それでいい。今練習している方の魔法を試さないと意味がないだろう?」

「・・・・・・・・・・今気持ち良くないって言ったか」

「言ってない」

「いや確かに言ってたろ」

「言ってない。・・・・がそんなことはどうでもいいから早くしろ、貴様はあんなに気持ちよさそうな雷魔法が使えるというのにお預けにするつもりか!?」

こいつ開き直りやがった!変態の相手をするのがもう面倒になってきた俺はダクネスに向き直り手を突き出す。

「じゃあいくぞ!『クリエイトウォーター』からの『カースド・ライトニング』!」

それを受けまずは水が、そして次に黒い雷撃がダクネスに襲い掛かる。

「ひぎゃあああああああああ、しゅごいのおおおおおおおおお、あぁ・・・・・・いい」

「っっ・・・・・・・・!?」

魔法を受けたダクネスが屋敷中に響き渡る大声を上げ、ビクビクと痙攣して庭に倒れ伏す中、俺は水で濡れたダクネスから目が離せなくなっていた。

ちなみに今のダクネスの服装は薄めの部屋着である。それが水に濡れて倒れてるわけで・・・・・・・・・・ダクネスのエロい肢体やら下着やら何やらが透けて・・・・・・・。見る気はないんだ。そう、目線が勝手に吸い寄せられるだけなんだ。

「・・・・・・っ、はぁっ・・・・・・・・はあっ・・・・・・・！　お、お前というやつはいつも私の予想を超えてくるな・・・・・・!!やはりお前と私の体の相性は最高のようだ!!」

「お、お、お前何言ってるんだよ！紛らわしい言い方はやめろ！大体今回はお前から言い出したんだろ、服が透けてるのだって事故だ事故！」

「そんなことを言っているくせに、さっきから私を嘗め回すようないやらしい視線を向けているではないか!!」

「む、向けてねぇから！」

俺たちのやり取りを見ていたアクアが立ち上がって、呆れたように話しかけてくる。

「カズマがどうしようもなく手遅れなのはもう諦めたけど、ダクネスもその痴女痴女しい性癖をどうにかした方がいいと思うの。正直ドン引きよ？」

「そうだぞダクネスー。お前が性欲をもて余してるのは分かるが勢い余って俺を襲った

りしないでくれよ？」
「ち、ちち痴女とかいうな！これはカズマの魔法威力をこの身で確かめるためでな・・・・・・・・。というか私はお前を襲ったりはしない！」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「ふ、二人して私をそんな目で見るな・・・・・・。くぅ・・・・・・はぁぁ・・・・・・・んっ」
「お前興奮したのか」
「興奮したのね」
「・・・・・・・・・し、してない」
　俺も手遅れなクズなのかもしれないが、目の前の全身を濡らして息を荒くし、二人に罵倒されて悦ぶダクネスはどうしようもなく手遅れだった。

★★★★★★★★★★★

ダクネスとひと悶着あった後、魔法の素振りを終えた俺はウィズとの待ち合わせ場所の森に来ていた。今日は実戦演習の日である。実戦演習自体は初めてじゃないし、危なくなった時にはウィズが守ってくれるので安心して戦うことが出来る。・・・・・・はずなのだが、今俺はおびただしい数の敵に囲まれていた。

『ファイヤボール』、『ライト・オブ・セイバー』ってあっぶな！今の当たったら死んでたぞ！ひいいいいいいいいい敵が、敵が多すぎます先生！助けてくださいーーーーーーーーー！」

「ファイトですカズマさん、今のあなたなら倒せるはずですよ。おっとこっちに敵が『ドレインタッチ』」

俺の救援要請を聞いていたであろうウィズは自分に襲い掛かる敵だけ倒しながら、俺に微笑み返してくる。違う、そうじゃない！早く助けてください。

「いや、本当に無理、無理だから！俺普通の人間だから！勇者でもなんでもないただの一般人だから、いや微笑まなくていいから助けてくださいって！あぁもう！『フラッシュ』」

俺を囲んでいた敵は俺の方だけを注視していたのか効果は抜群だった。詠唱を妨害してくるモンスターの動きが固まっている。チャンスだ！俺は残りの大半の魔力をつぎ込んで魔法を発動する。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ『カースド・クリスタルプリズン』！」

体の奥底から根こそぎ魔力が持っていかれる感覚と共に、氷柱が地面を伝ってほとばしり周囲の敵を氷結させていく。そしてギリギリ全ての敵を固めたところで魔法が止まった。生命力まで削ったのか体がちょっとだるい・・・・・・。俺が体力と魔力を回復させるべく、氷の隙間からドレインタッチをしているとウィズが駆け寄ってくる。

「思った通り、今のカズマさんならこれだけの敵なら余裕でしたね。さすがです」

「いやいや!?全然余裕じゃないですって！正直死にかけてましたって」

「そうでしょうか？　でもその割には冷静に敵の攻撃避けつつ、必要な魔法を撃ててましたよね？　普通なら焦っている人は判断力を欠いてしまうものですが、カズマさんはピンチにこそ実力を発揮しているような気がします。さすがですね」

「あ、ありがとうございます・・・・・・」

文句の一つでも言いたかったが、ここまで真っすぐな目をしたウィズに褒められると何も言えなくなってくる。ちなみに敵の攻撃をなんとか避けられてるのは、『ブレッシング』と『自動回避』の合わせ技のおかげであり、つまるところ運である。あとピンチに力を発揮するのは、出来損ない三人娘と活動するといつもピンチに陥るので慣れているだけである。

そんなことを考えていると、また敵感知に多数の反応がある。これで本日３度目だ。

「ちょっとウィズ先生！また敵感知に反応があるんですが！なんかちょっとおかしいですよ！しかも今日一番の群れですよ。俺はまだ回復終わってないんで戦えませんよ？」
「そうですか。なら今回は私が戦いますね。ちょっと試してみたいモノもありますし」
　そうかそうか、ならよかっ・・・・・・ん？　今、ウィズが試したいモノがあるって言わなかったか？
「あ、あのウィズ先生？その手に持ってるポーションの効果ってなんなんですか・・・・・？」
　俺はもう何度経験したか分からない嫌な予感がしながら、おそるおそる聞いてみる。
「これですか!?これはですね！飲むだけで魔法抵抗力が極限まで上昇するポーションなんです！しかも今回は飲みやすさにも工夫していて、とっても美味しいらしいんですよ！」
「それ絶対いつものダメなやつでしょ!?」
　俺はそのポーションを奪うべく飛びかかった。しかし、ウィズは華麗なステップで俺を避けると。
「ちょ、ちょっとカズマさんダメですよ、そんなに飲みたいなら後で分けてあげますから。これは今から戦う私が飲むんです。」
「違う違うって！ウィズ先生それ絶対飲んじゃダメですよ・・・・・・あっ」

ウィズは瓶の蓋を開けてポーションに口を付けた。お、終わりだ・・・・・・・・

「ふぅ・・・・・・これ凄く美味しいですね。さて戦いに・・・・・ってあれ、すごい眠気が・・・・・・・・・」

ポーションに口を付けたウィズは体から力が抜け、地面に倒れたかと思うとスヤスヤと眠り始めた。あのポーションの効果は多分『魔法抵抗力が極限まで上がる代わりに、凄まじい眠気に襲われる』だったのだろう。そもそもリッチーには高い魔法耐性があるのであんなものはいらないはずなんだけどな。起こそうとしてもどうせ起きないだろうし放置だ。

まぁ俺の魔力もだいぶ回復できたから問題ない。敵が襲い掛かってくる前にテレポートで脱出するだけでいいはずだ。そして俺はテレポートの詠唱を始めて、ウィズに手を触れると――――

ウィズに対してのテレポートが不発した。

な、なんでだ？テレポート用の魔力ぐらいなら回復できたはずなんだけど・・・・・・。ほかにテレポートが失敗するときといえば、魔法に抵抗する時しか・・・・・・ん？魔法抵抗？

あっ・・・・・・・、魔法抵抗のポーションのせいかあああああああああああああああああああ。

俺は現状を整理する。目の前には無防備で眠りこけるウィズ、周りにはあと少しまで迫った屈強なモンスターの群れ、そして魔力切れ寸前の俺。ここから導き出される結論は・・・・・・・・・・・・・・・！

「この世界はやっぱりクソゲーだあああああああああああああああ！」

泣きながらウィズを抱えて逃げる、俺の魂の叫びが森にこだました。

★★★★★★★★★★

それは夜が更け始めた頃、ボロボロになった俺はなんとか屋敷までたどり着いていた。

「ただいま・・・・・・・・・」

「「おかえりー！・」」

玄関のドアを開けると、心配げな表情を浮かべた3人が玄関に飛び出してくる。とい

うか抱き着いて押し倒してきた！

「「カズマーーーーーーー！」」

「ちょ、お前ら押すな痛い痛い痛い、傷が開く、お前らいったいどうしたんだよ？」

「それはこっちのセリフですよ！こんなにボロボロになって一体何があったのですか？しかもこんなに遅くに帰ってきて、どこをほっつき歩いてたんですか!?」

みんなのセリフを代表しためぐみんが俺に馬乗りになりながら紅い目を輝かせ、泣きそうな声で言う。俺はアクアに傷の治療をしてもらいながら今日の出来事を話した。

ちなみに、あの後俺は狭い洞窟に逃げ込みウィズやモンスター達からドレインタッチで魔力を吸い取りながら戦い続けた。ウィズの持っていたモンスター寄せの魔道具に気が付くまでは本当に厳しい戦いを強いられた。

回復魔法とドレインタッチを使える俺だったから何とか戦い続けられたものの、少しずつ回復できないダメージが蓄積されていき、ウィズが目覚めたころには体がピクリとも動かなくなっていた。そして気を失った俺をウィズがテレポートで連れ帰ってくれたのだ。

俺の目が覚めるとウィズはひたすらに謝ってくれた。俺はいいと言ったのだがそれでは気が済まないというので、今度一つお願いをする権利を貰った。まぁあんまり無茶苦茶なお願いをするつもりはないが・・・・・。

そして話し終えるとみんなはホッとしたように息をついている。そんなみんなの様子を見ているうちに、張り詰めた糸が解けたようにウトウトしてきた。それにいつの間にかアクアに膝枕されている。なんというかちょうどいい柔らかさだし、いいにおいがする・・・・・・・・。

そんなことを考えているとニヤニヤしているアクアが。

「カズマさんってばやっぱり私がいなきゃダメダメね！　ねぇねぇ、アンタの傷を治療してあげたこの私に向かって言うべきことがあると思うんですけど？」

「・・・・・・・・・いつもありがとな。問題ばっか起こすけどお前の回復魔法には本当助けられてきたし・・・・・・・お前といると安心するよ・・・・・・・・」

「!?　そ、そこまで言われるとは思ってなかったんですけど。あ、あ、でもそうよね私ってば偉いでしょ！」

何故か顔を赤くして照れてるアクアが得意げな顔で鼻をフンと鳴らしている。・・・・・・俺何か変なこと言ったかなぁ？　何も考えられないや・・・・・・。

「カズマカズマ！私には！私には何かないのですか!?」

「私にも何かないのか!?私はいつもカズマの盾となっているはずだが？」

めぐみんとダクネスが身を乗り出して、興奮しながら聞いてくる。・・・・・何を期待しているんだ・・・・・・・？

「・・・・・・・・・・・・めぐみんは仲間思いだし、どんな敵でも一撃で倒せる心強い奴だよな・・・・・・。それにダクネスは真面目で心優しく、王国一の防御力でいつも俺たちを守ってくれたよな・・・・・・・・・２人とも最高の仲間だよ・・・・・・ありがとな」

「!!」

　めぐみんとダクネスは顔を真っ赤にして体をよじっている。ダクネスはともかくめぐみんにそんな趣味あったっけ・・・・・・・・・。いかん、眠い。だんだん瞼が重くなってきて・・・・・・・。

「ちょっと!ちょっとカズマさんこんなこと言う人じゃなかったんですけど!カズマさんってば死んじゃうの!?」

「違うと思いますよ、でも本当に疲れているのでしょう・・・・今は寝かせてあげましょう」

　そんな二人の言葉を聞きながら俺は意識を闇に落とした。

★★★★★★★★★★

玄関で気を失うように眠りについてからどれくらいたっただろうか。気が付けばベッドの上で眠っているようだ。多分誰かが俺の部屋に運んでくれたのだろう。・・・・・それよりさっきから誰かが俺の頭を撫でている。重い瞼を開けて確認すると。

「めぐみんか・・・・・・・どうした？　夜這いか？」

「ち、ち違いますよ。ほんっとデリカシーのない男ですね。カズマが余りにも寝苦しそうにしていたもので、看病をしていたのですよ」

そう言っている黒いワンピースを着ためぐみんを見ると、濡れタオルを手に持っている。俺の体が濡れていることから、おそらく拭いてくれていたのだろう。

「そっか、迷惑かけたな。そういえば他の奴はどうしたんだ？」

「もう真夜中ですしアクアは寝てしまいましたよ。あと、ダクネスもカズマの看病をしたがっていましたが、カズマに夜這いした前科があるので断っておきました。あっ、でもカズマを部屋まで運んでくれたのはダクネスなので明日の朝にでもお礼を言っておいてくださいね」

「なるほど、みんなに世話になったな。俺が変な気分になる前に行ってくれていいぞ」

俺はめぐみんを部屋から出ていかせようとする。というか暗い部屋で二人きりの状況はピュアな童貞にはつらいものがある・・・・・・。めぐみんも何もする気がないか

ら良い雰囲気になる前に出ていって欲しい。
　そんなことを考えていると、突然めぐみんが俺に抱き着いてきた。そして艶っぽい表情を浮かべて、どこか寂し気な上目遣いで・・・・・・・
「二人きりなのに・・・・・・・何もしてくれないのですか？」
　や、やめてくれよ・・・・・・・。窓から射す月明かりが、めぐみんの白い肩を照らしている。
「お、お前はいつもそんなこと言って俺をからかってくれるな。こちとらやりたい盛りの年頃なんだからな。一度その気になった男から簡単に逃げられると思うなよ！」
「その気になってくれていいのですよ？　アクアを連れ戻す前に、終わったらスゴイことをしましょうって約束したではありませんか？　それに・・その、あの、カズマだって・・・・・・まんざらでもないのでしょう・・・・・・？」
　こ、こいつは何を言ってるんだ？　その気になるってのはつまりはそういうことで、俺が童貞じゃなくなるってわけでアレがアレでこれがそれで・・・・・・・。
　それにさっきから俺に抱き着くめぐみんの熱い息が首筋に当たってこそばゆい。あぁ・・・・・・・・イケナイ。これはすごくイケナイ。

「お、お前のことは好きだけど、俺たちはまだ友達以上恋人未満の関係で・・・・・・・・そういうことは」

言い切る前にめぐみんに口を塞がれた事によって、言いかけた言葉が遮られた。めぐみんが俺の首に両手を回し、情熱的に口を吸ってくる。口の内をめぐみんの舌がチロチロと這い、頭がぼーっとしてくる。自然とこちらもめぐみんを抱きしめ、そのままめぐみんに伸し掛かろうとするが。

「・・・・・・・・んっ。私はあなたのことが大好きですよ、たまらなく大好きです」

伸し掛かろうとする前に、めぐみんが急に唇を離す。俺は自然とめぐみんを見つめていた。めぐみんは息を荒くし恍惚とした表情を浮かべながら。そして・・・・・・・

「あなたに好きといわれただけで・・・・・・・私はこんなに嬉しくなってしまうみたいです。気が付いたらキス・・・しちゃってました」

「!!???お、おおおお前それはさすがにそれはエロすぎるだろ!!」

「え、エロいとかもっと他に言い方はなかったのですか・・・・・・・。いえ、まぁこれはこれであなたらしいですね」

正直もう我慢できないというか、下半身が大変なことになってる。早く開放されたいです。

めぐみんを再度見つめて、伸し掛かろうとして・・・・・・・・・そこをめぐみんの手

に制止された。
「待ってください!その・・・・・・すごいことをする前に、カズマの気持ち・・・・・・・聞かせて貰えませんか?」
「俺の・・・・気持ち?　めぐみんのことは俺も好きだぞ?」
「どういうところがですか?」
「あ・・・・・・え・・・・その爆裂魔法とかだな」
「さっきはもっといい褒め方してくれたのに、この男は大事な時にどうして適当なんですかね・・・・・・・・。まぁそういうところも好きと言ってしまった反面怒ることもできないのですが・・・・・・・。」
　ガッカリしたように肩を落とすめぐみんは呆れながらもどこか楽し気な表情を浮かべていた。俺も、緊張してなければもっといいこと言えたんだけどな・・・・・・。めぐみんの良いところは分かるのだがいざ口に出すとなると照れてしまう。それとさっきってなんだ?記憶がないんだが・・・・・・・。
　というかまたお預けをくらってしまいそうな雰囲気になってきた。もうお預けはごめんだ。だったらここは・・・・・。
「じゃあ・・・・・・めぐみん、もう一度・・・・・・・・・キスしていいか?」
「あ、あのっ私も、できれば、もう一度キスしたいところなのですが・・・・・・」

もしかしてこれは断られるパターンか・・・・・・。その割にはめぐみんも耳まで真っ赤にして俯いている。

「えっ・・・・・・ダメか？」

「はい、その・・・・あのですね・・・・・。ここから先をしたいなら責任をですね・・・・・。取ってほしいのですよ」

「ああ、そっか、そりゃそうだよな・・・・・・」

責任・・・・・。はっきり言ってめぐみんのことは好きだが、いざ責任となるとちょっと重いものを感じてしまう。俺はダクネスにも思いを寄せられている。もし俺がめぐみんと恋仲になれば今の関係は崩れてしまうかもしれない。少なくともダクネスの誘惑に屈することは許されなくなるだろう。世間でクズマだのカスマだの言われてる俺だが、それくらいの倫理観はあるのだ。

でも・・・・・・。

それでも・・・・・・・。

その関係を壊してもいいかもと思うくらいには、何をするでもなくめぐみんと手をつないで一緒に楽し気に話しながらデートするのが楽しみな自分もいる。

俺は・・・・・・・・・どうしたらいいんだろう。

「・・・・・カズマは気の多い男です。勇者になってからその周辺をうろつく女も増え

ていますし、その誘惑に負けてしまうのではないかと心配しているのですよ。実際、最近はウィズと仲がいいではないですか。カズマはウィズの事が好きなのですか？」
「ん・・・・？　そりゃウィズの事は好きだけど、それは先生としてだぞ？」
「そうでしたか！それは安心です。実はダクネスもアクアもこのままカズマが出て行ってしまうのではないかと心配していたのですよ。もちろん私もです」
　そんな心配をかけてたんだな・・・・・・。それで最近やたらとみんなのスキンシップが多かったのか・・・・・・。めぐみんは俺に背中を向けて言葉を続ける。
「・・・・そんな気の多いカズマですが、変なところで誠実なのも知っています。きっとあなたは、一度付き合い始めれば責任をもってくれるでしょう？」
「・・・・・・それは当たり前のことだと思うんだが。さすがに俺もそこまでクズじゃない」
　めぐみんは俺の答えを聞いて満足げにクスクス笑っている。
「実はですね、私はカズマから手を出してくるまで待っておこうと思っていたのですよ？実はここ数日、私はずっと部屋でカズマのことを待っていたのです」
　な、なんてかわいい奴なんだ。めぐみんは、俺のことを思いながら部屋でずっと待っていてくれていたのか！
　ヤバい、嬉しい。こんなに真っすぐな好意を向けられて嬉しくないわけがない。

「でも今日、気が変わったんです。私はいつものようにカズマの帰宅を待っていたのですが、カズマがいつになっても帰ってこなくて・・・・・・・。もし、このまま一生帰ってこなかったらと考えると・・・・・・・本当に・・・・・・・本当に寂しくて・・・・・・・切なくて・・・・・・頭がおかしくなりそうで・・・・・・・・。それで気が付いたんです」

そう言っためぐみんは俺に向き直る、その目はいつになく真剣で過去最高の紅い輝きを放っていた。そして・・・・・・・・・・

「他の誰にも、カズマのことを渡したくないんです」

その身の持てるありったけの好意を俺にぶつけてきた。

「・・・・・・・・・だから、ちょっとずるいですがこうさせて貰いました。私がすべてをさらけ出したんです、カズマも正直な気持ちを教えてください――――」

俺は・・・・・・・答えなきゃならない。めぐみんの思いに、真っすぐ正直な気持ちで答えなければならないはずだ。

――今の、俺の気持ちで。

「俺はめぐみんの事が好きだ。エロい事だってしたいし、一緒にデートしたりするの

だって本当に楽しそうで、できれば今すぐにでも恋人になりたい。・・・・・・・・でもまだ責任は持てない。俺は覚悟が出来てないんだ。だから、俺の覚悟が決まるまでまってくれないか？」

今この場で責任を持てると言ってしまえば、きっと俺はこの辛い気持ちからも解放される。本当はそうしたい・・・・・・・・。でもそれでは俺が性欲に負けて付き合ったみたいになる。それじゃあめぐみんの真摯な気持ちを裏切ることになってしまう。それだけは・・・・・・・それだけは嫌だ!!

俺の言葉を聞いためぐみんは満足げにクスクスと笑って。

「・・・・はい、今はそれで十分ですよ。なんだかんだで真面目なカズマならそう言うと思っていました。・・・・・・・本当は私もちょっと切なくなってきたのでやっちゃってくれても良かったんですけどね。」

「じゃあ今から」

「ダメですよ、台無しじゃないですか」

「先っちょだけ、先っちょだけだから！」

「なんですかそれは！　ふざけてるんですか！　だいたいそれで許可する馬鹿がどこにいるんですか!?」

「だ、ダメか・・・・・・・」

あれぇ？俺の国だと有名なセリフだったはずなんだけどな。実際に使ってる人がいたのかは知らないけど・・・・・・

「と、ともかくっ。もしこれ以上のことをしたいならきちんと責任をとってください。私たちが恋人同士になった時には、今度こそすごいことをしましょうね」

「えーーーーーーーーーー」

「残念そうな顔をしないでくださいっ！そんな顔をしている人にはこうです！」

「!?」

めぐみんは俺の頬に突然手を添えた。

唇に熱いものが押し付けられる。

そして俺の唇を貪るだけ貪る。

そして透明な糸を引きながら自身の唇を離した。

頭がくらくらする、理性なんて吹き飛びそうなんですが・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・んっ。これはここまで我慢した私へのご褒美です。それでは」

そう言ってめぐみんは早足で部屋から出て行ってしまった。

えーっと・・・・・・。俺はこの無駄に昂った気持ちをどうすればいいんだ・・・・・・・・。

というか、またお預けかよ・・・・・・。

第３話　お嬢様はいつだってブレない

翌朝。

昨夜はあんなことがあったせいか、悶々としてしまい結局朝まで寝付けなかった。そして外が明るくなってきたので、朝食を取るために居間に降りることにした。

「お、おはようございますカズマ・・・・・・。今朝は早いのですね・・・・・・」

俺と同じく寝不足そうな顔をしためぐみんが挨拶してくる。椅子に腰掛けウトウトする様子から見るに、おそらく一睡も出来ていないのだろう。・・・・・まぁ俺もなのだが。

「早いんじゃない、お前のせいであれから眠れなかったんだよ。仕方ないのは分かってるけど、あれだけ思春期の男の子の事を挑発しておいてお預けとか普通あり得ないからな。昨日の夜からずっと苦しかったんだからな」

「そ、それはカズマのせいでもあるでしょう・・・・？　それにお預けで苦しかったのは・・・・・その・・・・・・・私もなのですが・・・・・・・」

恥ずかしそうに俯くめぐみん。でもなぁ、あれだけ興奮させられた理由は・・・・・・。

「いや、二回もキスしたお前のせいだろ。チュッチュチュッチュと俺の唇を貪りやがって。正直あの時点で無理やり手を出しても良かったんだからな？」
「む、貪るとか言わないでください！ほんっとデリカシーの無い男ですね！・・・・・・・・昨日のことは・・・・・・・私も・・・恥ずかしかったん・・・・・・・ですからね」
　めぐみんは自分の言葉に照れたのか顔を赤くする。・・・・・・・お前こんなやつだったっけ？
「なんなんだよ乙女みたいな反応しやがって！　こっちまで恥ずかしくなるから止めろよ！」
「乙女ですよ！　年齢的にも見た目的にも誰がどう見ても、乙女以外の何者でもありませんよ！　私のことをどういう目で見ているのですか！」
　怒りに任せて両手でバンバンとテーブルを叩きつけるめぐみん。そのまま俺達が睨み合っていると、台所の方からバナナを咥えたアクアが出てきて。
「あしゃっぱりゃからにゃにをこぉーふんしれるの？」
「飲み込め！飲み込んでから喋れ！」
「飲み込んでから喋ってください。はしたないですよ！」
　食べカスを口につけたこいつを見て誰が本当の女神だと思うのだろうか。というかたまに本人ですら忘れている時があるんだよな・・・・・・。するとアクアはバナナを

飲み込んで。
「んっ。それで二人は朝っぱらから何を興奮してるの？　それと、なんで二人とも早起きなの？　カズマさんも最近早起きだけど、ここまでじゃなかったわよね？」
　実際、最近の俺は魔術練習で早起きだし、めぐみんは元々早起きなので早めに朝食を取ること自体は珍しくないのだが、今日はさすがに早すぎたらしい。
　いつもは鈍感すぎて俺たちを困らせているくせに、こんな時だけ目聡いアクア。さすがに素直にめぐみんに告白されたとは言えない。どう言ったものか・・・・・。
「き、昨日は帰ってからずっと寝てたからな・・・・・それで早起きなんだよ。なっめぐみん？」
「こ、ここで私に振るのですか!?え、ええそうですね。き、昨日は何もありませんでしたね！」
　俺の会話のパスを受け取り損ねためぐみんは、焦って微妙におかしい返答をしている。それに怪訝そうな表情を浮かべたアクアが。
「それにめぐみんもなんだかいつもより早起きなのよね・・・・・・・」
　そんなアクアの言葉を受け、めぐみんがビクリと震え目を泳がせる。
「な、なにを言っているんですか私はまぁ大体こんなもんですよ、いつも二人は起きてくるのが遅いからそう思うだけで、それに今日は早く私のアジトに向かわなければならな

いですからね、それにそれに今日はなんだか最高の爆裂魔法が撃てる気がすると私の第六感が言っているので、それはもう早起きだってしたくなりますとも、ええ！」

早口でまくしたてるめぐみんにアクアは首を傾げ、何かを考え込んでいる。

今の俺とめぐみんの関係は、相も変わらず友達以上、恋人未満の関係である。ちゃんとした恋人に昇格するまではダクネスとアクアとも内緒の方向だと二人で決めているのだ。

そんな微妙な状況もあり、俺とめぐみんがお互いをチラチラと見合っていると。

「ふんふんふん、なるほど分かったわ。そういう事なのね二人とも」

いつもは全くもって見当違いの行動しかしないくせに、余計な時に余計な勘を働かせたのか、アクアが何かを察した様にニヤニヤしてきた。

「な、なんですかアクア、私は嘘は言ってませんよ！」

「お前、そのニヤケずらはやめろよ。でないと泣き喚いて俺たちに謝ることになるぞ！」

俺とめぐみんがそう言うも、アクアはにやける口に手を当てたまま・・・・・・。

「ははーん、冷蔵庫に雪国シャーベットが余ってたから、それを目当てに早起きしたのね！　でも残念でした。あれなら今さっき私が全部食べちゃったのでした！」

やはりアクアはいつも通りだった。

・・・・・・・いや、ちょっと待てよ。

「お前ふざけんなよ、あれは俺がわざわざ雪の街から取り寄せた銘菓だったんだぞ！最近頑張ってる俺へのご褒美として用意してたのになんで俺の分まで食べちゃうんだよ。お前らの分だってちゃんと用意してただろうが！お前は割り算もできないのか！」
「何よ！食べちゃったもんはしょうがないじゃない。怒んないで！そんなに怒んないでよ！　スイーツなら私が買ってきてあげるから」
流石に俺の分と決まってたものを食べてしまって申し訳なさを感じたのか、アクアは代わりのものを買ってくれることを約束してくれた。

その後は俺も怒りを収めて、アクア、めぐみん、そして朝食の準備が終わったころに降りてきたダクネスとともに朝食を取りながら雑談する。話題は昨日の俺の戦いだ。
「それにしても、昨日の話ですが、カズマはよくそれだけの数の敵からウィズを守り切れましたね」
「それもそうねー、コボルトに殺されるカズマさんが生き残ったって信じられないんですけど」
「んっ、確かに、カズマの防御力はこの場の誰よりも低かったはずだが」
三人は俺の方を不思議なものを見るような目線を向けてくる。
今の俺は超成長期だ、疑問に思うのも無理はない。

「そりゃレベルドレインを繰り返して、いろんなスキルを覚えたからな。だから今の俺は大半の敵に対応できるんだよ。まぁ、まだ欲しいスキルはいっぱいあるけど」
「なるほどな、それで他に覚えたいスキルとはなんなのだ?」
　ダクネスは首を傾げて聞いてくる。俺が今一番欲しいスキルは・・・・・・
「そうだなー、例えば死の宣告とか」
「お、おお前はそんな物騒なスキルを覚えて一体何になるつもりなのだ!?」
　俺の言葉を聞いて妙に興奮するダクネス。俺は質問に答える。
「ん?それはもちろん俺の悪い噂を流したやつに死の宣告を掛けて、『その呪いを解除してほしければ、俺に誠意を見せることだな』って言ってやるつもりだが」
「な、なんという鬼畜だ!それはうらやまし・・・・・、いやけしからん!そんなことをしたらお前をとっちめてやるからな!」
　口ではなんか言ってるが、ハァハァと熱い息を吐きながら俺を見てくる変態に説得力なんて無い。そういえばこいつ、ベルディアに死の宣告を掛けられた時も悦んでたな。
「さすがにそれは冗談だよ。それにダクネスは俺の事を悪く言いふらしたりしないだろ?だから関係ないはずだよ」
「あ、あああ勿論だとも。わ、私はカズマの悪い噂なんて流したりしていないぞ・・・・・?」

・・・・・なんでこいつは微妙にかみ合わない返事をしてくるんだろうか？　もしかしてアクセルの街に俺の悪い噂を流しているのはコイツなのか？　だったら許せないのだが・・・・・・。

そんなことを考えながら怪訝な表情を浮かべていると。さっきまで会話を聞いていたアクアが耐えかねて俺に飛びかかってくる。

「ちょっと！アンタなんでウィズのスキルならまだしも、汚らわしいデュラハンのスキルまで覚えようとするのよ！　そんな汚らわしい人間がこの神聖な私の傍にいるなんて認められないんですけど!?今度こそアンタの余ったスキルポイントを宴会芸スキルに振り分けてくれるわ！」

「あのなぁアクア、俺は別にアンデッドのスキルが好きなわけじゃない。便利で強いスキルが好きなだけだ。だから、お前が上位の神聖魔法を教えてくれるならっておいやめろ！俺のカードに触るな！　文句があるならさっさとお前のスキルを教えろ！」

無理矢理カードを奪おうとするアクアをいなしながら俺は考える。昨日の戦いだってアクアの使う上位の回復魔法スキルがあればもっと楽に戦うことが出来た。だから正直さっさと教えてほしいのだが・・・・・・。

「い、いやよ！　カズマがヒールを覚えちゃったから私の存在価値が減っちゃったのよ！　これ以上私の居場所を侵食させてたまるもんですか！」

そんなことを言って青い顔をしながら首を振り、提案を拒絶してくる。
そして言葉を続ける。
「大体、魔力が貧弱なカズマが私のスキルを覚えたって半分も効果を発揮できないはずだわ。だからカズマには、この私の回復魔法が必要なのよ！だからもっと感謝して！そして甘やかして！」
ドヤ顔を浮かべるアクア。どうしてこいつはこんなに得意げなんだろう？　ムカつくからその頬を引っぱたいてやりたいんだが？
「半分も効果を発揮できれば十分だろ。大体いつも俺を危険な目に合わせてるお前にどうして感謝しなきゃいけないんだよ」
そんな当たり前な主張をしていると、アクアはワナワナと震えて。
「カ、カズマさんったら、昨日はあんなに素直で可愛かったのに・・・・・・。返して！昨日の純粋で可愛かったカズマさんを返してよ！このツンデレニート！」
昨日・・・・・昨日って何の話だ・・・・・・・？　俺が帰ってきてから何かあったんだろうか？
・・・・・・・まぁ何があったにしろ俺がアクアに感謝することなんてないはずだけどな。
そんなことを考えていると、さっきから何かを気にしていたダクネスが。

「そういえばカズマ、どうしてお前は昨日のような高い威力の魔法を使えるのだ？　正直本職のアークウィザードと遜色ない気持ちよ・・・・威力だったと思うのだが？」
　そういうダクネスは珍しく頬を赤らめず、真剣な表情をしている。以前の俺の事をよく知っているだけに不思議に思うのだろう。
　だから俺はニヤリと笑って答えてやった。
「ふっ、この俺の事を誰だと思っている。数多の魔王軍幹部を打ち破り、ついに魔王まで倒した超高レベル冒険者の勇者カズマさんだぞ。それくらい当然だろ？」
　俺の答えを聞いた二人は俺に尊敬の目――――――
　ではなく、軽蔑するような表情を浮かべて
「・・・・・・・・フッ」
　こいつら鼻で笑いやがった!!!
「おい！お前ら俺のこと信じてないだろ！」
「プークスクス、カズマさんが何か言ってるんですけどーー。うちのパーティーで一番レベルの低いカズマさんが何か言ってるんですけど！」
「何を言っているのだ、カズマは今までほとんどの戦いをサボっていたではないか。そんなカズマが高レベルなわけないだろう？」
「あ、あの・・・・・二人とも、カズマはですね？」

さっきまでとは打って変わって、二人は俺の方を可哀想なものを見る目で見てくる、そしてそれをめぐみんが制しようとするが・・・・。

「おい、待てめぐみん。言う必要はない。よしそこの二人、そう思うんだったら賭けをしようぜ。せーので冒険者カードを見せ合ってレベルが高かった方が勝ちな？　俺が勝ったら俺の言うことを聞けよ？」

俺はこの状況を利用するためにめぐみんの言葉を遮る。

「いいわ、その賭け受けてやろうじゃないの！　私が勝ったら最高級の酒と食事で私をもてなして甘やかしなさいよ？」

「いいぞ、よしそうだな、私が勝った時はカズマは土下座をして、今までのことを謝ってもらおう」

自分が負けると露程にも思っていない二人は既に買った後の事を想像している。哀れな奴らめ。俺が勝利を確信してニヤニヤしているとめぐみんが俺に近づいてきて・・・・・。

（あ、あの・・・・・・、さすがにこれはちょっと可哀想だと思うのですが）

呆れた様な表情を浮かべためぐみんが耳打ちしてくる。だが俺は俺を馬鹿にしてきた相手に対して引く気はない、それにあまり酷いお願いをするつもりもない。

（いいから黙っててくれ、別にそんなに酷いお願いをするつもりじゃない）

めぐみんはその言葉を聞いて、ホッと息を吐いた。
「さて、それじゃあアクア、ダクネス準備はいいか？」
「いいわよ」
「いいぞ」
そう言って俺たち３人は、テーブルに冒険者カードを裏返して伏せる。
そして――――
「「せーの！」」
３人の冒険者カードが表返る。
そして勝ち誇ったような顔を浮かべた二人は俺のカードを見て――――
そのまま動かなくなった。
「はい、俺の勝ち」

大見得切って恥を掻いた二人のレベルは３０代だった、ほとんど敵を倒さない割にはかなりの高レベルである。そういえばこの世界ではレベル３０もあれば一端の実力者ということになるらしい。
ちなみにウィズ先生との特訓で俺はレベル８０になった。最早比べるのもおこがましいレベルである。

「二人ともショックなのか固まってしまいましたね・・・・・・・。これどうします?」
　固まった二人の目の前で手を上下させたり、肩をたたいたりしているめぐみん。こういう時にちょうどいい呪文がある。
「待つのもめんどくさいから無理やり起こすか、えっと・・・・・確か弱めで『ライトニング』」
「いてっ、って何すんのよ!」
「んっ・・・・・・。どうやら気を失っていたようだ」
　雷魔法を気付けの魔法として使って無理やり起こした。ちなみにこれは俺がウィズ先生との訓練中にやられた方法である。ドレインタッチで無理矢理体力と魔力を補給され、気を失うまで魔法を使い、そして気付けの魔法で起こされる。そんな訓練する日もあった。・・・・・・・今思えば地獄だな、やってるときは気にしてなかったが。
　雷魔法でハッとしたダクネスはあんぐりと口を開けて。
「それにしても驚いたな。まさか８０レベルもあるとは、養殖だけでそこまで上がるものなのか・・・・・・?」
「まぁいろいろあって、高レベルの敵を敵を根こそぎ倒す機会があったんだよ・・・・、まぁそれはいいんだ」
　驚くダクネスとアクアを片目に、俺は大げさに振り返り二人を指さす。

「さて、それじゃあお前ら二人には約束通り俺の言うことを聞いてもらおうか」
「ちょ、ちょっと、ね、ねぇカズマさん？　あんまり酷いことはお願いしないでね？　ホントにホントにお願いね・・・・・？」
「な、なぁカズマ、一体どんなしゅごいことをお願いしてくれるのだ？　はぁっ・・・・はあっ・・・・」
アクアは怯えた様に青い顔で、ダクネスは既に何故か興奮している。そんな二人に向かって俺は願いを告げる――――
「よし、お前らのすべてのスキルを俺に教えろ！」
俺の言葉を聞いた二人は、朝食を食べ残したまま全力で逃げ出した。
「待てやおらああああああああああああああ」
必死に追いかけるが、アクアの補助魔法が掛かっているのかどんどん引き離されていく。っていうかアクアはともかく、なんでダクネスまで逃げ出してるんだ。
しばらく追いかけてから諦めて屋敷に戻ると、食事の残されたテーブルを見ながら悲

しそうな表情を浮かべためぐみんが待っていた。俺は息を切らしながら話しかける。
「はあっ・・・・めぐみん、はあっ・・・・はあっはあっ・・・・めぐみん・・・！」
「ちょ、ちょっとハァハァ言いながら私の名前を呼ぶのは辞めてください！控えめに言って犯罪的ですよ？」
俺の様子を見て、一歩引いためぐみんがそんなこと言ってくる。たしかに一理あるけど・・・・これは約束を守らず逃げたあいつらのせいだろ。
「元々嫌がってたアクアはともかく、はぁ、なんでダクネスまで逃げ出すんだよ」
「知りませんよ。でも二人とも私の作った朝ご飯を食べ残していったのは許せませんね、次はあの二人はパンの耳だけにしてやりましょうか」
地味にえげつないことを言いながら、不機嫌そうに食器を重ねて持っていく。ちなみに俺は既に朝食は食べきっていたので、怒りの矛先にはならないのだ。
「それにしても二人とも速かったな、敵から追われてる時もあの速さで逃げてくれれば楽だったのに」
「それだけ嫌だったということなのでしょう、スキルくらい教えればいいと思うんですがね」
そうだよなぁ、俺が二人のスキルを覚えればこれからもっと楽できると思うんだが・・・・・・。片付けを手伝いながらそんなことを考える。そしてめぐみんの方を見

て。

「そういうばめぐみん、お前は俺が二人からスキルを教わるのに賛成なのか？」

「もちろん賛成ですよ？　あっでも、嫌がるアクアに無理矢理教えさせるのはちょっと微妙だと思いますけどね」

そう言って、食器を洗いながらクスクス笑う。あれっ？　仲間思いのめぐみんなら俺を詰ってくると思ってたんだけどな。

「あれ？　俺はてっきり文句言われると思ってたんだけど・・・・・」

「そんなことしませんよ」

はっきり言い切る。そして洗い物を中断して、上目遣いで尊敬の眼差しを浮かべて。

「だって・・・・・だって・・・・・・・！　最強の最弱職って格好いいじゃないですか！　紅魔族の琴線にビンビンくるのですよ!!　しかもそれがカズマなのですよ!?　それはもう応援しますとも！」

両手をパタパタと振り興奮しているめぐみん。そういえばこいつは格好よさを第一に置く紅魔族だったな・・・・・・。だが俺も悪い気はしない、自分が二つ名を貰うならそれがいいと思っていたくらいだ。

そういえばめぐみんにもスキルを教えてもらう約束をしてたな。

「フッ、お前はあの二人と違って俺の真価を理解してるな。それはそうと、お前も俺にス

キルを教えてくれよ。今日は暇だからな」
昨日は激しい戦いをしたため、今日はゆっくり休んでいいとウィズ師匠に言われている。そのため今日一日は暇なのだ。そんな俺の言葉を聞いて。
「ええ！もちろん喜んでお教えしますとも！　あっでも、午前中は私のアジトに行く予定があるので、午後からなら構いませんよ？」
満面の笑みを浮かべ、そう言ってくれるめぐみん。控えめに言って可愛い・・・・・・。い、いやそれどころじゃない、これはデートのお誘いなのだ。
昨日、あんなことを言われた手前、意識せずにはいられない。正直なところ、デートして俺の気持ちを確かめたかったところもある。
「それじゃあ昼過ぎに屋敷の前で集合な、俺は今から逃げた二人に会いに行く」
「私は昼頃までアジトで過ごす予定です。それではまた会いましょう」
そう言って、俺たちは自分の部屋に戻っていった。

★★★★★★★★★★★★★★★

昼までの時間、俺は逃げたダクネスとアクアを探しに来ていた。
屋敷に帰ってくるまで待っていてもいいのだが、そうなるといつになるか分からな

い。だから俺は多少強引でも無理矢理スキルを教えてもらうつもりだ。
さて、いざ探すという話だが。ダクネスとアクアは見た目だけならかなりの美人で、しかも有名人なのでかなり目立つ。逃げたといっても大抵の場所なら街の人に聞けば分かるのだ。
それはあの二人も分かっているだろう、ということは聞いてもわからない場所に隠れているはずだ・・・・・。そう考えながら俺はダスティネス家の屋敷の前に来ていた。
どうせ正面からは入れてもらえないだろう、ならば・・・・・・・・。
『ライト・オブ・リフレクション』、そして『潜伏』
まずは姿を消す、そして屋敷の横側に迂回する。そして柵越しに・・・・・。
『狙撃』、そして『パワード』
縄付きの矢を、消音のため屋根の付近に打ち込み、筋力強化の呪文で縄をよじ登るための力を強化する。元々の力が弱い俺は筋力強化の呪文が無ければ縄をよじ登るのは辛い。
普段は役に立たない冒険者の様々なスキルを使える恩恵をここぞとばかりに活用して、屋敷に潜入する・・・・・・。
そして――――――。

ダスティネス家の修練場にて荒い息を吐きながら筋トレに励むお嬢様を見つけた。・・・・・こいつ腹筋割れてるの気にしてるくせに何してんだよ。

だがこれは好機だ、修練場には人がいない。俺は姿を消したまま近づき、スキルを発動した。

「『バインド』！」

「なっ！　この縛り心地はカズマか!?　どこから入ってきた!?」

俺の手から縄が飛び出し、ダクネスの肢体に巻き付いていく。ちなみに今使った縄は最高級品のミスリル製である。

床に転がる変態を見下して。

「よぉーララティーナお嬢様、さっきはよくも逃げてくれたなララティーナお嬢様？」

「ラ、ララティーナお嬢様と呼ぶな！　せめてお嬢様にしろ！」

「まぁそれはともかくララティーナ、さっきも言ったがお前のスキルを教えてくれよ。約束だろ？　それとも神に仕えるクルセイダー様が約束を守らないつもりか？　さすが汚い、どうせ貴族連中なんてこんなもんだよ」

「ちちち、違う、こ、これはだな！　そ、そうだ！　さっきスキルを教える約束をしたが、日付を指定していなかったではないか。　・・・・・そうだな、１００年後に教えてやろうではないか」

やけくそ気味に言い訳しながら得意げな顔をする。こいつ！　以前はこんな屁理屈言わない真面目な性格だったのに、誰のせいでこんなになってしまったんだ。

・・・・・・・そういえば、どうしてこいつは俺にスキルを教えたがらないんだろう？

「お前がそんな卑怯な女だなんて思ってなかったよ。・・・・・・それより、どうして教えてくれないんだよ？　今回はお前の嫌がらせ目的じゃなくて真面目な話なんだが」

「だって私が引き受ける敵が減ってしまう・・・・・・・、コホン・・・・、クルセイダーとして私以外の仲間を危険に晒すわけにはいかないのだ」

そう言って、形だけ真面目な顔をするダクネス。

・・・・・・・今ので大体わかった。俺が前衛が出来るようになれば自分の気持ちよさが減ると思ってるのだろう。別に俺はスキルを覚えても危険な前衛をするつもりはないのだが・・・・・・・。

「はぁ・・・・・・。お前は俺がクルセイダーのスキルを覚えたところで前に立つと思っているのか？」

「・・・・・ん、いや立たないだろうな。どうせお前の事だ、私かアクアの後ろにでも隠れて震えていることだろう」

衝動的にダクネスに蹴りを入れそうになるが・・・・・ここは我慢だ。話が進まねぇ。

「腹立つがまぁそういうことだ、俺はもう防御力不足で死にたくないんだよ。・・・・・・
ということでさっさと教えろシックスパックお嬢様!!」
「だ、だだ誰がシックスパックお嬢様だ！　しかもそれが人にモノを教わる態度か！
今日という今日はぶっ殺してやる！」
そう言って俺に硬い体を煽られ激昂するダクネス。
――縄に縛られたままで。
「いやもう何でもいいからさっさと教えろよ！　それに俺はお前を２０億で買ったよな？　ということはお前は俺のモノだ！」
「こ、この私をモノ扱いとは・・・・・・んっ・・・・・・はあっ・・・・はあっ、もっと、もっとだ、もっと強めに私を罵ってくれ！」
そうだった、このお嬢様はいつだってブレない。きっと俺が何を言ってもご褒美にしかならないだろう。いや、メイド服を着させて、親父さんにご奉仕させるか・・・・・？
割と真剣にそんなことを考えながらポケットに手を入れると何かに手が当たった。
・・・・これはキューブか？確かこのキューブはウィズの店の品で効果は・・・・・・。
これはいけるかもしれない！
『ブレイクスペル』、これでバインドは解けただろ？」
「・・・・？なぁカズマ、せっかくのバインドプレイはもう終わりか・・・・？」

そう言って心の底から残念そうにしゅんとするダクネス。男であれば庇護欲が湧かずにはいられない様子なのだが、その理由が残念過ぎる。
俺はニヤリと笑いキューブを取り出す。そしてダクネスの前に突きつける。
「おいダクネス、このキューブを見ろ。これは、食べれば防御力が極限まで上がる代わりに体に耐え難い激痛が走るというものだ。これが欲しければっておいヤメろ！掴みかかってくるなこの欲しがりが」
変態はキューブの説明を聞いた途端に目の色がヤバくなり掴みかかってきた。そして頬を赤らめ息を荒くし。
「教える！　教えるからとっととそのキューブを私に渡せ！　そんな素晴らしいモノを私の目の前でお預けにするつもりか!?」
「わかった、わかったから放せ、よしこれで交渉成立だな」
やっと話がまとまったな・・・・・・。
ホッとして息を吐く。
ふとダクネスの方を見やると、キューブの包装を剥がして今にも食らいつこうと・・・・・・。
「おい待て！　食べる前にスキルを教えろおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

その後、暴れるダクネスを必死で押しとどめ、『デコイ』をはじめ、防御力上昇などのスキルを教えてもらった。
キューブを一口かじったダクネスは、魅惑の自分の世界に閉じこもったらしい。
全身を床に打ち付けながら痙攣していたので、幸福の絶頂にいるのだろう。
というか喘ぎ声がうるせぇ！　メイド連中に見つかるんじゃないだろうか？

目に毒なのでアクアを探しに修練場を後にした。
つ、疲れた・・・・・・・・・。

第４話　アクアと居場所とカズマと

俺は、逃げ出したアクアを追っていたのだが・・・・・・・

「ねぇお願い！お願いだから私にスキルを教えさせてよ！」

「放せぇ！俺はお前からスキルを教えてもらう気はない！」

俺とアクアは何故か逆の立場となり、ダスティネス家の庭園の片隅で不思議なやり取りをしていた。事の始まりは１時間前に遡る。

ダクネスと死闘を繰り広げた俺は、ダスティネス家の屋敷の中で逃げたアクアを探していた。

普段は救いようのないアホの子であるアクアだが、どうでもいい時は妙に頭が良かったりする。そういえば前に、ダクネスのせいで納税させられそうになったことがあったな。その時アクアは俺を囮にして逃げようとしてたんだっけか。

・・・・・・・ということは今回もダクネスを囮に使うことに躊躇いなんてないだろう。それに無駄に目立つアイツは外に逃げればすぐ街で話題になる。だから必ずこの屋敷

の中にアクアはいる。そう考えていたのだが・・・・・・。

『ぜ、全然見つからないな、あいつどこ行きやがった・・・・・・』

探索系のスキルと、潜伏系のスキルを駆使して屋敷の中を隈なく探索したがアクアは見つからなかった。これだけ探しても見つからないということは、アクアしか入れない場所でもあるのだろうか？

そこまで考えて俺は閃いた。あるじゃないか、あいつしか隠れられない場所。俺はニタッと笑いその場所へと向かった。

ダスティネス家にはそれはそれは大きな庭園がある、今は冬だというのに、品種改良でもされた高級種なのか、そこかしこに色とりどりの花が咲き乱れている。そしてなにより、ここには大きくて深い池があるのだ。

俺は池に向かって一直線に歩いていくと、風光明媚な空間に似合わないものが落ちていた。小さな白い陶磁器だろうか。疑問に思った俺はそれを拾い上げる。

『・・・・・・これってどうみても盃だよな？なんでこんなところに――――』

そこまで考えて、ふと盃の落ちていた芝を見てみた。・・・・・・ちょうどさっきまで誰かが座っていたような跡がある。

勝った！俺は確信した。思わず吹き出しそうになる中、俺が勝ち誇ったように池の中

を覗き込むと――――

水底に、胡坐をかきながら酒瓶を咥えているアクアがいた。

どうやらアクアは水中でも酒を飲もうとしていたらしい。まぁもちろん上手く飲めないようで、不思議な顔をしているが。

馬鹿だ、馬鹿がいる!!

堪え切れなくなり爆笑するが、水中で酒瓶を咥え眼を瞑っているアクアには気づかれていないらしい。面白そうなのでこのまましばらく観察していよう。

不思議そうな顔で瓶に蓋をして、いろんな角度から瓶を観察するアクア。どうやらなぜ酒が飲めないか分かってないらしい。水中だからに決まってんだろ。お前それでも水の女神かよ。

おっと耐えかねて瓶をたたき出したな、それで治るのはスー○ァミだけだぞ。

そんなことを考えていると、ふと周りを見渡したアクアと目が合う。

俺が笑顔を浮かべてアクアを見つめると、何故かどや顔を浮かべてシッシッと手を払ってくる。ほぉ・・・・・・?どうやらこいつは自分の立場を理解してないらしいな。それにアクアが何か喋っているみたいだ。遺言ぐらい聞き届けてやろう。そう考えて『読唇術』スキルを発動させる。

『読唇術』は相手の口を見ることで、話している内容が大体わかるスキルだ。ちなみに

アクアは少し精度は落ちるがスキル無しで似たようなことが出来る。相変わらず無駄なところで無駄スペックを発揮する駄女神だ。

『――ってなわけよ！私ってば天才よね！それよりそこのクズマさん！あんたじゃどうせこの水の中に入ってきても何も出来ないでしょ？それより私に謝る気はないかしら？私に三日三晩誠心誠意尽くしてくれたら、スキルの件だって少しは考えてあげなくもないわよ？』

聞くだけ無駄だったな。その言葉をお前の最期にしてやろう。そう思った俺は詠唱を始める。使うのはもちろんダクネスお墨付きの雷魔法『カースド・ライトニング』だ。俺の詠唱をセルフ読唇術で読み取ったアクアはみるみる顔色を悪くしていき・・・・・・。うんうん、また何か言ってるな。よし今謝るなら許してやろう。

『ね、ねぇ冗談よね？冗談って言ってよ！ねぇカズマ』

謝罪じゃなかったらしい。詠唱を終えた俺は右手に黒雷を纏わせながらアクアに微笑んで。

「俺とお前も長い付き合いだからな、俺が本気かどうかなんてお前はわかってるはずだよな？」

『謝るから！私謝るから！お願いだからその魔法を水の中に打つのだけは辞めて！ねぇお願いってばカズマ様ーー！』

さっきまでの余裕が完全に消え失せたアクアはそれはもう必死になって弁明している。だがまだ謝ってない。俺は右手を前に突き出したまま、左手で『上がれ』の合図をする。

観念したアクアは水中から浮き上がり。芝生の上におずおずと正座する。そして――

「誠に、申し訳ございませんでした」

水の女神様はそれはそれは見事な土下座を敢行した。

普段何を言っても聞かないコイツが土下座をしてくるのは珍しい。・・・・・さて、それじゃあさっさとスキルを教えてもらおう。ダクネスで想像以上に時間を使ったので昼までもう時間がないのだ。苛立ちながら頭を下げたままのアクアに声をかける。

「・・・・・これは逃げたことに対する謝罪だよな。それじゃあ約束通りスキルを教えてもらおうか」

「うう・・・・。ホントに教えなきゃダメなの・・・・・・・？」

涙声ながらも拒否するアクア。コイツはまだ抵抗する気なのか。だが今回こそは逃がす気はない。アクアのスキル――――つまり上位の神聖魔法は本当に貴重なスキルで、持っている人間はほんの一握りしかいない。それにアクアの場合効果強化系のスキルも全て揃っているため、一番効率が良いのだ。・・・・さて、どう説得したものか。

「いいかアクア、上位の回復魔法さえあれば俺は昨日みたいな怪我をせずに済んだんだ。回復魔法が弱かったせいで俺が死んだら、お前は責任とれるのか？」
「そ、それは確かにそうだけど・・・・・。でも、傷なら私が付いていけば治せるじゃない・・・・・・」
　少しは思うところがあるのか、申し訳なさそうな顔をするアクア。しかしそれでもアクセル唯一のアークプリーストの誇りは譲れないらしい。ならば・・・・・。
「あのなぁ、いつもお前が付いてこられるわけじゃないだろ。それにもし俺がスキルを覚えればお前は墓地の除霊にも、けが人治療の呼び出しにも行かなくてよくなるんだぞ？　なんならお前は一日中家でゴロゴロしててもいい」
「・・・・・・・・・それはありね」
　神妙な面持ちで頷くアクア。おい、アークプリーストの誇りはどうした。
「じゃあスキルを――」
「って駄目よダメダメ！危うくカズマさんの甘言に惑わされるところだったわ・・・・」
　そう言って涙目のアクアは首を振る。結局説得は振り出しに戻ってしまった。俺は溜息をつきながら最終手段を実行する。口でダメなら力を・・・・・そう、脅しである。
「そもそも俺はお前に賭けに勝って権利を得たんだ、その権利を蔑ろにするっていうなら俺にも考えがあるぞ」

俯いたまま震えているアクア。その表情はここからでは分からない。俺はめいいっぱい見せかけの悪意を詰め込んで言葉を続ける。

「まずはゼル帝を焼き鳥に変える、そしてお前が大切にしている謎の石コレクションや芸に使う小物を全部捨ててやる。そして最後にはお前の神器を売っぱらってやる！どうだ？悔しいか？」

かなり強い口調で言ったはずだ、しかし無反応のアクア。挙句の果てに無視作戦に切り替えたのか・・・・？　流石に苛立ってきた俺はアクアに掴みかかる。

「おい、さすがに無視は卑怯だろ、何かいえ・・・・・よ・・・・・・・・・・・・・」

アクアの顔を見た俺はそれ以上言葉を続けられなかった。体中が罪悪感でいっぱいになる。俯いていたアクアは俺の方を見上げて。

「ほんとに・・・・・ほんとに教えなきゃダメですか・・・・・・・？」

肩を震わせ、大粒の涙をボロボロとこぼしながら、かすれた声でそう呟いた。

ガチ泣きじゃねえか・・・・・・・・・・。

いや、俺が泣かせたのだ。ここまでアクアを追い詰めるつもりはなかった。それにこ

こまで傷つくのだとも思っていなかった。
本当に・・・・申し訳ないと思った。
「いや、やっぱりいいよ。それよりゴメンな。そんなに傷つけるつもりはなかったんだ」
「・・・・・・・・・・・!」
俺の心からの言葉を聞いたアクアは、その沈痛げな表情をいくらか緩める。
そしてそっと俺に抱き着いてきた。
「お、おいアクア。何してるんだお前」
「グスッ・・・・・・カズマさんってば、泣いたら許してくれるのね」
少し安心したような声で、そんな事を言うアクア。・・・・・・俺はこいつの涙に弱いのだ。
「時と場合に寄るけどな、嘘泣きなら容赦なくドロップキックを喰らわせるぞ」
「はいはい、そんなこと言って私の演技には気づけないんでしょ・・・・・・・?」
「・・・・・・お前のはガチ泣きだろ」
「全然違うわよ・・・・・・」
涙声で否定するアクアに説得力なんてものは無い。それにしてもこのまま抱き着かれた状態で話を続けるのはさすがに・・・・・・。いくらこいつが俺の対象外だとはいえ、この状態じゃドキドキもする。それに・・・その、最近のアクアはたまに・・・・

ホントに稀にだが、かわいい時がある。
「・・・・なぁアクアさすがに離れてくれないか？お前ってそんなに誰にでも抱き着くビッチだったのか？」
　俺の言葉を聞いたアクアが一瞬体を強張らせたが、特に何もなく俺に抱き着いたままだ。そしてぽつりぽつりと呟く。
「・・・・・・・そうよね、カズマからしたら私の気持ちなんて分かんないものね」
　・・・・こいつってこんなロマンティックな事言うやつだったっけ？でもまぁ・・・・・。
「なんだ？告白か？　でもごめんな、お前は俺の対象外なんだよー、それにめぐみんとダクネスっていう先客もいるからな。というわけでごめんなさい」
「ちっがうわよヒキニート！なんで私がアンタに告白して、しかもあろうことか振られたみたいになってんのよ!!」
「違うのか!?」
「違うわよ！私が言ったのは、私がスキルをアンタに教えたくない理由よ！」
　違ったらしい。まぁ本気の告白なら真面目に答えなきゃいけないので、正直ホッとした部分もあるが。・・・・理由か、聞いてみたいな。それはそうとしてだな・・・・・・。
「というかいい加減離れろアクア！こっちは思春期の男なんだよ！いくらお前でも無駄に意識とかしちゃうんだよ！」

「嫌、話しているときに顔見られたくないから離れないわよ」
俺に抱き着くより顔見られる方が嫌ってこいつはどういう神経してるんだよ。ちなみに今俺たちはずぶ濡れである。主にアクアのせいで。そのため端から見るとかなり如何わしい状態になっている。目立たない場所にいるので、さすがに見つかることはないのが幸いか。そんなことを考えていると、アクアがゆっくりと語り始める。
「私ね、今でもたまにあのダークプリーストが夢に出てくるの。あいつが来て、そしてみんなにアクセルの街から追い出されるの。そして迫害されて、いらない子扱いされて、最後には独りぼっちになっちゃう。そんな夢を見ることがあるの」
アクアの言うダークプリーストとは元魔王軍幹部のセレナの事だろう。確かにアクアはあいつにかなりの苦手意識を持っていた。なぜならあいつの能力のせいで、アクアは親しくしていた冒険者達にいらない人扱いされたからだ。
そいつは今は無力化され、脅威にはならないはずなのだが、アクアの心に残した傷跡は大きかったらしい。
「別にあいつのせいってだけじゃないの、私ってその・・・・・・ほら、あんまり、物凄く賢いってほどでもないじゃない？それにホントたまにだけど迷惑も掛けちゃうじゃない？」
「賢いというか馬鹿だし、迷惑をかけるのはいつもだな」

「うっさいわよ！ここは黙って聞きなさいな！・・・・・・・・それで昔から、なんでみんな私と仲良くしてくれるのかなーって考えてたの」

表情は分からないが、きっと不安げな顔をしているのだろう。震える声からそれくらいは俺でもわかる。

「それで・・・・・きっと・・・・・・私が・・・・・女神としての強い力を持ってるから仲良くしてくれるんだと思ったの」

俺は頷き続きを促す。

「だから・・・だから！私の魔法の力が貴重だから・・・・・みんな仲良くしてくれるのだと思ってるの。もし・・・・私がスキル教えたら・・・・・私はいらない子になっちゃうんじゃないかって、みんなからも置いて行かれちゃうんじゃないかって！」

話を終えたのか、アクアが俺の元を離れ前に立つ。やはり不安げな顔だった。

アクアが魔法を教えたがらない理由がやっとわかった。あれだけ普段は自信満々な態度をとっているアクアだが、心のどこかでは皆が魔法だけを目当てに仲良くしてくれていると思っていたのだろう。それであんなに『居場所』を失うのを嫌がっていたのか。

馬鹿だなぁ・・・・・・。

あまりにも馬鹿なアクアの考えに俺がクスクスと笑っていると。

「ちょ、ちょっとカズマさん!?今の話するのに私かなり勇気ふり絞ってたんですけど！

それに本当に真剣に話してたんですけど！それを笑うなんて酷いわよ！」
「い、いやぁ、あんまりにもおかしくってさ。アクアも悩むことあったんだな」
ギロッと俺を睨みつけてくるアクア。
そんなアクアに俺は珍しく本音を言ってやることにした。
「いいかアクア、一度しか言わないからよく聞けよ。まずお前が街の皆と仲がいい理由だが、それは単にお前が盛り上げ上手で無駄に高いコミュ力を持ってるからだ！」
「えっ？も、盛り上げ上手？」
アクアは素っ頓狂な声をあげる、なんだこいつ？気が付いてなかったのかよ？いつもこいつが中心になって宴会を盛り上げてるってのに。
「次に冒険者連中に能力目当てにされてるって話だったな、当たり前だろ！誰だって使える奴に話しかけるに決まってるじゃねーか！俺を見ろよ、勇者になったってのに誰も俺を頼ってこない、だったらお前はまだましだろ！」
俺の言葉に思わず吹き出すアクア。・・・・・・恥ずかしいからこんなこと言いたくなかったんだけどな。それに次はもっと恥ずかしい事だ。
「最後に、お前とは長い付き合いだからな、例えお前が女神としての能力を失ってただの人間になったとしても、俺だけは最後まで面倒見てやるよ。い、一応大事な仲間だからな」

い、言い切った。恥ずかしかったけどなんとか言い切ったぞ。顔が熱い。さて、アクアの反応はどうだろう・・・・。少しは元気になっただろうか？

恐る恐るアクアの方を見やると・・・・・・。

「ふあああああああああああああ、うわあああああああああああああ」

「な、なんで泣いてるんだよ!?お、おれは今回は珍しく酷いこと言ってないだろ!?」

無駄に奇麗な顔を涙でぐちゃぐちゃにするアクア。そんな様子にオロオロしていると、アクアが鼻声で。

「ち、違うの、私今本当に嬉しいはずなの、グスッ、なのになぜか涙が出てきちゃうの、ふあああああああああああああああああああああ」

どうやら嬉し涙だったらしい。俺は安心して胸を撫で下ろす。この様子ならもう大丈夫だろう。出来ればもう二度とあいつのあんな顔は見たくない。

しばらく泣き続けたアクアを俺は特になにもせずに待っていた。

数分後。

落ち着いてきたアクアはいつも通りの表情を浮かべて。

「なんだか胸のつっかえが一つとれた様な気分だわ、だから・・・・・その・・・・・ありがとね？二度は言わないわよ？」

滅多なことでは感謝しないコイツがありがとうを言ってきた。満足した俺はニヤリ

と笑って。

「分かってるって。もう泣くなよアクア。お前はいつものそのアホ面の方がお似合いだからな」

「あらまぁカズマさんったら、カズマさんもキモ優しいカズマさんじゃなくて、いつものゲスマでクズマなカズマさんの方がお似合いよ?」

俺たちは互いに睨み合い、いつも通りにいがみ合う。そんな中どっちからだろうか、ふと笑い声が漏れた。

俺はなんだか楽しくなって吹き出し、アクアも心からの笑い声をあげていた。

★★★★★★★★★

しばらく二人で笑いあった後、アクアが意外なことを言ってくる。

「ねぇカズマ?そんなに私のスキルを覚えたいの?仕方ないから教えてあげてもいいわよ?」

さっきから妙にご機嫌なアクアが首を傾げながら聞いてくる。この提案は願ってもない提案だ。

「な、なんなんだよお前、ちょっと優しすぎて不気味だぞ?どうしたんだ?」

「うーん、まぁサービスよサービス。さっきは・・・・その・・・・・・嬉しいことも言ってくれたしね・・・・・。それでカズマはどうするの？」

そう言ってほのかに頬を赤らめるアクア。・・・・妙にドキッとさせるのは辞めてほしい。

さて、今のアクアなら頼めばスキルを教えてくれるだろう。

俺が一番欲しがっていたスキルがただで手に入るのだ。

最上級の神聖魔法、考えるまでもないだろう。

だから俺は――――

「教えなくていいよ」

そんな俺の返事を受けて、アクアはどこか安心したように微笑む。

めぐみんにとっての爆裂魔法のように。

ダクネスにとってのクルセイダーの矜持のように。

アクアにとってはそのスキルこそが全てなのだろう。実際はそうでなくとも、あいつらにとっては多分そうなんだろうな。

みんな足りない部分だらけで、どこかおかしい奴らだけど、俺にはない譲れないものを持っている。それを俺みたいな本当の半端者が傷つけるのは良くない。

さて、アクアから魔法を教わるのは断念したが、俺は上級神聖魔法を諦めるつもりは

毛頭ない。どう考えてもあれは必要な物だ。どこかにアクア並みに腕がよくて、若くて美人なアークプリーストはいないものだろうか？

・・・・・・まぁいないよな、俺もこの世界で色々な職業の人間に会ってきたが、アークプリーストはアクアとゼスタのおっさんだけだった。

ただでさえ貴重なアークプリーストだ、そんな女神のような人は見つからないだろう。

――――女神？

俺が唯一思いついた、優秀な神聖魔法の使い手に思いを馳せていたからだろうか。

「カズマのそういうところ、私は好きよ」

小さな小さなアクアの呟きを、俺は聞くことはできなかった。

そんなことを露程にも知らない俺は。

「よしっ！今からエリス様にスキル教わりに行ってくる。じゃあなアクア」

そう言ってテレポートで屋敷を後にしようと――――

「させないわ！『セイクリッド・ブレイクスペル』！」

して、アクアに妨害された。俺は舌打ちしてアクアを睨みつける。

「おいアクア！なんで邪魔するんだよ！」

「ふあああああああ、だってだってカズマが私よりエリスなんかを選ぶから！」

いつもの泣き顔で俺に掴みかかってくるアクア。
「ねぇお願い！お願いだから私にスキルを教えさせてよ！」
「放せぇ！俺はお前からスキルを教えてもらう気はない！」
「なんでなんで！　あ、分かったわ！　カズマったらさっき『教えなくていいよ』とか似合いもしない事をドヤ顔で言ってたのを気にしてるのね？」
「返せ！　さっきまでの良い雰囲気を返せよ！俺がめいいっぱいカッコつけたのにどうしてくれるんだこの空気！」
その後俺たちはしばらくいがみ合っていたが、途中でこのやり取りの無為さに気が付いた俺がアクアにスキルを教えてもらって終わった。
スキルを教えるアクアがまた泣いたりしないかと心配していたが、アクアは終始ご機嫌だった。とは言え俺が傷つけたのも事実だ。今日の晩御飯はとびきりのものを用意してやろう。
そんなことを考えながら、２人で屋敷を後にするのであった。

第5話　めぐみん盗賊団と”お頭様”

昼からカズマとのデートを控えた私は、アクセルで一番大きな屋敷の前にいた。
この屋敷は、仮面盗賊団の下部組織である我が盗賊団のアジトである。世間知らずの下っ端が、不動産屋で交渉・・・・・もとい権力で無料で手に入れたものだ。・・・・・・まぁ、あの子にはそんな自覚はないだろうが。
そんな屋敷の前で私は胸に手を当て、深呼吸していた。
集うのは個性的で奔放すぎるメンバーたち、今日こそは皆のペースに飲まれてはならない。仮面盗賊団と我が盗賊団の共同戦線についての相談をしなければならないのに、ここ数回、一度も会議できなかったのだ。
大丈夫。大丈夫、私は強い。
そう言い聞かせ屋敷のドアに手をかけると――――
「これなんなのさ!?　いやーーーーー!助けてーー!スライムに飲まれる!誰か!誰かーーー!」
「ああっ!なんて素晴らしいのっ!!　どれだけ飲んでもグレープところてんスライムがなくならないなんて!!　ああっお姉さんはここで死んじゃうの!?」

「馬鹿なこと言ってないで早く助けてよ!!　いやーーーっ!!」
　――そこには紫色の粘液体に全身を包まれた、クリスとセシリーの姿があった。
「あ、あなたたちは何をやっているのですか!!」
　私は二人を助けるべく、杖をもってスライムに飛びかかった。
　この人たちをまとめ上げなければならないのか・・・・・・・。
　・・・・・・・・さっそく心が折れそうだ。

★★★

「ああ・・・・・新作ところてんスライムが・・・・・・。床に落ちた上の部分だけならまだ飲めるかしら・・・・・・？　ってめぐみんさん!!　もしかしなくても私を助けてくれたのね?!　目に涙を溜めて私を心配してくれたなんて!!　なんて愛らしいの!?結婚してください!!」
「違いますよ!・　あなた達の不甲斐なさに思わず泣きそうになっただけって抱き着かないでください!　あ、ああっ・・・・・・体中がベタベタに・・・・・・」
　スライムが倒され放心していたセシリーは、私の姿を見るや否や抱き着いてきた。
　・・・・・・全身に甘ったるいところてんスライムを纏わせながら。おかげでこっちの

服までダメになってしまった。
「ううっ・・・・・ありがとねめぐみん。まさかところてんスライムがこんなに怖いものだとは思わなかったよ・・・・・」
　同じく全身をベトベトにした、涙目のクリスが私にお礼を言ってくる。小さく震えている辺りよっぽど怖かったらしい。
「いえ・・・・・。でもクリスほどの人がこの程度のスライムに手こずるとは思いませんでしたよ」
「私だって・・・・・寝こみを襲われなければこんなことには・・・・・・・」
　どうやら不意打ちでやられただけだったらしい。まぁそうでなければおかしい。クリスは私が最も尊敬する仮面盗賊団のお頭だ。当然戦闘の腕だって凄腕のはず。
　それにしてもこの惨状は・・・・・・。思わず溜息が出てしまう。
「それでお姉さん、今回は一体何をしでかしたのですか?怒らないので言ってみてください」
「ねぇめぐみんさん、どうして私のせいだと思うのかしら?　無条件で疑われるのは私も悲しいのだけれど?」
「違うのですか?」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。それはそうとして、前にも言いましたがめぐみんさん

!!　魔王討伐おめでとうございます!アクシズ教教義に従って、あなたを特別名誉アクシズ教徒に任命します!!」

「いりませんよそんなもの！　誤魔化そうとしても無駄ですよ!さっさと白状してください!」

「べ、別にお姉さんは何もしてないわよ?」

そう言ってセシリーは口笛を吹き始めた。・・・・・・この人は!

この期に及んで誤魔化そうとするセシリーにつめ寄り、前髪を引っ張り上げる。

「ちょっとめぐみんさん!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああっ!なんて冷たい目!こういう目も私は好きだけどやっぱりいつもの可愛いめぐみんさんの方がって、痛い痛い痛い!髪が、私の奇麗な髪が、ごめんなさいめぐみんさん!話すから!話すから離して欲しいの!」

「・・・・・・・分かりました」

私が手を放してやると、さすがに痛かったのか前頭部を撫でているセシリー。何があったかを話させるためだけに、ここまで手こずらされるとは思わなかった。

あの男が普段アクアに対して抱いている感情はこんな感じだったのだろうか。・・・・・これからは少しだけあの男に迷惑を掛けないようにしよう。

そんなことを考えていると、セシリーがおずおずと事の顛末を話し始める――――

「あ、あなたはバカなのですか・・・・・?」

どうやら、今回の事件の原因となったところてんスライムは、セシリーが改造に改造を重ねた逸品だったらしい。どこで拾ったか分からないリッチーの髪の毛を用いて強化したことにより、ドレインタッチの能力を習得。人に触れれば魔力を吸い取り際限なく増殖するものだったとか。さすがに危険すぎないだろうか・・・・・・。

「だって!改造したところてんスライムの方が美味しいんだもの。その都度改造するのが面倒だから勝手に増えるようにしただけよ?」

「・・・・・お姉さんが危険な品を発明しちゃったのは分かりました。でもそれはこの状況の説明になりません。一体何があったのですか?」

まったく反省した様子の無いセシリーは私の問いかけを聞くと、グチョグチョと音を立てながらが立ち上がり・・・・・・。

そしてクリスを指差した。

「・・・・・・クリスさんのせいだと思います」

「ちょっとセシリーさん!?　キミは何を言ってるのさ!」

突然の糾弾にショックを受けるクリス。そんなクリスに向かって、セシリーは自信満々に言い放つ。

「ソファーに寝転ぶクリスさんに、『暇ならアクシズ教徒としてところてんスライムの販売を手伝って欲しいです』と頼んだのに、この人ったらあろうことかそのまま寝てしまったんです。きっとクリスさんったらところてんスライムの素晴らしさを理解してないんだわ！だから寝ているクリスさんのお腹の上に魔改造ところてんスライムを乗せて――――」

「キミかぁ!!　キミのせいなのかぁ！　寝苦しいと思ったら体中をスライムに覆われて身動き出来なくなってビックリしたよ!!　私が死んじゃうとこの世界は大変なことになっちゃうんだからね!?」

「お姉さん・・・・・・さすがにそれは・・・・」

衝撃の事実に激昂してセシリーに詰め寄るクリス。それに私も同調する。本当に一体この人は何をしているのだろうか？珍しく怒り狂うクリスが声を荒げて。

「大体私を暇そうって言ってるけど、セシリーさんだっていつも暇そうじゃないかぁ!!」

「私は暇ではありませんよ？　今日もエリス教会でステンドグラスに石を投げ、エリス像の胸を削り、襲い掛かってきたプリーストの慎ましやかな胸を揉みしだいて――――」

そこまで聞いた瞬間、銀のダガーを抜き、泣きながらセシリーに襲い掛かる。

「うわああああああああああこの神敵め！　私の教会になにをやってるのさあああああああああ！　というか本当に辞めて！私の敬虔な信者たちをいじめないでよぉ

！」

「おっと！邪悪なエリス教徒め！正体を現したわね！」

そしてそれを間一髪で躱すセシリー。何気にクリスが私の教会とか信徒とか言っているのが気になるが・・・・・・。これがカズマの言っていた、クリスのエリス様になりきりたい病なのだろうか。セシリーがおかしいのは分かっていたが、常識人らしきクリスも実はそうじゃなかったらしい。

というかお頭として、そろそろ喧嘩を止めないければ。

「クリスは落ち着いてください。そしてお姉さんはクリスに謝ってください。・・・・・・二人とも私の話を聞いていますか。・・・・・・・おい、それ以上お頭の話を無視するなら考えがありますよ。・・・・・・だから話を聞けって言ってるでしょうが!!!!」

★★★

喧嘩を仲裁・・・・・ではなく乱入して制圧した私は、クリスとお風呂の順番待ちをしていた。3人ともスライム塗れだったが、クリスに話があったのでセシリーに順番を譲ったのだ。

「ごめんねめぐみん・・・・・。思わず取り乱しちゃったよ・・・・・」

「今回の件も全面的にお姉さんが悪いので気にしなくていいですよ。・・・・でもあのお姉さんも、一応悪い人ではない・・・・・・・はずなので嫌わないであげて下さいね」
「私もセシリーさんは悪い人じゃないと、分かってはいるんだけどね。・・・・・これでも人を見る目には自信があるから!!」
そう言ってニカッっと笑うクリス。どうやら相当自信があるらしい。
・・・・・・あれだけアクセルにいて、有名人のバニルやウィズの正体に気が付いていない時点でこの人の目は節穴だと思うのだが。
まぁそれはそれとして、今日の本題に取り掛かることにした。
今日の本題・・・・それはつまり、仮面盗賊団と我が盗賊団の連携の事である。
特に気になるのはカズマとクリスがその正体を明かすのかどうかだ。
私たち全員が仮面盗賊団の正体を共有していれば、これからの連携も取りやすくなると思うのだが・・・・・・。
そんな私の提案は――――
「――だめだね。さすがに正体は明かせないかな」
冷静なクリスの言葉によって打ち砕かれた。
私たちは、仮面盗賊団を応援する気持ちを元に集まった。
『それがたとえ王女でも、いたいけな少女が危険に晒されるとあっては見過ごせない。

困っている人がいるのなら、そこが貴族の屋敷だろうが王城だろうがどんな場所にでも忍び込む。それが仮面盗賊団だ』

これは仮面の男の言葉である。この話を私から聞いたゆんゆんとアイリスは、仮面盗賊団に強い憧れを抱き、本気で協力することを誓ってくれた。

今でこそ我が盗賊団を遊び場として活用している二人だが、カズマやクリスから聞いた仮面盗賊団の新たな活躍話をしてやると、目を輝かせて食いついてくる。それくらいには私と同じ意志を共にする仲間のはずなのだ。

正体を知れば出来る連携も増える、だから仮面盗賊団にとってもプラスになると思うのだが・・・・・・。

「・・・・どうしてですか？私たちがそんなに信用できませんか？」

「信用はしてるよ？　めぐみんたちは私と助手君の正体を知っても、他の人に言いふらしたりしないと思うしね」

クリス、いや仮面盗賊団の頭領はやわらかな口調で、けれどと言葉を続ける。

どこか悪戯っぽく笑いながら。

そして、涼し気な水色の瞳を光らせて言った。

「世界を守る義賊は、いたいけな少女たちの夢を守るのも仕事のうちなのさ」

カッコいい。

なんて格好いいんだろう。

仮面の男と銀髪の頭領は、誰にも理解されず、その行いが知られることがなくとも、世界のために戦い続けている。そしてそれだけでなく、ゆんゆんとアイリスの憧れまで守ろうとしているのだ。

一度正体を知ってしまえばそれは身近な存在となり、今までのように憧れることは出来なくなる。それに今の関係性も壊れてしまうだろう。それで教えられないと言ったのだ。

「それに私たちの行動は世界を護るためだけど、立派な犯罪でもある。正体を知ればその身に危険が及ぶかもしれない、だから神に選ばれたものにしか正体を明かさないのさ」

そして何より私たちの身の安全を案じて正体を隠していたのだ。私にだけ正体を明かしたのは大魔法使いの私が神に選ばれし存在だったからだろう。実に気分がいい。

「・・・・これでめぐみんなら納得してくれるかな。セシリーさんにバレるとそれをネタに脅されそうだから隠してるわけじゃないよ、ホントだよ？」

小声でそんなよく分からないことを言った気がしたが、気のせいだろう。最高の義賊

がそんなことを言うはずがない。

ともかく、銀髪の頭領の慈悲深さに対する浅慮を恥じた私は、出来る限りの謝罪をすることにした。

両手両足を床に平伏して行う謝罪行為、

――――そう、土下座である。

「すみませんでした！　ファンを自称するこの私としたことが、クリス様の考えに気づかないだなんて！」

「めぐみん、いいからいいから、別に謝ることでもないし土下座はやめてえ！あとクリス様って呼び方はなんなのさ!!」

「勿論尊敬の意を込めて言っているだけです。下っ端と呼ぶわけには参りませんので」

「逆に目立つからやめてえ!!　普通に今まで通りクリスで、口調も普通でいいから」

そ、そういうものなのだろうか。仕方ないので顔を上げると、クリスは若干照れ臭そうな顔をしていた。

そしてコホンと咳ばらいをして、何か企んだようにニヤリと笑うと。

「そういえばさ、お頭様に相談があるんだよ」

「お、お頭様!?　他の人ならいざ知らず、仮面盗賊団のお頭にお頭様と呼ばれるのは違和感しかないのですが!!」

「何言ってるのさ、今の私はめぐみん盗賊団の下っ端だからね、お頭様をお頭様と呼ぶのは何もおかしくないよ？　ねっお頭様？」
「うう・・・・・・。わ、分かりました、そ、それでは下っ端様・・・・・・。ご要件はなんでしょうか・・・・・・」
　他の人たちにお頭と呼ばれるのはむしろ大歓迎なのだが、銀髪の首領にそう言われるのは本当に気恥ずかしい。顔が赤くなっていくのを感じる。そんな私の反応を見たのかクリスがニヤニヤして。
「下っ端に様を付けちゃだめだよ？　そこはしっかり呼び捨てで呼ばなきゃ、さぁ下っ端の意見を聞く頭領風に言ってみてよ」
「うううううううう・・・・・・。し、したっぱは何の相談が・・・・・・。もう勘弁してください・・・・・・」
　あまりの羞恥に真っ赤になる顔を両手で覆い隠すが、どうやら耳まで熱くなっているらしい。うう・・・・・・どこかに隠れてしまいたい・・・・・・。
「あはははは、めぐみんったら可愛いね。さて、下っ端扱いされてた意趣返しも出来たし。ここからはきちんとした相談をしようか」
「・・・・・・うう、なんでしょうか・・・・」
　顔が熱すぎて冷えるまで相当時間がかかりそうだ。クリスが何か言っているが正直

それどころじゃない。
「実は今回の作戦にテレポートを使いたいと思ってるんだけど、テレポート覚えてるのってゆんゆんだけだよね？　私たちって5人だから1回のテレポートで移動できないんだよ。だから私が知ってるテレポートを使える人を盗賊団に加えてほしいんだ」
　さっきから話が頭に全然入ってこない、まぁクリスが選んだ人ならその人に任せておけば・・・・・・・。
「・・・・・・ということで助手君を新たにメンバーに加えてほしいんだけど」
　任せておけば・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・え？
「今なんと？」
「・・・・だからカズマ君をメンバーに入れてほしいんだけど」
　カズマというのは私の大好きなあの男の事で、しかも憧れの仮面の盗賊というわけで、それが私の盗賊団の下っ端に・・・・・？
　いやいやいや、おかしいおかしい!!。
「ちょっと待ってください!!　仮面盗賊団のファンであるこの私に、仮面盗賊団のお二人を下っ端扱いさせるつもりであると!?　い、いったい私にどれだけ恥ずかしい思いを

させるつもりなのですか!?」
「まぁまぁそう言わず、頼むよお頭様」
「お、お頭様って言わないでください!!　というか何故あの男なのですか!!」
「それはね――――」
　取り乱す私をなだめるように話すクリスによると、今回、仮面盗賊団の二人はめぐみん盗賊団の一員として屋敷に向かう予定なのだとか。そして、隙を見て別行動を開始し、仮面盗賊団として皆の前に姿を現すつもりらしい。カズマにも話は付けてあるそうだ。そういうことならと私も了承した。
　ギリギリまで正体を隠して、一番いい所を持っていくというのは紅魔族的にもかなりの高評価だ。
「それは格好いいですね!!　敵を騙すならまず味方からというやつでしょうか!?」
「だ、騙すってのは人聞き悪いなぁ・・・・・。指示を出すときに私と助手君がこっちにいる方が都合がいいからだよ。さて、めぐみんも許可してくれたし、後は全員が集まってから説明するだけなんだけど・・・・・」
「・・・・・・・そういえばあの二人は遅いですね。まったく」
　大方、同年代の友人が出来て喜んだゆんゆんが下っ端を連れまわしているのだろう。
　下っ端――――即ち、ベルセルク王女のアイリスは、私たちのアジトに来る頻度が増え

ている。それは、アイリスがドラゴンスレイヤーとしての実力を認められたこともあるが、最大の理由は、魔王が討伐され世界が平和になったからしい。

・・・・・・さすがに、一国の王女が護衛なしでうろつくのはどうかと思うが。案の定、毎回お付きの二人組がアジトに乗り込んでくる。そしてそれをアイリスがあの手この手で撃退したり、そのまま連れていかれたりするまでがセットだ。

ドアの開く音がしたので見ると、風呂上がりで、全身を楽な部屋着に着替えたセシリーがいた。

「ねえ、めぐみんさん、やっぱり私と風呂に入る気はないかしら？　お姉さんはめぐみんさんが望むならいつでもバッチ来いよ？」

「お断りします。クリス、私はゆんゆん達を迎えに行かなければならないので先に風呂に入らせてもらいますね」

私と同じくスライム塗れのクリスに断りを入れる。

「勿論いいよ、なんならお頭様命令でもいいよ？」

「だからもうやめてください!!」

私はキッとクリスの方を睨みつけ、スライム汚れを落とすためにお風呂に入るのであった。

★★★

「クレープぅ・・・・私の・・・・・私のクレープがぁ・・・・・」
「あなたはいつまでめそめそしているのですか。大体、あなたがいつまでも街をふらついてるのが悪いのでしょう」
「お頭様はちょっと乱暴すぎると思います・・・・・何も私の串焼きまで食べなくてとも」
「あなたもあなたですよ。テレポートで移動してきたらすぐにアジトに来て下さいと言ってあるじゃないですか、遊びに行くなら全員揃ってからなら付き合ってあげます」
ゆんゆんから奪ったクレープと、アイリスから奪った串焼きをさっと食べた私は二人を引き連れアジトに戻ってきた。
ちなみに案の定二人は商店街をふらついていた。
「えっ、本当に？　本当にめぐみんが付き合ってくれるの？　えっじゃあ今度アクセルに出来るカジノに遊びに行ってみたいんだけど」
「カジノですか、それはいいですね。って違いますよ!!」
危うくいつものペースに巻き込まれるところだった、今日こそ仮面盗賊団の話をしなければならないのだ。

そのことを告げ、二人を残りのメンバーの待つ居間に招き入れると、目を輝かせたセシリーがバッと立ち上がり。
「あっ!!　めぐみんさんおかえりなさい。そしてゆんゆんさんにイリスさん、今日こそ是非アクシズ教団に入信して私と結婚してください!!　アクシズ教団では重婚も同性婚も認められてるわ!!」
「お姉さんも馬鹿なこと言ってないで座ってください、今から全員に話があります。そしてクリスはこっちに来て下さい」
やたらテンションの高いセシリーをなだめ、クリスをこちらに手招きする。今回の計画についてクリスと口裏を合わせる予定だからだ。
これからの予定を軽く照らし合わせた後、テーブルの前に立ち、そこに両手を突いて身を乗り出した。
「それでは皆さん、今日はお集り頂きありがとうございます。私の活躍により魔王が倒され平和になったことですが、それでも私たちの活動は終わることはありません。そして今日は我が盗賊団の未来に関わる重大発表が二つほどあります」
「「重大発表?」」
クリス以外の３人が首を傾げる。
「めぐみんったら遂に取り返しのつかない犯罪を・・・・?」

「お頭様・・・・・・今度は誰を爆破してしまったのですか・・・・・・・？」
「もしかしてお姉さんに嫁入りを!?」
「あなた達は私をなんだと思ってるのですか!!　違いますよ、一つ目は新たな仲間が加入するという話です。」
　テーブルをバンバン叩き、新メンバーが加入することを告げる。
　流石に真面目な相談だと理解したのか三人もうって変わって真剣な表情で私を見つめてくる。
「今日はこの場にはいませんが、まぁ全員面識があるので問題ないでしょう。新しい仲間というのはカズマのことです」
「ええっ!?　カズマさんが参加するの？　前に誘ったけど断られたって言ってなかったっけ？」
「ま、まぁ我が盗賊団の活躍を聞いて、加入する気になったのでしょう・・・・・・」
「私たちの活動って、友達と遊ぶことじゃなかったっけ」
「友達と遊びたいだけなら今すぐ出て行って、二度と帰ってこないで下さい」
　一瞬で涙目になったゆんゆんを片目に、残りの二人を見やるとアイリスは不思議そうに首を傾げ、セシリーは肩を震わせ顔を俯かせている。
「・・・・・確かにお兄様と行動を共に出来るのは嬉しいのですが・・・・・・。これは

一体・・・・・？　大丈夫なのでしょうか・・・・？」

よく分からないことをブツブツ言っているアイリス。・・・・・・この子はあの男を慕っているのだから素直に喜べばいいのに。

そんなことを考えていると、セシリーが急に立ち上がったかと思うと、私に詰め寄り、

「男であるカズマさんが、私のロリっ子ハーレムに入ってくるなんて・・・・・・。許せないわ!!　せめてカズマさんが良い男でお金持ちだったら恋人にしてあげてもいいのだけれど・・・・・・。あれ？カズマさんって勇者だから名声はあるし、アクセル一番のお金持ちよね・・・・・・。そうだわ！　私カズマさんと結婚するわ！　そして養ってもらって、めぐみんさんと毎日イチャイチャするの!!」

「ふ、ふざけないでください!!　それにカズマはろくな男ではありませんよ!!」

こんなふざけた人にカズマは渡せない。というか大好きなダクネスやアクアであっても渡す気はない。私はもう決心したのだ。歯を食いしばってセシリーを睨みつける。

それに対して何故かセシリーは優し気に微笑み。

「ふんふん、なるほどね。お姉さん分かっちゃったわ!!」

「な、なにが分かったというのですか。というか微笑むのをやめて下さい」

私がそう言うも、セシリーは柔らかな表情を浮かべたまま耳打ちしてくる。

「めぐみんさんってば、カズマさんの事が好きなのね？」
「ッ・・・・・・・・・・・・・・・・?!?!、そ、そ、そんなわけでは!!」
本当に余計なところで鋭いセシリーの言葉に、私の耳が赤くなった。
自分で言う分には堂々と出来るのだが、人に言われるとどうにも恥ずかしくて仕方ない。しかも昨日のカズマとの事もあって・・・・・・うぅ・・・・・・。
「あらあら、めぐみんさんってば可愛いんだから。お姉さんはその乙女なめぐみんさんの表情が一番好きよ？」
「だ、だから、ち、違いますよぉ・・・・・」
すっかり恋心を見抜かれてしまった私は体中から力が抜けへたり落ちてしまう。そんな私の頭を撫でてくるセシリー。
「もしその事について悩んでいるなら相談に乗るわよ？　なにせお姉さんは相談役だからね！」
「・・・・・・・・あ、あとで、お願いします」
この人に隠すのはもう諦めることにした。優し気に微笑むセシリーはなんだかちゃんとした聖職者に見える。この人はたまにこういう意外な姿を見せるからズルいと思う。
そうしていると、手持ち無沙汰だったクリスが近付いてきて。

「あはははは、めぐみんって恋愛に対して男らしいと思ってたけど、やっぱり年相応の可愛らしい部分もあるんだね。それじゃあこの後の話は私が引き継いでおくよ」
「あっ、それもお願いします・・・・」
　そう言って私の代わりに、ゆんゆんとアイリスの前に立つクリス。どうやら、盗賊のツテで仮面盗賊団と接触し、その際に協力を求められたという体で話を進めるようだ。
「なんて健気で気高い人たちなの・・・・・・決めた、私全力でその人たちの支援をするわ!!」
「素晴らしいです!!　他には!!　特にその仮面の男は何か言っていませんでしたか!?」
「あ、ありがとう。あと仮面の男は特に何も言ってなかったよ。変な人だったし」
　ゆんゆんとアイリスは、クリスが引くぐらいの勢いで体を乗り出し話を聞いている。
まぁこの様子なら大丈夫だろう。それよりも今は私の事だ。
「それじゃあ恋の相談に乗っちゃうわよ。とはいってもカズマさんはめぐみんさんにベタ惚れだと思うわよ?　めぐみんさんってばこんなに可愛いらしいんだもの」
「そ、そうなのでしょうか、あの男は気の多い男ですから。言い寄られれば誰にでもホイホイ付いていきそうなのですが・・・・・・」
　これが今の私が抱える一番の不安である。昨日は勇気を振り絞って猛アタックを仕掛けたが、恋人関係になることは出来なかった。・・・・・覚悟が決まるまで待ってく

れ、と言っていたのであと一歩だとは思うのだが・・・・・・。
　すると、顎に手を当て何かを考えていたセシリーが。
「そうねぇ、それじゃあカズマさんをめぐみんさんに夢中にさせるっていうのはどうかしら」
「む、夢中にですか。それが出来るのなら既にやっているのですが・・・・・・。何かいい方法はないでしょうか。今日は昼からデートの予定があるのですよ」
　実際そうできれば文句なしなのだが・・・・・。押し迫るやり方は正直昨日の夜這いで限界だ。
「ああっ!!　なんて羨ましい!!　私も付いて行っていいかしら!?　そしてカズマさんを排除してめぐみんさんとランデブー!!」
「私は真面目に相談しているのですが・・・・・・・・」
「・・・・そうね、流石に今のはお姉さんが悪かったわ。それでデートでカズマさんに何か仕掛ける予定なのね？」
「あっ、はい。そういうことです。何かありませんでしょうか・・・・・・・？」
　一応はスキルを教えるという建前はあるが、どうせそんなに時間は掛からないので残りの時間は全てデートに使うつもりだ。それにしても1対1のデートは初めてなので何をすればいいのか分からない。

「・・・・・男の人って、仲の良い女の子に急に素っ気なくされると、燃え上がるらしいのよね」
「・・・・・・・・・つまり？」
「つまり、『押してダメなら引いてみろ』ってことだわ」
確かに・・・・・・。そういえばカズマに対して押すばかりで引くことはしてこなかった。『押してダメなら引いてみろ』・・・・・・いい言葉だ。
「それはいいですね!!　お姉さんありがとうございます、今日はその方針で頑張ってみます」
「うふふ、どういたしまして。それじゃあ上手くいったら教えてね？」
これはいい事を聞いた。セシリーに感謝を伝え、結果を報告することを約束した。
それと時を同じく、クリス達の方も話を終えたらしい。
「ねえ？めぐみんとセシリーさんはクリスさんから話を聞かなくていいの？　仮面盗賊団との協力ってとっても重要な話だと思うわよ？」
「それは大丈夫ですよ。私とお姉さんは二人が商店街で遊び惚けている間に、話を聞いていましたので」
「それはごめんなさい」
申し訳なさそうに声を揃えるアイリスとゆんゆん。ちなみにセシリーにはクリスが

話をつけてくれた。
「それでお頭様は、セシリーお姉さんと何の話をしていたのですか？　かなり大事な話をしているように見えたのですが」
　そう言って首を傾げるアイリス。ゆんゆんもそれに同調する。それを見た私はフッと笑い。
「子供の二人には関係のない話ですよ。私とお姉さんは大人の話をしていたのです」
「あんたちょっと待ちなさいよ、この中で一番子供っぽい体つきのめぐみんが何を言っているのよ!!」
「私は子供ではありません!!　戦いにおいても勉学においてもお頭様より私の方が大人だと思うのですが!!」
　私の言葉に激しく反応する二人の手下に、やれやれと首を振る。
「そうやって簡単にムキになる所が子供なんです。それに――――」
　そこまで言おうとして、いきり立ったゆんゆんが言葉を遮る。
「またカズマさんを引き合いに出して、私の方が大人っていうつもりなんでしょ？　させないわよ。それに風呂に入ったことも、一緒に寝たこともただの事故なんでしょ？　やっぱりめぐみんは子供じゃない」
「はぁ・・・・その程度の事ではありませんよ」

「な、何よ？　ま、まさかめぐみん？」
唇に指を当て、物憂げな表情を浮かべながら言ってやることにした。
「もうこの唇は、あの男に奪われてしまったのですから・・・・・」
「えええええええええええええ」
「ちょっ!?　な、何をするんですか、やめっ！　やめろお！　放してください!!　たった2回キスしただけですよ」
「ちょっとめぐみんどういう事!?　あの男ってカズマさんの事よね？　これも事故でしょ？事故なんでしょ？　ねぇ事故って言ってよ!!」
「おお、お兄様とキスをしたのですか!?　そ、それも2回も、か、軽い奴なんですよね？」
掴みかかってきた二人を押しのけ、私は乱れた服の襟を正すと。
「いえ、口の中に舌を這わせ、唇を貪り、息が切れるまで続けましたが」
「え、え・・・・・・ま、まさかのディープ・・・・・・？」
「そ、そんな激しく・・・・。めぐみんさんは淑女としてはしたないですよ。・・・うぅ・・・羨ましいです」
私の平然とした様子に、格の違いを知って青い顔をしてよろめく二人。実は言ってて結構恥ずかしいのだが、二人はそれに気づけないだろう。
そんな二人にとどめを刺してやることにした。

「実は今日も、昼からカズマとデートする予定なのです。というわけで今日のところはここでお開きにしましょう？」
「ま、ま、負けただなんて思ってないからあああああああああああ」
「デ、デート・・・・・あの誘われたら誰にでも付いていきそうなお兄様とデート、お兄様を誑かすものは排除しなければ・・・・・・・」
泣きながら屋敷から逃げ出すゆんゆん。そして放心状態でブツブツ呟いているアイリス。そんな二人を見て私は勝ち誇ったように笑っていると――――
「イ、イリス様！　やはりここに居られましたか!!　今日は許可を出した覚えはありませんよ!!　早くお城にお戻りになってください!!」
と、居間の入口から、突然泣きそうな声がかけられた。
振り返ると、そこには白いスーツに身を固め、腰に剣を刺した女性がいる。
ああ、またこの人か。アイリス専属の変態を眺めながらそう思った。
そしてここからはお決まりの展開なのだ。
私もクリスもセシリーも、楽し気にその様子を眺める。
「ク、クレア、お願い！　今だけ、今だけは!!　このままだとお兄様が誑かされそうなんです!!」
「それはとてもいい事です。　あの男はアイリス様にとって悪影響を及ぼす男です。

むしろさっさと所帯をもって尻に敷かれてしまえばいいのです。さぁアイリス様抵抗なさらず」

それだけは許さないとばかりにアイリスに掴み掛ろうとする。しかしアイリスは腰を低くし――

「『エクステリオン』!!」

「ちょっ」

光り輝く長大な大剣を抜き放ち斬撃を飛ばす。そして避ける間もなくクレアに突き刺さった。手加減したのか傷こそないものの・・・・・そのままクレアは気絶した。最近のアイリスは本当に容赦がない。

「あはははは、クレアもレインもラティーナも、私の周りの人達はお兄様との婚約を邪魔するものばかり。そんなのチョー許しません!!　歯向かうものはマジで全員切り伏せます!!」

どこで覚えたのか奇妙な口調で高笑いするアイリス。かつての御淑やかで我儘を言わないお姫様はどこに行ってしまったのだろう。

今日はアイリスの勝ちか。そんなことを考えてクリスと微笑み合う。

と、アイリスの横の空間が突如として捻じ曲がる。

そしてフードを被った魔法使い――レインが現れた。

「申し訳ありません。『テレポート』」
「ああっ、レイン、それはマジ卑怯ですよ!?　私はお兄様のデートを妨害しなけれ――――」
往生際の悪いアイリスと、気絶したクレアはレインに連れられ、そのまま転送されていった。
その愉快ないつもの風景に、残された私たちは思わず笑いあう。
それにしても忙しい人たちだった。
「さて、ゆんゆんとアイリスも行ってしまったことですし、今日はここら辺でお開きにしますか」
「そうだねー、それじゃあまたねめぐみん」
「屋敷の番は私に任せてほしいわ!!」
実質アジトに住み込んでいるセシリー。そしてアジトをお金の掛からない寝床として活用しているクリスに別れを告げる。
今日は『押してダメなら引いてみよ』をモットーにしてみよう、そんなことを考えながらカズマとの待ち合わせ場所に向かう。
――心をウキウキさせる私は、今から待ち受ける絶望など、予想だにしていなかった。

第6話　悪女めぐみんとカズマのお仕置き

アクアからスキルを教えてもらった後、俺はめぐみんと合流するために一旦屋敷に戻ってきていた。

それにしてもデートだ。めぐみんとのデートである。1対1のデートとは初めてかもしれない。二人で行動すること自体は珍しくないが、デートと思えば特別なのだ。

俺は内心わくわくしながら屋敷の前で待っていた。

――そして待ち合わせの時刻がやってきたのだが。

『・・・・・なんでこないんだ？　あいつって時間には正確な奴だったと思うんだが』

めぐみんが待ち合わせに遅れるのは珍しい。だが、正確な時計が少ないこの世界では日本のようにはいかない。そう考えて俺は特に気にすることなく待っていた。

しかし２０分経ってもめぐみんはやってこなかった。

『もしかして何かあったのか・・・・・？』

流石にここまで何もないと心配になってきた。めぐみんの身に何かあったなら今すぐ向かうべきなのだろうが、確証がない。行き違いになる可能性も考えて、俺は苦い顔を浮かべながら待っていた。

そして、３０分後。
待ち合わせに遅れたにも拘わらず、涼しい顔をしためぐみんが歩いてやってきた。・・・・なんで少しも焦ってないんだ。
「おいめぐみん、３０分も遅刻だぞ？　何か理由があったのかもしれんが、せめて急いでやってこいよ」
俺はイライラしながらめぐみんを睨みつけた。しかしめぐみんは――――
「そうですか。それはごめんなさい。では行きましょう」
少しもその涼しげな表情を崩さず、形だけの謝罪を口にする。文句の一つでも言ってやりたかったが今日は一応デートだ。初っ端から喧嘩をしていては意味がないだろう。そう思った俺は取り敢えず怒りを鎮めることにした。

★★★

「――それでなんとかダクネスからスキルを教わったんだけどさ、あいつモノ教えるの意外と上手なんだなって思ったよ」
「へぇ、そうですか」
昼食を取りに俺のオススメの店へと向かう道すがら、俺とめぐみんは気まずい会話を

していた。

――というか、気まずいのは完全にめぐみんのせいだ。こいつはさっきから俺が何の話をしてもまともな反応を返さない。一番マシだったのが、最近発注したサラマンドの特上ロースステーキの話題を出した時だった。まぁそれも一言「それは美味しそうですね」だけだったが。

さっきの会話だって、いつもなら『ダクネスはああ見えて、子供好きですからね。性癖さえ隠せばいい先生になれると思いますよ』ぐらい言いそうなものなのだが・・・・・。

いい加減イライラしてきた俺は聞くことにした。

「なぁめぐみん、なんでお前はそんなに不機嫌なんだよ。俺が何かしたっていうならハッキリ言ってほしいんだが。というかいつもならハッキリ言ってるだろ」

「私は別に不機嫌ではありませんよ。思い込みすぎではありませんか?」

・・・・・・なんなんだよこいつは。しかもこの反応はマンガで稀に見る、理不尽な女ヒロインの反応だ。理由を教えてくれないくせに、理由を当てて改善するまではずっと不機嫌とかいう迷惑極まりないやつ。そして理由の分からない主人公は慌てふためいて、女ヒロインに謝り続けるのだろう。

だが俺はそんなテンプレには当てはまらない。ここは何としても反応を引き出す。

「あ!そっか!女の子の日か!なるほどな」

「カズマは相変わらず最低ですね」
めぐみんはその涼しげな表情のまま、そう言い放つ。
残ったのは心に突き刺さる最低の二文字だけだった。昨日と今朝はあれだけ仲良くしていたのに・・・・・・。なんだろう・・・・・こいつは俺の事を嫌いになってしまったのだろうか・・・・・・。
俺は最期の頼みの綱に掛けることにした。
「な、なぁ？　めぐみんって俺の事好きなんだよな？」
どんな態度でも、俺の事を好きと言ってくれるならとりあえず許せる。
そんな俺の小さな希望は――――
「普通ですね」
――呆気なく打ち砕かれた。
え・・・・・・・？
昨日の言葉はなんだったんだ・・・・・・？
そして今までの仲はなんだったんだ・・・・・・？
意味が分からない。

ヤバイ。泣きそうだ。

というか上を向かないと今にも涙が零れてしまう。

「お、おい、昨日のあれはなんだったんだよ」

「昨日はよく分からないことを言ってしまいましたね。もう気にしなくていいですよ」

あまりにも俺が不甲斐ないから愛想を尽かされたのだろうか？

そうだ、きっとそうだ。俺は冴えない男だけど、めぐみんはなんだかんだ言って美少女だ。黙っていればいくらでも男は寄ってくる。

今までだって散々酷いことをしてきた。今まで愛想を尽かされてなかったのが可笑しかったのだ。

「い、今まであれだけ仲良くしてきただろ？　なぁ？う、嘘だろ？嘘なんだろ？　な？」

「嘘ではありませんよ、カズマの事なんてどうでもいいです」

俺は・・・・・・このままめぐみんと仲違いしてしまうのだろうか。

そう思った瞬間、思い出が走馬灯の様に駆け巡る。

出会った日の事、冬将軍に殺された日の事、下腹部に屈辱的な落書きをされたこと――

――爆裂魔法で魔王城に攻め入ったこと、そして・・・・めぐみんに告白されたこと。

色々あったけど楽しかった、本当に楽しかったのだ。
今までの思い出は、全部嘘だったのだろうか？
もう、終わりなのだろうか？
いやだ
嫌だ嫌だ嫌だこのまま終わりなんて嫌だ。
俺を・・・・見捨てないでくれ。
「・・・・もしかして泣いているのですか？」
「・・・泣いてねぇよ・・・・・。さっさと店の中に入るぞ」
ボロボロと落ちる涙を隠すように、俺は顔を背けて目を瞑った。
――だからだろうか。
めぐみんの申し訳なさそうな表情に気が付くことはなかった。

★★★

「あっこの料理好きです。私はこれを注文するのでカズマはさっさと決めてください。」
「・・・・・・・・・ミートスパゲッティで」
涙が流れるのを何とか止めた後、俺たちは俺が目を付けていたオススメの料理店に

入った。
　ちなみに、何故かめぐみんの態度は少しだけ軟化した。相変わらず涼しい顔をしているが、向こうから話しかけてくれるようになったのだ。
　・・・・・・代わりに俺が殆ど喋らなくなったが。
「さっきまでの事は謝りますから、さっさと機嫌なおしてくださいよ」
「・・・・・さっきまでってどれだよ、俺の事嫌いになったって話か？」
「だからカズマの事は普通だと言っているではありませんか」
　普通ってことは、どうでもいいってことだろうが。ある意味じゃ嫌いより下だろ。・・・・・・・なんでコイツはまだ俺に構っているんだろう。義務感でデートに付き合うぐらいなら帰ってほしい。俺の事なんてどうでもよくなったんだから、どうせなら突き放してくれればいいのに。そうすれば少しは俺も楽になれる。
「それよりどうしてこの店を選んだのですか？　お店なら通り道にもいっぱいあったと思うのですが」
「・・・・・・・お前の好きな料理の一番人気の店だからだよ・・・・・。無駄だったみたいだけど」
　デートする時のために、めぐみんの好物を元に調べて見つけたのがこの店だった。・・・・・・・恐らくもう二度とこの店に来ることはないだろうが。

「そ、それはありがとうございます・・・・・・ま、まぁどうでもいいですが」
　気にしてない振りをしながら、俺の言葉に頬をかすかに赤らめるめぐみん。可愛い、確かに可愛いのだが、こいつは誰に対してもこんな思わせぶりな反応をしているのだろう。そう考えると一転して腹が立つ。
　それにしても、今めぐみんは何を考えているのだろう？　女心に疎い元ニートの俺には全く分からない。
　・・・・だが、常識的な事ならわかる。めぐみんは俺の事を男候補の一人とでも思っていたのだろう。それでいい男が現れたから俺の事を切り捨てようってわけだ。
　だったら俺は・・・・・・。
「・・・・・・なぁめぐみん、せめてなんで気が変わったのか教えてくれないか？　他の男に一目惚れしたのか？」
「そんなことカズマには関係ありませんよね」
「そうかよ・・・・・・」
　俺の質問に、間髪おかず無機質に答えるめぐみん。
　どうやら教える気はないらしい。俺たちは一応は生死を共にした大事な仲間じゃなかったのかよ・・・・・・。せめてその男がめぐみんに相応しい男かどうかぐらい確認させてくれたっていいじゃないか・・・・・・。

ポッと出の男にめぐみんを奪われたという事実に虫唾が走る。これが寝取られというやつなのだろうか。吐き気がする・・・・・。

――――いや違う。

そもそもめぐみんは俺のものでもなんでもない。

恋人関係になっていれば・・・・・・だがもう遅い。

そんなことを考えていると、相変わらず涼しげな表情のめぐみんが冷たい目で。

「ではカズマは私のことはどう思っているのですか？」

「・・・・・・・嫌い」

これは嘘だ。確かに今めぐみんにどうしようもなく苛ついている。

本当に意味が分からないから。

だからこそ反射的に出てしまった言葉。

だけど・・・・・それでも・・・・・・・愛おしい気持ちが消えない。

離したくない、嫌われたくない。・・・・・一緒にいたい。

でもきっと俺のことなんてコイツにとってはもうどうでもいいんだろう。

そんな俺の思いに反して――

「・・・・・えっ？」

そこには絶望的な表情を浮かべ、泣きそうな声を漏らすめぐみんがいた。

・・・・・全く意味が分からない。なんでそんな顔してるんだよ。どうでもよくなった相手にこんな反応する意味が分からない。

そして縋る様に言葉を続ける。

「う、嘘ですよね・・・・・？　ね、ねぇ嘘ですよね・・・・・？」

「なんなんだよ・・・・・・・・」

心の中がグチャグチャになる。

俺を気にしてくれる嬉しさ、見捨てられる悲しさ、気持ちを理解できない不甲斐なさ。

――そして、今までの思い出をを裏切られた怒り。今にも思いがこぼれてしまいそうだ。

今日初めて感情を見せためぐみんは、泣きそうな顔でテーブルに身を乗りだす。

「カズマは私の事好きなんじゃなかったんですか!?」

そんなめぐみんに対して俺は――

「なんなんだよお前は!!!!!!!!」

思わず、めぐみんに怒鳴り返していた。

いきなりの俺の罵声にたじろぐめぐみんは、怯えた目に涙を溜めている

「なんなんだよ、昨日は好きって言ってたくせに、今日はそんな冷たい態度で、俺には意味が分かんねぇよ!!　俺がお前を好きかどうかなんてもうどうでもいいだろ!!」

それを聞いためぐみんは、申し訳なさそうに俯く。

「っっ・・・・・・!!　こ、これには訳が――」

「訳か?　今までお前は俺の事をからかって遊んでただけなんだよな?　楽しかったか?楽しかったよな!?　お前は嘘ばっかりだ!!　俺たちの思い出なんて嘘嘘、全部嘘だらけだ!!」

「ち、ち、違うのですカズマ。私は、私はそんなつもりでは・・・・・・」

必死に弁明しようとするめぐみん。

もうコイツの顔なんて見たくない。これだけの仕打ちを受けたというのに、見てしまえば、諦められなくなりそうだから。

だったら・・・・・・。

「何が違うんだよ!?　お前は俺の事なんてどうでもいいんだろ!?　もう放っといてくれよ!!　俺はこの街を出ていく。暫く帰るつもりはない。じゃあな」

俺は別れを告げることにした。しばらくすれば気持ちも落ち着くだろう。そうすれ

ばまた仲間として仲良く出来るはずだから。
そう考えて、店を出ていこうとする。
しかし、それは叶わなかった。
めぐみんは泣きながら俺の服の袖を引っ張る。
「何のつもりだ？」
「ま、まってください。話を聞いてください!!」
「放せ、もう話すことはないぞ」
「さ、最後に一つだけ、一つだけでいいからお願いします」
それならいいか・・・・・・。
「分かった。話してくれ」
「はい、あ、でもその前にですね・・・・・・」
そこまで聞いて、めぐみんの目線が俺の方に向いていないことに気が付いた。
視線の先には、食事を運んできたウェイトレスがいて・・・・。
「あ、あのお客様・・・・・・、他のお客様のご迷惑になりますので、痴話喧嘩は店外でお願いします・・・・・。」
「「す、すみませんでした」」
気が付けば、店内は静まり返り、俺たちは至る所から好奇の視線を集めていた。

・・・・・・・とりあえず目の前の食事を食べてから、すぐに店を出よう。目を輝かせて俺たちを見つめるおばさんを見て、そう思うのであった。

★★★

一言も話さず、さっさと食事を終えた俺たちは、勘定を叩きつけ店を後にした。
今、俺たちは人目を避けるために屋敷のリビングに戻ってきている。
そして、一言だけと言って俺を引き留めためぐみんを待っているのだが・・・・・・
「一つだけ・・・・・一つだけですよね・・・・どうすれば・・・・どうすれば・・・・・」
さっきからめぐみんは青い顔でブツブツ言いながら、１０分間も部屋をうろついている。
何を言っても一緒なのだから早くしてほしいのだが・・・・・・。
待ちかねた俺はイライラしながら。
「おいめぐみん、早くしろよ。お前は俺の事好きじゃないんだろ？適当でいいんだぞ？」
投げやりな気持ちでそう言い放つと、めぐみんは俺の言葉を聞いて動きを止めた。
そして何かを決心したように。
「カズマ・・・・さっきまでの言葉を訂正させてください」

やっと言う言葉を決めたか。昼だというのに薄暗い部屋の中、力ない表情を浮かべる俺はめぐみんに向き直る。

――そしてめぐみんは、深く、深呼吸をした後、

その奇麗な瞳を真っ赤に染め上げ、覚悟を決めたように口を開く。

「私は・・・・・本当はカズマのことが大好きです。だから・・・・・・嘘を言ってすみませんでした」

その真剣な表情からは嘘の気配は全く感じられない。こいつが嘘をつくのが上手いだけなのか?それとも本当に俺の事が好きなのか?　傷ついた俺には判別できない。

・・・・・・でも嬉しい。自然と鼓動が早くなる。心の傷も少しだけ癒えたかもしれない。

でも、それでも、俺のプライドは・・・・・

「そうか、で?　それを信じられるとでも?」

「ッ・・・・・・・・・!!　そ、そうですよね・・・・・・」

もう何も分からない。めぐみんが俺の事を本当に好きなのか、それともただ街を出ていこうとする俺を止めるための方便なのか分からない。分からない分からない分から

ない!!

本当は信じたい、信じてめぐみんを抱きしめて離したくない。でもそれを、その気持ちを、思い出を裏切られた怒りが塗りつぶす。

「お前の言葉はもう信用できない。じゃあな」

複雑で荒れ狂う心を鎮めるために、俺は屋敷を出ていこうとする。

しかし、めぐみんは立ちふさがる様に俺に詰め寄り。

――そして俺に抱き着いた。

「待ってください!! 言葉でだめなら――」

「なんだ?」

「私の体を好きにして構いません。私の本気が伝わるなら・・・・・大好きなカズマになら・・・・・何をされても大丈夫です」

涙声で体を好きにしていいというめぐみん。・・・・・・ビッチなのか?それとも俺の事が本当に好きなのか? 本来なら怒るべき場面なのだろう。でも・・・・・俺はこの身に感じるめぐみんの温かさを離したくなかった。

だから、今は何も考えず、甘えることにした。

「本当にいいんだな? お前は今何をされても大丈夫って言ったんだぞ?」

「はい、それで私の気持ちが伝わるなら!!」

涙を流しながら、上目遣いで微笑むめぐみん。そんな顔を見ると、信じていいと思ってしまうから不思議だ。

めぐみんは抱き着くのをやめて、軽く両手を広げ、眼を瞑った。本当に何をしてもいいらしい。

俺が今一番欲しいのは・・・・・・・めぐみんの温もりだ。そう考えた俺はめぐみんの背中に両手を回し、その小さな体を抱きしめる。するとめぐみんも手を添えるように抱きしめ返し、安心でもするかの様に、胸元にほうっと深く息を吐きかけてきた。

「・・・・カズマのことです、もっと強烈なセクハラをしてくると思ってましたが」

「・・・・・・・・黙ってろ」

嬉しそうに驚くめぐみんの声を、俺は一言で黙らせる。

・・・・・それにしてもなんて心地良いんだろう。性欲ではない安心感が、傷ついた心を満たしていく。ひんやりと、そしてしっとりとした黒髪からは鼻孔をくすぐる甘い香りが漂い、肩紐がずれて、白くて美しい肌がちらつく。

抱きしめるのに丁度いい体の大きさで、そのほんのりとした温かさが心地よい。

きっと、きっと他の誰でもこんな気持ちにはならないだろう。この世界にたった一人しかいない、俺の好みとは全くの逆だった女の子、めぐみんだからこそなのだ。

――ああ、やっとわかったよ。ここまで追い込まれて、こんな状況になって初めて気

が付いた。
そうだ、確かにめぐみんの気持ちなんて全く関係なかった。あいつがどうだろうと、俺はめぐみんの事が世界で一番好きなんだ。
例えどんな障害があろうと、俺はめぐみんを誰にも渡さない。それでいいじゃないか。・・・・・・まぁ楽なら楽に越したことはないから障害はない方がいいんだが。
そう考えて、俺は驚くほど心が澄み渡っていくのを感じた。前まではきっと、好かれたから、好意を向けられたから反射的に好きになっていただけだった。そしてやっと、やっと自分の気持ちに気が付けた。・・・・なんでめぐみんが冷たい態度を取ったのかは分からない。でも、もしかしたらそのことを教えるためだったのかも知れないな。
互いに抱擁を交わしてから、どれだけの時間が経っただろうか？　俺はふとめぐみんの顔を覗き見る。
「ん・・・・・・・・・・・・」
めぐみんは心底幸せそうな顔で目を瞑っていた。・・・・・・こんな顔を嫌いな奴に向ける奴なんていない。めぐみんが俺の事が大好きだっていうのは本当なんだろう。
――というか冷静になれば、めぐみんが俺の事を嫌いなはずなかった。めぐみんはいざって時の度胸はないし、人を騙す演技だって下手な奴だ、これまでの思い出を全部演

技でこなすなんて器用な事、出来るはずがない。それに俺はあいつを拾ってやったんだし、爆裂魔法の道を選ばせてやったし、２０億近いプレゼントだってしてやったんだ。これで嫌われてたら流石にキレる自信がある。

そんな考えにも頭が回らないくらい、俺も色ボケてたんだな。そう考えて少しおかしくなった。

さて、さてさてさて、俺は自分の気持ちに気が付いた。しかしその代償かは分からないが俺は今回酷い目に遭わされたわけだ。そして俺はやられたら絶対にやり返す男。やられた分は復讐させてもらおう。

そう考えて、めぐみんの顎に左手を添え、唇を近づける。

「めぐみん・・・・・・」

「・・・・・・っ!!!!!」

目を瞑ったまま、俺の意図を理解しためぐみんは一瞬体を強張らせる。しかしすぐに力を抜き、体を預けてくる。

可愛い奴だ、そう思ったおれは右手をめぐみんのおでこに添えて、そのまま――――

思いっきりデコピンしてやった。

「痛ったあああああああい、おでこがああああああああああああああ」
「へっ」
両手でおでこを抑え、涙目で俯くめぐみん。いい気味だ。
めぐみんはキッと俺を睨みつけて。
「乙女に何してくれるんですか!? き。キスするんじゃなかったんですか?」
「今のはお前がキスする気があるか確かめただけだよ」
ちなみに本当は俺もキスしかけたが、必死に理性で堪えただけだ。今は性欲より罰ゲームだ。おかげで面白い反応が見られた。
「なんて酷いことしてくれるんですか? というかもう私の気持ちを証明できたのではないのですか!?」
「いいやだめだ、そもそもキスなら昨日したからな、気持ちの証明にはならない、それ以上文句を言うなら出ていくぞ?」
「そ、それだけは勘弁してください」
なんとか怒るめぐみんを宥め、俺は次の手段に出る。
左手をめぐみんの背中に回し、口を首筋に近づけ、優し目に噛みつく。
「ちょっ、カ、カ、カズマ!?」
素っ頓狂な声を上げるめぐみん、だが抵抗はしない。まぁ抵抗しない約束があるから

だろうが。
　そのまま俺は噛む力を強める。きっと嫌がるはずだ。
「痛い、痛いです。あっ・・・・・・でもああっ、意外と・・・い、いいかもしれません」
「・・・・・・・・・」
　思った反応と違う。面白くなくなった俺はすぐに止めた。何故か顔を嬉しそうにニマニマさせているめぐみん。
「・・・・・・・お前実はドＭだったのか？」
「違いますよ!!　カズマに付けられた傷だから許せるってだけです!!　というかさっきからカズマは私で遊んでいませんか!?」
「・・・・・・遊んでないよ？」
「顔を背けて誤魔化そうとないでください!!」
「まぁまぁ、次でラストだから」
　めぐみんのキレイな肌に傷が残るといけないから、回復魔法を掛けてやった。
　訝しげな目を向けてくるがスルーだ。それじゃあ次の悪戯に取り掛かろう。
　俺はめぐみんの背後に回り、そして抱き着くように手を回す、そしてちょうど胸のところで手を止め、揉みしだく。・・・・・もちろん服の上からだが。
「何するんですか!?　ひゃあっ!!・・・・・や、やめてください」

「まぁまぁ、これに耐えたら俺の事が好きなんだって認めてやるよ」
「うぅ・・・・・・・。納得いきません・・・・・・・」
そう言いながらも無抵抗なめぐみん。しかし貧乳というのもいいものだな。めぐみんも無いというわけではなく、ほんのりとした柔らかな膨らみがある。服の上からだが結構触り心地がいい。
「うぅ・・・・・はぁっ・・・・・まだだめですかぁ?」
「まだダメだな」
だんだんと声が蕩けたものとなり、息が荒くなっていく。・・・・なんというか、苛めるのが楽しくなってきた。ここはもっと攻めることにしよう。
俺は直接的な性経験はない。しかし、サキュバス達の夢でめぐみんを出したことは一度や二度ではない。めぐみんの裸については知っているも同然だ。
服の上から胸を揉みしだきながら、中指をフリーにして、狙いを付ける。そして一気に上を撫でてやると。
「ひゃあっ!!!・・・・・っはぁっ・・・・んっ、な、なんですか今の…?」
堪え切れずに甘い声を漏らすめぐみん。サキュバス先生マジありがとうございます。しかしこれは面白い。勝気なめぐみんをここまで弱らせられるとは。
得意になった俺は強弱をつけたり、ゆっくり撫でたりしてやる。

「ああっ・・・・・・んっちょ・・・ホントに・・・ホントにやめてください!!ああっ、いい加減怒りますよ・・・・んあっ」
「んーーー、いやもうちょっと、もうちょっとだけ。それで満足だから」
抗議しながらも、時々体をよじり、甘い声を漏らす。
楽しいなこれ、こんなシチュエーション二度とないと思うから、ちょっと無茶するか。
そう思った俺は指を高速で動かし、服の上から擦る。
「んっ・・んっ・・あぁっはぁっ・・・や、やめ、はうっ・・・やめろ・・・ヤメロって言ってんでしょうが!!!!!」
「グホォ!!」
ついにキレためぐみんの肘打ちを腹に受けた俺は、よろめき床に倒れる。
起き上がり前を見ると、めぐみんは顔と耳を真っ赤にして、息を荒くし、服の上からだが両胸を手で隠していた。
「カズマ!!!!　もういいでしょう!?　私の思いは十分伝わりましたよね!?　というか途中から遊んでましたよね!?」
「・・・いや・・・・・もうちょっと・・・あと少しだけ遊んじゃダメか？」
俺の言葉を聞いためぐみんは深紅の瞳を光らせ、立てかけてあった杖を手に取りぶんぶんと振る。

「おい、それ以上セクハラを続けるならこちらにも考えがあるぞ」
「ごめん、ごめんってめぐみん、痛い、痛い、お前本気で叩きすぎだろ!?」
　俺の必死の謝罪を聞いてめぐみんは杖を振るのをやめて。
「はぁ・・・・、まぁ体を好きにしていいと言ったのは私ですからね。気持ちを証明できたのなら良しとしますか」
「ああ、俺に体をまさぐられてあれだけ感じてるんだから俺の事好きってことは分かった」
「感じてるとか言わないください!!　最低です!!　あなたは最低ですよ!!」
　恥ずかしそうに顔を真っ赤にして俺を怒鳴りつけるめぐみん。いつも通りに最低と呼ばれてなんとなく安心した。これですっかり元通りの関係になれたのかもしれない。
「・・・・・・なんでカズマは罵られて嬉しそうなんですか?ダクネスなんですか?」
「いや、元通りの関係に戻れたなって安心してただけだよ、それよりドMの意味でダクネスと呼ぶのは可哀そうだからやめてやれ」
　・・・・・・そういえば、なんでめぐみんはあんなに素っ気ない態度を取っていたのだろう?　今更ながらに気になった。俺は聞いてみることにした。
「なぁめぐみん、なんでさっきまであんなに冷たい態度だったんだ?」
　俺のさりげない疑問を聞いためぐみんは申し訳なさそうな顔をして、目を背ける。

「えっと、怒らないで聞いてくださいね？　あれは私なりのデートの作戦だったのです。実は――――」

――――詰まる所、今回のめぐみんの素っ気ない態度は、全て『押してダメなら引いてみろ』を元にした作戦だったらしい。

それにしても・・・・・・・。

「いやお前、引いてみろの部分明らかにやりすぎだろ!?　俺正直お前の事嫌いになりかけてたぞ!?」

「か、加減がよく分からなかったので、ちょっと酷いことをしてしまったかもしれません」

今回の事の顛末は以下の通りだ。

３０分遅れたのは勿論わざと。素っ気ない態度は俺にめぐみんを意識させてアタックさせるためだったらしい。

・・・・・・確かに意識はしたけど、あそこまで冷たいとアタックもクソも無いだろ。

そして俺の涙を見て急遽作戦変更。めぐみんは俺に告白させるつもりで、『ではカズマは私のことはどう思っているのですか？』と言ったらしい。

そんなことを知らない俺は発狂、めぐみんがなりふり構わず引き留めようとして現在に至る。

「私にはこんな駆け引きなんて向いてないのかもしれませんね。これからはいつも通り、ずっと全力で行きます」

「そうだぞーお前は知能指数の高いバカだからな、そういうのは無理だ」

「この紅魔族随一の天才をバカ呼ばわりとはいい度胸じゃないか!!　ってあれ？カズマは私の話を聞いても怒らないのですか？」

そう言って首を傾げるめぐみん。自分で『怒りませんか？』と前置きしておいて、何を言っているのだろう。まぁ確かに・・・・・普通なら怒るよな、普通なら。

「今回は怒らないよ、・・・・・もし次やったら、一生消えない心の傷をつけてやるつもりだが」

「そうですか、次はないので安心ですね。それでは今回許してくれた理由はなんでしょうか？」

理由か・・・・・まぁあれだよなもちろん。

「まぁ合法的にセクハラさせてもらったからだな」
「ちょっ!!　あなたの脳はエロ成分しかないんですか!?」
「思春期の男なんてそんなもんだよ、まぁそれだけじゃないとすれば――」
俺は今回のような事でもなければ、自分の気持ち――『誰にもめぐみんを渡す気はない』という気持ちに気が付けなかっただろう。
「――得たモノがあったからだな」
「得たモノ？」
それが何か分からないめぐみんは首を傾げている。俺は少し遠い目をしながら。
「それはめぐみんにも関係あることだよ、まぁ時期が来れば分かる」
「ん？　よく分からないですね」

もう少ししたら、王都で魔王討伐を祝う大きな祭りがあるらしい。劇団や行商人、高級レストランの料理人やドワーフの鍛冶職人など、ありとあらゆる人々が集い、盛大に魔王討伐を祝う大イベントだ。
そんな特別な時なら、俺もめぐみんに告白出来るはず。もし叶うなら、最高の記念日にしてやろう。
まぁ・・・・・それは少し先の話だ。今は目先の事を考えよう。

そう考えて、俺はめぐみんとの話を切り上げる。そして。

「さて、それじゃあ改めて、俺たちのデートに行こうか」

「はい!!　今日は私たちらしく楽しみましょうね!!」

そう言って、俺たちは晴れやかな表情で屋敷を後にするのであった。

第７話　のほほん王都デート

晴れやかな日差しに照らされ、俺とめぐみんはアクセルを散歩していた。
デート……なのだが、特にプランを決めていなかったのでこんな感じになっている。
ちなみに爆裂魔法関連スキルを教えてもらうのは後に回した。一度スキルを使えば後は動けなくなるしな。
それはともかくとして……今はさっきから妙に近いこいつが気になる。
「あ、あのなぁ、ちょっと近くないか？　肩が当たりそうな距離なんだが……」
「そうですか？　あまり気にしなくてもいいと思いますが」
めぐみんは何事も無いかのように、俺の真横で微笑み返してくる。嫌でも感じる仄かな体温に胸が高鳴るのを感じる。今までだって冒険の一環として、おんぶしてやったり、暗闇の中で手を繋いだりしたことは一度や二度じゃない。それよりもずっと軽いスキンシップのはずだが……デートとして意識するだけでここまで変わるものなのか。
「流石に離れろって……、さっきから好奇の目線を向けられて辛いんだよ」
「いやです。私はずっと全力で行くと誓いましたので。んっ」
そう言って、俺の肩に頭を寄せてくる。……そんな一つの仕草だけでここまでドキド

キされてしまう俺が情けない。別に嫌ではない……嫌ではないのだが……、周りの目線が痛い。

「おいおい、あの鬼畜のカズマが頭のおかしい爆裂娘と付き合ってるぞ!!」

「あんな小さな子供と!! あのエセ勇者はロリコンって噂を聞いてたけど本当だったのね!!」

「あの、頭のおかしい爆裂娘があんなに大人しくなるなんてな。さすがクズマの名前は伊達じゃねぇ!!」

……好き勝手言ってくれるなこいつら。俺が文句の一つでも言ってやろうと思ったその時、横に感じるめぐみんの体温が突然消えた。

「おい、誰がロリっ子で頭がおかしいのか聞こうじゃないか。我が爆裂魔法はもはや詠唱なしで発動できます。そこらへんの事をよく考えてから発言することですね」

杖を突きつけると、ガヤを飛ばしていた人たちは青い顔になり後ずさる。俺もニヤリと笑い手をワキワキさせながら周りを睨みつけ。

「と、いうわけだ。魔王すら倒した俺たちへの口の聞き方には気を付けることだな。そして今の俺はあらゆるスキルを使いこなす。ウィズ先生お墨付きの上級魔法を喰らう覚悟が出来たら掛かってこい」

淀みなく言い切る俺に本気を感じたのか、蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。ふ

んふんとその様子を見届けた後、俺たちは顔を見合わせ、ゲスい笑顔でハイタッチをかます。

「イェーイ!!」

と、その衝撃でめぐみんのポーチから、手帳サイズの何かが零れ落ちた。……パンパンに膨れたこれは……財布か？

「おい、めぐみん何か落としたぞ……、はいこれ」

「ありがとうございます。って私の財布ですか。すぐに気が付けてよかったです」

「……」

めぐみんが財布と言い張るそれは、膨れ上がり中身がはち切れんばかりの状態である。前に財布を貸してもらったことがあるのだが、中には商店街のポイントカードやら、クーポンやらが詰まっていた。今の財布の様子から、さらに増えたのかもしれない。そう考え、思わず悲哀の目線を向けていると。

「な、なんですか？　私の財布がおかしいですか？」

「……おかしい。どんだけポイントカードため込んでるんだよ。使わない分まであるだろ。お前無駄な買い物しないんだから、そんなにカード必要ないと思うんだが」

「いえ、ポイントは貰えるだけ貰っておくのがいいですよ？　貰って減るモノではありませんし、節約にもなります。クーポンだってしっかり活用すれば――」

いえ、節約談義は結構です。そのままペラペラと節約術について話し続けるめぐみんを見て、思わず遠い目になってしまう。

そういえばめぐみんは普段、ほとんどの金を俺に預けてるんだよなぁ。

渡した金も殆どを実家に仕送りに使い、残ったわずかな金も、生活必需品や食料品に使うばかり。今持っている装備だって、キャベツ狩りの時に買った杖が一番のはずだ。

「どうしたのですか？　上手なポイントの溜め方が気になるのですか？」

「いや、そうじゃなくてだな……」

俺たちは一応は一端の大富豪だ。今は諸事情で生活費＋α程度しか残ってないが、あと少しで魔王討伐の報酬が出る。そんな金持ちの俺の仲間のめぐみんは、何故か未だに数着しかない私服を使いまわし、倹約に努めている。たまに高価な装備品を『これいいですね!!　これいいですね!!』と欲しがるだけで実際に買うことはない。

「それではクーポンですか？　クーポン系は有効期限に注意ですね。ただ、有効期限に惑わされて買わなくていいものを――」

「だからその話はいいって!!　それよりまたちょっかい掛けられるのも面倒だし、別の街に移動しようぜ」

「むぅ……節約は大事ですよ？　まぁいいです、それでどこへ？」

少し頬を膨らませ、首を傾げる。せっかくだし倹約家のこいつに、何かを買ってやる

ことにしよう。となるとこの国で最も大きな街が最適かな。
「お前普段俺にお金を預けてるだろ？　今日はその分俺が色々買ってやるよ。だから王都へ行こうぜ」

★

――テレポートで王都についた俺たちは、王都の商業区を歩いていた。
相変わらずめぐみんは俺の真横に張り付いてくるが、流石に慣れてきたのか緊張はしなくなった。
「しかし、本当に賑やかな商業区ですね。人もアクセルと比べものにならないくらい多いですし、凄まじい熱気を感じます」
「もう少しで魔王討伐記念祭があるからな、それの準備で忙しいんだろ」
隣り合う俺とめぐみんは、改めて街の様子を見る。そこかしこに色とりどりの箱や、道具などが積み上げられ、壁という壁にはチラシが貼られている。思わず息が詰まるような人ごみの中、各商店の店員は、出店する予定の出店（でみせ）を整備したり、逆に既に完成した出店では接客したりと忙しそうだ。
そういえば、こんな光景を見るのは二度目だ。一度目はエリス・アクア祭だったか。

あの時は祭りのアドバイザーとして奮闘したっけ。忙しくて騒がしくて迷惑も掛け合った盛大な祭りだったが、今考えると楽しかったものだ。

それに街を歩く人々は皆、安らかな顔をしている気がする。

と、隣にいた3人組の声が聞こえてくる。

「もうあの魔王軍襲撃警報を聞かなくてよくなったと思うと、ホント嬉しいよ。いや、まぁ俺はびびってないけどな？」

「嘘つきなさいよ、いつも真っ先に逃げてたくせに。でも魔王軍がいなくなったおかげで物価が下がって嬉しいわ」

「それもこれも勇者様のおかげだな!!」

心底愉快気に笑いあう人達をみて、思わず俺たちも顔を見合わせ微笑みあう。そういえば、この世界はずっと魔王に苦しめられてきたんだっけか。別にこの世界のために魔王を倒したわけじゃないんだが、感謝されると悪い気はしない。

「な、なぁめぐみん、今ここで『自分が魔王を倒した勇者です』って名乗ってみたいんだが」

「ダメですよ。嘘つき扱いされるカズマが目に見えます。それより、私こそ紅魔流の名乗りを上げてみたいのですが」

「それこそダメだろ。お前の頭のおかしさを王都にまで広める必要はないぞ」

「私は謙虚でミステリアスな大魔法使いなので大丈夫です。それよりカズマこそ、王都でカズマが悪徳勇者呼ばわりされないことを祈ってますよ」

そう言って、クスクス笑うめぐみん。失礼な事を言われた気がするが、もはや俺はその程度では動じない。魔王を倒した勇者は、心の広さも勇者級に成長したのだ。

そんなことを考えていると、俺を指さしてヒソヒソ話をするカップルがいて……。

「あっ!!　あれって卑怯者のカズマじゃねーか。まじで卑怯者って感じの顔してるな!!」

「あれが噂に聞く、陰湿な嫌がらせを繰り返す男なのね」

……。平常心、平常心だ。

「お、あいつこっち見てないか？　俺の彼女にエロい目線向けやがって、許せねぇ!!」

「キャーカッコいいー!!　でもあんな色情魔に睨まれても私は気にしないわ」

……。なんだろうこの気持ち。

「うおっ、なんか手をワキワキさせ始めたぞ、あれが『バインド』の構えか!!　気持ちわりぃ!!」

「違うわ!!　あれはパンツだけを奪う女の敵『スティール』の構えよ!!　キャーコワーイ」

死にたいらしいな。

「『カースド・ペトリ――』」
「ちょっとカズマ!!　ムカつくのは分かりますが殺す気の詠唱をするのはやめてください!!　目がマジですよ!!」
「……ッ!　……ッッッッ!!」
卑怯者の顔をしているらしい俺はめぐみんに取り押さえられ、バカップルは悪魔に追われたように逃げていった。

★

バカップルへの怒りをなんとか鎮めた俺は、本来の目的を思い出して服屋に来ていた。
目的は俺の服ではなく、めぐみんの服だ。こうでもしないとめぐみんは最低限以外の服を買おうとしないだろうしな。
そんなこんなでめぐみんの試着を待っていた。すると試着室のカーテンが開いて。
「ど、どうですか?　似合っていますか?」
「……かわいいな」
見た俺は思わず小さな声が漏れてしまった。出てきたのは純白のワンピースを着こ

なすめぐみん。簡素な作りが逆にめぐみんの白磁の肌と絶妙にマッチし、その華奢な体を際立たせる。そして艶やかな黒髪とのコントラストが見事で、男の庇護欲を誘ってやまない、そんな姿だった。

直視できずに目を逸らしたせいか、ニマニマしながらめぐみんは寄ってきて。

「なんといいましたか？　よく聞こえなかったのでもう一回言ってくれると嬉しいです」

「な、なんでもねぇよ。次だ次」

鬱陶しく構ってくるめぐみんを手で押しのけ、次の服を渡す。ちなみに服を決めているのは俺だ。めぐみん自身は余り服に興味はない……と言っていた。その割には楽しそうだが。

しばらく待っていると、次の服に着替えてめぐみんが出てきた。

「珍しいタイプの服ですね。なんとか着られましたが」

「……ずるいだろ」

今回のめぐみんは茅色のトレンチコートを着ている。ひざ丈までの長さのコートを上手く着崩し、爽やかな表情を浮かべている。さっきまでとは打って変わってボーイッシュな美少女といった感じか。……なんでこんなに似合うのだろう。

そういえば、ファッションでよく言われる言葉に『美男美女ならなんでも似合う』と

いうのがあったな。……さすがに理不尽なんじゃないだろうか。フツメンの俺に謝ってほしい。

「それでそれで？　どうなのですか？」

「まぁ……似合ってるんじゃねぇの？知らないけど」

それを聞いて嬉しそうに微笑む。なんだか悔しくなってきた俺は、逆に似合わないもの探すことにした。そう……これは戦いなのだ。決して顔面格差に屈してはならない、これは人権をかけた聖戦だ。

その後俺は必死に格闘した、ある時はぶかぶかのトレーナーを着せ、ある時はダサい文字入りTシャツを着せ、男モノ、田舎のおばちゃんスタイル、ゴスロリなど、色々と試してみた。……でも、その全てが似合っていた。素材がいい、ただこれだけの事実が、時に理不尽な格差を産むのか……そう諦めかけた時、一つの服が目に入った。これならいけるかもしれない。

「こ、これを着るのですか？　これは男モノですし、ちょっと地味だと思うのですが……」

「さっきからお前は男モノでも、地味系服でも無駄に似合ってただろ。いいから着てみろ」

ささやかな抗議の目を無視し、そのまま試着室に押しやる。着替えを待つ間に必要な

小物を見つけた俺は、今か今かとめぐみんを待ち受ける。
「……なんというか、普通に薄着過ぎて恥ずかしいです」
そう言って出てきたのは、水色の短パンと白シャツを着ためぐみん。この時点だとバカ可愛いロリっ子でしかない、そこで俺は二つの小物を渡す。一つは麦わら帽子、もう一つは虫取り網だ。……なんで、虫取り網が服屋に置いてあるのかは知らない。そして最後にセリフを書いた紙を見せる。
「というわけでめぐみん、ここに書いてある台詞を出来るだけカッコよく言ってくれ」
「よく意味が分からないセリフですね。…まぁいいですが」
麦わらを被り、虫取り網を片手に持っためぐみんは軽く目を瞑る。そして身を翻し虫取り網を高らかに揚げ……
「ポ〇モン!!ゲットだぜ!!」
「ッ……!!ッッッ……!!」
堪え切れず腹を押さえて爆笑しながら、目の前の『むしとりしょうねん』を見る。そして俺は思わずガッツポーズをしていた。何を着ても可愛い少女が、見事に少年にクラスチェンジした瞬間だ。勝った!!　完全に少年にになっためぐみんを見て俺は満足した。どんな服でも似合う美少女なんてやっぱりいなかったんだな。こういう時はめぐみんの体型に感謝だ。

そんな事を考えていると、頬を赤くしためぐみんが俺に詰め寄る。
「ちょっ!!　なんで爆笑してるんですか!?」
「いやぁ……今日ほどめぐみん少年の平らな体型に感謝したことはなかっ」
言い切る前に、胸元を掴まれ、深紅の瞳で睨みつけられる。ガチなゴミを見る目だ。
「おい、服を選ぶと言っておきながら、人で遊んだ挙句セクハラとはいい度胸じゃないか」
「ご、ごめんって」
「乙女の期待と努力を裏切ったのです。謝るだけで済むと思わないことですね。何か言い訳はありますか?」
いつもと一線を画す怒り様のめぐみんに、俺は頭を掻きながら。
「だ、だって、お前どの服でも似合うってずるいだろ!!　だから悔しくなって……」
「そ、そうですか……ま、まぁ私は美少女ですから当然ですね」
頬を仄かに赤らめためぐみんは、胸を掴む手の力を緩める。おっ……?もしかしてコイツってチョロイのか?
「じゃ、じゃあ許してくれるか?」
「それはダメです」
違ったらしい。チョロくないめぐみんは虫取り網をペチペチと俺の顔に当てながら。

「大体あなたが服を選んでくれると言い出したのですよ？　それなのにふざけるとかどうなのですか」
「う、うん、それは正直すまん、でもだったら自分で選べばよくないか？」
「いえ、私は服にはあまり興味が無いのです」
「あれっ、結構服に興味深々だったと思うんだが」
　めぐみんは手渡した服を毎回まじまじと眺め、自分なりに着崩し、それに合った振る舞いをしていた。そんなこいつが服に興味がないとはとても思えないのだが……。
「違いますよ。私はカズマの好みについて考えていただけです。カズマに可愛いと思ってもらえるように、仕草や着方なども工夫してみたりしました」
　……なんでこいつは涼しい顔で恥ずかしいことを言えるのだろう。というか、あれだけ色々着せて全部似合ってたのは、俺の好みに合わせて調節してたからだったのか……。そう考えると胸の奥が熱くなる。気持ちを裏切った分、今は正直に返事をしよう。
「……その、ありがとな。……正直言って滅茶苦茶俺の好みだったよ」
「それは良かったです」
　そう言って微笑むめぐみん。確かに可愛い、可愛いのだが……。
「……そろそろ虫取り少年スタイル辞めていいぞ」

「せめて少女と言ってください!!」

俺はプンスカと怒るめぐみんが着替えを終えるのを待った。

出てきためぐみんが俺の方を見て哀しそうな顔をして。

「……それでは、私の純情を弄んだカズマは、どの服を買ってくれるのでしょうか？」

「う〝っ……。そ、それは……え、えっとだな……」

「……」

「分かった!!　分かった全部買ってやるからそんな顔しないでくれ」

哀し気な顔を浮かべるめぐみんに耐えきれず、俺は思わずそんな事を口走る。しかしめぐみんは、

「……やはりあなたは根は優しいですね」

そんな事を言いながらクスクス笑っている。どうやら俺を試していたらしい。

……こいつにはやっぱり適わないなぁ。

結局、全部は買わず、最初の方に選んだ特に似合っていた服などを買うことにした。

「では、６点合わせまして、合計８１，０００エリスとなります。――はい８５，０００エリスのお預かりですね。では、４，０００エリスのお返しです。あとくじ引き券もつ

けておきますね。ありがとうございました！　またのお越しを!!」
　会計を終え、服の入った紙袋を手渡す。するとそれを大事そうに抱えためぐみんが上目遣いで。
「こんなに高いものを、私のために買ってくれてありがとうございます。カズマの好きな女の子になれるように頑張りますね」
「お、おう……」
　……もうとっくに好きなんだけどなぁ。気持ちを自覚したからか、よりはっきりとそう思ってしまう。
「それはそうと、この店は変わった服が多かったですね。トレンチコートでしたっけ？少なくとも私は見たことがありませんでしたよ」
「そうか？　俺の国だと割とありきたりな服だったと思うんだけど」
「カズマの国というのは、本当に変わっていますね」
「俺からしたらこっちの方がおかしいんだけどな。……確かにこの店内は日本の服屋に似てるな」
　まぁゲームオタクだった俺は服屋なんて全然知らないんだけどな。それでもこの店は他の店と一線を画していると分かる。恐らくチート持ちの連中の誰かが、デザインの提案をしたのだろう。

ふと、店の奥を見てみてると着物が吊るしてあった。確信した俺はめぐみんにちょっと待っててくれと告げ、店主の女性に話しかける。

「すみません、もしかしてここって着物扱ってるんですか？」

「着物……？ってああ、この服の事ですか。そうですよ、うちのお得意様に高名な黒髪の冒険者がいらっしゃいまして、その方の依頼でお作りしました。うちはオーダーメイドも対応してますから」

どうやら予想通り、この店の品々は日本人が伝えたもののようだ。これなら話が早い。しかも見た感じ、腕も信用できる。

祭りと言えば浴衣だ。まぁ魔王討伐記念祭は夏じゃなくて春だから着物だけど。めぐみんだけに買ってもいいのだが、そういうのはきっと嫌がるし、あの二人も悲しむだろう。というかアクアは間違いなくキレる。

俺の仲間は見てくれだけは無駄に良いので、きっと似合うはずだ。スキルを教えて貰う対価としてこれくらいは買ってやるか。

そんなことを考えながら、店主さんにオーダーメイドの依頼をするのであった。

★

オーダーメイドの予約を終え、店から出た俺は辺りを見渡す。すると、店の横で紙袋を両手で抱えて、幸せそうに頬を緩めるめぐみんがいた。

……こんな反応をしてくれるなら、買った方としても嬉しいものだ。

と、俺に気が付いたのか手を差し出してくる。

「人が多くて歩き辛いので、手を繋いでくれませんか？」

「ん？　あぁ、いいぞ」

俺は出来るだけ表情を変えずに答え、しなやかな細い手を取る。手を繋ぐのは初めてじゃないからその程度では緊張しない……しないはずだ。

そんなことを考えていると、唐突に手の感触が変わる。包み込むような感触と共に、柔らかな指が隙間に入り込んできて……。――指？

「お、おいめぐみん。なんだよ、手のつなぎ方が変だぞ？」

「そうですか？　私はこっちの方が好きですが」

呆気らかんと振舞うめぐみんに思わず戸惑ってしまう。ふと手を見れば、指と指を絡ませ、手をピッタリと密着させていた。……いわゆる恋人繋ぎという奴だ。

「いやいや!!　これって恋人繋ぎじゃねーか。街中でやるのは恥ずかしいんだが……」

思わず慌てた俺はめぐみんにささやかな抗議の目線を向ける。まぁこいつのことだ、特に気にもしないんだろうな……。しかし……、

「き、気にしなくていいです、私は全く恥ずかしくありませんから。それにデート中なのでなにもおかしくないですって……多分」

いつもの落ち着いた反応……ではなく、慌てた様に周囲を見渡す。

あれっ？　もしかして恥ずかしがってるのか？　こいつってこんな乙女な反応する奴だったっけ。

いつも手玉に取られて弄ばれるのは俺ばかり、そんな悪女じゃなかったっけ。

そう考えて、改めてめぐみんを眺めると、ほんのり頬を赤くし、紅い瞳を泳がせている。

もしかしてめぐみんは……。

少し悪戯心の芽生えた俺は、顔を目と鼻の先まで寄せて。

「本当か？　本当に恥ずかしくないのか？」

「……ッ!!　は、は恥ずかしくなんてありませんよ!?　というか顔が近くないですか!?」

裏返った声を出しながら、目を逸らすめぐみん。そんな挙動不審になる様子を見て確信する。

分かった。こいつはあれだ。自分から迫るのは得意だが、迫られるのは苦手なんだ。

だから平気な顔を出来るラインを超えると、こうもオロオロしてしまうのだろう。

……今までの仕返しをさせてもらうか。

心の中でだけ笑い、めぐみんの耳元に口を近づける。そして、軽く息を当てながら囁く。

『俺は手を繋げて嬉しいぞ。だってめぐみんの事が好きだからな』

「え!!??　ううぅぅ……あ、あなたは何を言ってるのですか!?　こ、こんな街中で!!」

何ってお前がいつもやってくることだよ。体を震わせながら口をぱくぱくさせるめぐみんをに、俺は追い打ちをかける。

「いやいや、前にもちゃんと伝えたはずだぞ?　俺はめぐみんのことが好きだって」

「ちょ、ちょっとカズマ!?　純情な乙女を弄ぶのは良くないですよ!?　乙女はそんなことを言われたら本気で意識しちゃうんですからね!?」

泣きそうな声で訴える乙女は、耳まで真っ赤にして瞳を潤わせている。俺の言葉にドキマギしている様子を見るのはなかなか楽しい。……こっちまで恥ずかしくなってくるが今は我慢だ。そう考え、繋いだ手を見せびらかすように前に引っ張り上げ、

「意識してくれていいよ。こんな風に出来て俺は幸せものだよ」

「いつもなら絶対そんなこと言いませんよね!?　というか周りの目が恥ずかしいのですが!!」

あーあ、そんなこと大声で言うから逆に注目されてるよ。めぐみんが照れている様子を見ると、いつも俺の反応を見てクスクス笑っていた理由が分かる気がする。

「いやいやー、せっかくだし見せつけてやろうぜ」
「辞めてください!!　離してくださいっ!!　お願いだから離してくださいっ!!　恥ずかしいですからあああああああ!!」
全力で抵抗する乙女めぐみんに満足した俺は、微笑ましい目を向けながら解放してやった。
その後しばらく口を聞いてくれなかったのは言うまでもない。

★

なんとかめぐみんの機嫌を直し、俺たちは商業区のある一角に来ていた。
それは商店街のある一角にある、くじ引き場。
そこで俺たちは、未来を掛けた戦いを繰り広げる。
「受け取れめぐみん!!『ブレッシング』ッ!!　ここは俺に任せて先に行け!!」
「カ、カズマ!!　私は忘れません……、あなたの雄姿を忘れはしませんよ!!」
「ちょ、ちょっと助手君離して!!　というかなんで無駄に壮大なのさ!!」
抵抗する銀髪の女盗賊を羽交い締めにし、俺はホッと息をつく。
なんということか、女盗賊――すなわち我らがお頭は、くじ引き場に現れてしまったのだ。

クリスは幸運の女神エリスの化身である。この世界で唯一俺に運勝負で勝てる人物……いや神物だ。そんなクリスが俺たちより前にくじ引きに参加すればどうなるか？　答えは明白だ。景品は根こそぎ奪われてしまうだろう。だからこそ拘束する必要があった。

ちなみに服屋で貰ったくじ引き券は八枚だ。それを全てめぐみんに渡している。狙うは二等の『超特上カモネギ肉』、そして一等の『王都の高級レストラン食事券１か月分』だ。それを聞いた瞬間、俺たちの意思は固まった。どんな手を使ってでもそれを手に入れる。

ついに順番となり、めぐみんは手持ちのくじ引き券を受付に全て渡す。

「それじゃあ８回分ですね、まとめて回しちゃっていいですよ」

「……カズマの仇です。……いきます」

頼む、頼むぞめぐみん……。俺が背後に控えている、きっと俺の幸運も発動してくれるはずだ。そんな俺の思いが通じたのかは分からないが、神妙な面持ちでガラガラを回し始める。

「おおっ!!」

周囲に歓声が上がる。最初に出てきたのは３等の赤玉。景品は知らないが好調な出だしだ。

――しかしそんな俺の思いに反して、微妙な結果が続く。
赤三つ。
緑二つ。
白二つが排出され、残りは一回となる。
まずい、このままでは負けてしまう!!　クリスに構っている場合じゃない、今すぐめぐみんを手助けしなければ。焦った俺はめぐみんに駆け寄り、声を掛ける。
「カズマ!?　死んだはずでは!?」
「死んでねぇよ。それより俺も力を貸す、だから悔いの無いよう全力を出し切るぞ!!」
力強く気合を入れる俺に、めぐみんは顔を輝かせ、
「ッ!!　分かりました、それでは共に手を取り最後の戦いに挑みましょう!!」
「ねぇ?·キミたちはくじ引きをやってるんだよね?」
意味不明なツッコミを入れてくるクリスを無視し、ガラガラの取っ手を二人で掴む。
めぐみんだけならともかく、最高の幸運を持つ俺ならきっと引き寄せられるはずだ。
「この一投に全てを掛けます!!」
「「いっけえええええええええええええええ」」
俺たちの渾身の一振りが未来を紡ぐ――

――ことはなかった。

出てきたのは赤玉。

俺たちは地面にへたり込む。最後に出たのは、一等の金玉でも二等の銀魂でもなく、……三等の赤玉だった。

悔しさのあまり拳で地面を殴りつける。

「ちくしょう……ちくしょう……!!　おれに、おれにもう少し力があれば……」

そしてめぐみんはボタボタと涙を落とす。

「ごめんなさいカズマ……私たちの大事なものを護れませんでした……」

「え、えっと……ガラガラの話だよね……？　こんなバカなこと言ってる人たちが魔王を倒したって思いたくないんだけど……」

バカなことではない、通販でも手に入らない超特上カモネギ肉と、半年先まで予約が埋まっている高級レストランの食べ放題券だ。あれだけ……あれだけ望んでも手に入らなかったのに……。

「ま、まぁ残念だったね。それじゃあ私はこれで……」

どうやらクリスは俺たちに呆れて、くじ引きに行ったらしい。

と、くじ引き会場から、凄まじい歓声が上がる。
「やべぇ!!　あのイケメンの兄ちゃん1等と2等を同時に当てやがったぞ!!」
「さっきの頭のおかしい二人組も中々だったが、あの兄ちゃんは格が違うな!!」
「姉ちゃんだよ!!」
　周りのヤジに、律儀に怒鳴りつけるクリス。どうやら俺たちの後にちゃっかり当ててしまったらしい。それを理解した俺たちはゆらりと立ち上がり、
「どうして先に引いた俺たちじゃないんだよぉ。どうしてぇ?どうしてだぁ?」
「理不尽ですねぇ、誰のせいでしょうかぁ?」
「ちょっと二人とも目が怖いよ!?　というか先に引いても後に引いても確率は一緒でしょ!?」
　にじり寄る俺たちに、クリスは怯えたように後ずさる。そもそもここにクリスが来なければ、俺たちは両方の景品を手に入れられたはずだ。つまり、その景品は俺たちにも所有権があるはずである。異論は認めない。
「よしめぐみん、俺がクリスを取り押さえる。お前は交換所で待ち伏せしろ、交換所までは距離がある。絶対に手に入れるぞ」
「分かりました。私の盗賊としての力、今こそ発揮します」
「じょ、冗談だよね?　とういうか最早それだと盗賊じゃなくて強盗だよ?　そういう

のよくない、よくないよ!!」
　俺は鋼鉄製の捕縛用のロープを取り出し、めぐみんは走り出すために構える。そして互いに頷きあった。作戦開始だ!!
「おらああああああああああ」
「いやあああぁぁぁぁ、こっちこないでえええ、助けて、助けて!!　私がお世話になるのはまずい気がするけど警察の人助けてえええええ!!」

　結局俺たちは、逃げ足の速いクリスを捕まえきれなかった。スキルを使おうとしたところ、ちょうど居合わせた警察に注意されたからだ。……幸運の女神って恐ろしいな。
　というか冷静になってみると、今回は物欲で明らかにおかしくなっていた。今度クリスにはしっかり埋め合わせをしよう。
　そんなことを考えていると、くじ引きの引換所からめぐみんが出てきたようだ。
　大量の荷物を抱えながらほくほくとしている。
「いやぁ、１等や２等ばかりに目が眩んでましたが、他の景品もなかなかいいものですね」
「重い奴渡せよ?……って確かに多いなこれ。ちょっと高級めのくじ引きだったから

か」
「そうですね、調味料セットや、石鹸洗剤がもらえて嬉しいです。自分で揃えようと思うと地味に高いですからね」
そう言って微笑むめぐみんは、とても家庭的で落ち着いた美少女に見える。……まぁ実際は線香花火みたいな生き方をしているわけだが。
と、何かのチケットの様なものを手渡してくる。
「あっ、あとこれ今度みんなで見に行きましょうよ。私たちの活躍を見られるらしいです」
めぐみんに手渡されたそれは、3等賞の景品の劇場のチケットだった。
「えーと、何々……ベルセルグ王国第一劇団……演目は『勇者物語』……か？　なんだこれ」
「ベルセルグ王国第一劇団は、この国で最高クラスの劇団です。そして『勇者物語』はごく最近公演を開始した物語らしいです。というのも、勇者が魔王を討伐するまでを描いた、ノンフィクションだそうですよ」
ノンフィクションってことは事実通りってことだよな……。えっ……？　何それ、もしかして？　俺は思わず、心を躍らせ身を乗り出して、
「……もしかしてその勇者って、あれだよな？」

「はい、この世界に魔王を倒した勇者は一人しかいません。カズマ、あなたの事ですよ」
……き、きたんだ、やっと俺の時代が来たんだ!!　あれだけ散々罵られて馬鹿にされてきた俺が、やっと報われる時が来たんだ!!　苦しかった日々が思い出され、思わず涙が零れてしまう。
「ちょ、ちょっとカズマ!?　どうして泣いているのですか?」
「いやぁ……俺も遠いところまで来たもんだなぁ、って思ってただけだよ……」
「……カズマは人一倍苦労を重ねてきたと思います。少しぐらい報われてもいいはずです」
「ありがとう、今度みんなで見に行こうな」
普段から褒められることの少ないのは俺だけではない。ダクネスもアクアもそのはずだ。きっといい慰安になるだろう。これは案外いいものを手に入れたのかもしれない。
さて、だいぶ日も暮れてきた。夕焼けが優しく街を包み込み、白レンガを茜色に変えていく。
そろそろ俺たちも帰る時間か。でも何か忘れているような……。
「どうしたのですか?何か気がかりでも?」
「いや……大事なことを忘れてるような気がしてな」

「なるほど……そうですね……。あっ、そういえば夕飯の食材を買っていませんよ」
そういえばそうだった。昼間はアクアを泣かせちゃったから、御馳走を用意してやると決めてたんだったな。……本当にそれだけか？他にも何か忘れてるような……。
まぁいいや、どうせ大したことじゃない。気にするだけ無駄ってもんだろう。
「それじゃあ今日はお土産として美味しいものでも買っていってやるか。帰ったらめぐみんも調理手伝ってくれ」
「分かりました。カズマの料理の腕を盗ませていただきますね!!」
めぐみんはそう言ってニヤリと笑う。俺は料理スキルを持っているから簡単には超えられないはずだけどな。

食料品店から出た俺たちは、既に薄暗くなりつつある空の下で帰路に就く。
それにしても今日は楽しかった。実質初めてのめぐみんとのデートだったが、一緒にバカ言いながら歩くだけでも楽しいものだ……。それこそ、うぶなカップルみたいな考えだが、そう思ってしまった。
さて、そろそろ帰ろう。そう思って俺はテレポートの詠唱を始める。
と、めぐみんが顔を上げて満面の笑みを浮かべて、
「今日は楽しかったです。また連れてきてくださいね!!」

……やっぱり直球は苦手だ。一言で甘酸っぱい気持ちにしてしまうこいつは、なんてずるい女なんだろう。それとも俺がチョロイだけなのだろうか。

でも確かに俺も楽しかった。それはこいつがいたからだろう。

「もちろん。また一緒に来ような」

こうして俺の長い長い一日は終わりを告げた。

ちなみに、爆裂魔法の補助スキルを教わる約束を思い出したのは寝る前だった。俺はともかく、めぐみんが爆裂魔法の事を忘れるなんて珍しい。……まぁデート前半は俺がブチ切れてたので仕方ないが。

まぁいいや、ウィズ先生に休みを伸ばしてもらって明日にでも教えてもらおう。

そんなことを考えながら、次のデートに思いを馳せ、いつになく安らかな眠りに就くのであった。

第８話　背中合わせの爆裂魔達

王都でデートした翌朝。

俺とめぐみんは、爆裂魔法補助スキルを教えてもらうための的探しに、アクセル近くの森にきていた。正直、近くでさっさと済ませて欲しいが、最近硬いものばかり壊してきためぐみんにとっては不満らしい。

「やはりカズマは見どころがありますね。今日は我が爆裂道の素晴らしさを余すところなく伝えましょう!!」

「念のために言っとくが、俺はお前みたいな一発屋になるつもりはないからな。一応は爆裂魔法を使えるようにしよう……ってだけだ」

残念なことに、俺のしょぼい魔力では爆裂魔法一発も撃てない。スキルを持っているのに使えない珍妙な状況なわけだ。だからこそ『消費魔力減少』のスキルを教えてもらおうとしているわけで、……決してめぐみんの様になりたいわけじゃない。

「むぅ……一発屋とは心外ですね。その究極の攻撃であるその一発が、どれだけ価値のあるものなのか理解していますか？　というかカズマは散々私を活用してきたではあ

りませんか」
「……まぁ、実際凄いってのは俺も分かってるよ。あれだけ長い詠唱と魔力を必要とする呪文もないしな」
「そうですよ。爆裂魔法は凄いんです。詠唱だって最高に格好いいですし」
　言い切っためぐみんは杖を高らかに掲げて得意げな顔をする。それにしても詠唱か……。
「そういえば、めぐみんはなんでいつも詠唱が違うんだ？　魔法の詠唱と身振りって決まってたと思うんだが。下手に詠唱の内容を変えると威力が下がるはずだぞ」
　中級魔法程度ならともかく、上級魔法以上の魔法となると詠唱は魔法の制御の重要な要となる。ウィズ先生に綺麗な詠唱を教わった俺にとっては、かなりの疑問だったのだ。
「おっと、私自慢の詠唱について聞いてくれますか。実はですね、これには深い深い理由があるのですよ」
「ほう、それは気になるな……。威力を上げるためのコツとかがあるんだよな？」
　こいつは爆裂魔法に関してだけは、間違いなく最高峰だ。そんな爆裂狂の言葉なら是非参考にしたい。思わず期待を向けてしまう。
　もしかしたら、秘められた詠唱とか、伝説の秘文や、禁術的なものがあるのかもしれ

ない。
　と、めぐみんはすました顔で、
「主な理由は、格好いいからです」
「なるほどな、さすがめぐ……いまなんて？」
「格好いいからです」
　……。
「だ、だから格好いいからですよ!!　そんな目で睨まないでください。確かに私は響き重視で詠唱しています。でも、カズマならこの詠唱のカッコよさを分かってくれると思っていましたよ？」
「……普通さ、威力とか、精度とか上がるって思うだろ。あれだけ詠唱しといて意味ないってなんだよ」
　期待を裏切られて、思わず落胆してしまう。やっぱりこいつはネタ種族のネタ魔法使いだったのか。そういえば紅魔族も『ライト・オブ・セイバー』の魔法を意味なくアレンジしてたっけな。
「効果もないのに詠唱を変えるとか、やっぱりお前もネタ種族の一員なんだな」
　思わず呆れてしまった俺は、深くため息をつく。するとめぐみんは少し怒ったように、

「……何か勘違いしているようですが。私を普通の紅魔族（あのボンクラども）と一緒にしないで欲しいですね。私のオリジナル詠唱はきちんと威力上昇します。奴らとは違うのです」
「なんだよ！　だったら最初からそう言えよ！」
　結局威力が上がることが分かった俺は、思わず声を荒げる。それにしても効果のある詠唱か……。
「気分や天候、季節、相手など様々な条件に合わせて私は詠唱を変えているんです。格好よさ重視ですが、ついでに威力や精度も上昇します」
　格好良さを重視の気分屋は、さも当然なことの様に言い放つ。
「そっちがついでなのか……。というか意味のある詠唱変更ってとんでもなく難しいと思うんだが。お前に出来るのか？」
　詠唱というのは、難しい魔法を扱える一握りの天才が、一般人にも制御できるように……という意図のもとに作られたものだとウィズ先生は言っていた。
　しかし、めぐみんを胸を張って、
「出来ますよ、私は紅魔族随一の天才魔導士ですからね、その程度ちょちょいのちょいです」
「……アクセルのみならず、故郷でもネタ魔導士扱いされてるお前がよく言うよ」
「なにおう！　魔法の教養のない一般人はともかくとして、爆裂魔法を理解している癖

に馬鹿にしてくる、奴らの方がおかしいのですよ。奴らには魔法の教養がないのでしょうか？」

「……教養があるから馬鹿にしてるんだと思うんだが」

掴み掛ってくるネタ魔導士を、いつもの事なので適当になだめる。

と、めぐみんは胸倉を掴む力を緩め、大きな溜息をついた。そして落ち着いた声で、

「……そうですね。折角なので実演してみせましょうか。それではカズマ、適当な魔法を撃ってみてください。詠唱を見せてほしいのですよ」

珍しく凛々しい表情を湛えためぐみんが、真っすぐに俺を見つめてそんなことを、

「何をする気か知らんが分かった。どの魔法でもいいんだな？」

「はい、でも、森の中なので火はやめてくださいね」

「それぐらいは分かってるよ」

実は最近覚えたてなので試してみたかった呪文がある。普段は詠唱は小声で済ませたり、簡単なものなら省略したりするのだが、めぐみんの前だしめいいっぱい格好つけてやろう。

使うのは上級風魔法だ。俺は手の平を遠くの木に向かって突き出し、詠唱を始める。

「……悠久の時を廻る優しき風よ、我が前に集いて裂刃と成なせ『トルネードッ！』」

手のひらから爽やかな魔力が迸り、目標の気の辺りの大気が一瞬揺らめく。

次の瞬間、天高く竜巻が舞い上がり、ミシミシと音を立てながら木を根ごと巻き上げた。なかなか上出来だと感じた俺は満足げに頷く。

と、めぐみんが目を輝かせて駆け寄ってきて、

「すすす、凄い！　凄いです!!　カズマが上級魔法を使えるようになったのは本当だったのですね！」

「落ちつけめぐみん、俺が凄いのは前からだ、そしてこの程度はほんの一部の力でしかない」

「あ……。ああ……。ふあああああああ」

めぐみんは、仮面盗賊をやっているときの俺に向ける様な、憧れの色を目に浮かべている。……実は、魔力の消耗が激しすぎて後数発しか打てないのは内緒だ。

「っておいめぐみん、俺の凄さに惚れ直すのは構わないけど、本題を忘れるなよ。さっき私の力を見せるとか言ってただろ」

「ふあああああああああ」

「話を聞けよ!!」

チョップのおかげかハッとしためぐみんは頭を振って、

「……おっと、私の男が思いがけず格好良くなっていたので、取り乱してしまいました」

「ち、違うぞ、俺、別にお前の男じゃないぞ」

俺が剛速球をぶちこんでくるめぐみんにたじろいでいると、直球女は軽く咳ばらいをした。そして冷静な顔つきで語りだす。

「……確かに覚えたてにしては良い魔法でしたが、改善の余地がありますね。詠唱がちょっと無駄に長いかもしれません。今日の気候なら――、あとは詠唱のこの部分を――そして身ぶりを――」

どうやら、詠唱や身振りについてコメントをくれるらしい。こいつの専門は爆裂魔法だけだったはずだが、大丈夫なのだろうか。半信半疑で一応めぐみんの指示に従って、素振りをしてみる。

……案外しっくりとくるものだな。

「それじゃあ教えた通りに魔法を使ってみてください。色々と変わるはずですよ」

「……わかった」

隣に立つめぐみんを一瞥し、俺は指示通りに再度詠唱を始める。

「……暴虐なる烈風よ、彼のものを悠久なる眠りへと誘え！『トルネードッ！』」

撃った瞬間はっきりと分かった。さっきよりも明らかに消費魔力が少ない。

目の前では、さっきよりも高く大きな竜巻が舞い上がり、木の植わっていた大地ごと巻き上げている。

端的に言えば、魔法の威力と効率が上がっていた。

「おい……めぐみんは一体俺に何をしたんだ？」
　明らかな異常事態に、汗を垂らしながら聞いてみる。しかし、めぐみんは満足げに頷きあっさりと、
「私は何もしていませんよ？ 詠唱の無駄な部分を削って、余った部分を威力強化に充てただけです」
「いやいや……そんな簡単に出来るはずないだろ」
「……私は一度見た魔法の術式を忘れることはありませんし、一度見れば大体術式の構造が分かってしまいます。それでオリジナル詠唱を考えるのが得意でした。実際、爆裂魔法に憧れる前は、上級魔法のオリジナル詠唱を教えてあげたりしていました」
　そんなことを言ってのけた。こいつこそチート持ちだろ。爆裂魔法に憧れる前って、今のこめっこぐらいの年じゃないか。
　というか、今こいつは魔法の教科書に載ってあることをすんなりと塗り替えたわけだ。少なくとも発表すれば歴史に残ることは間違いない。
　今更ながら、赤髪のお姉さんと俺は、本当に余計な事をしてしまったらしい。
「……今からでも上級魔法を覚える気はないか？　すぐに伝説になれると思うんだが」
「ありませんね。私に爆裂魔法以外は似合わない。爆裂道だけを歩み続けろと言ったの

はカズマではありませんか」
「言ってない。俺、そんなことまで言ってないぞ」
「私は爆裂魔法以外の魔法に興味が無いのです。だから、この力を爆裂魔法以外に使うつもりはありません。今教えたのはカズマだからですよ」
一瞬天才かと思ったが、やっぱり馬鹿だったらしい。……いや、だからこそ爆裂魔法を極められたのかもしれないな。
と、めぐみんは俺…ではなく、俺の背後に目線をやって。
「私がいいところを見せたのです、カズマもいいところ見せてくださいよ?」
「俺の後ろに何か……あっ」
目線に釣られて振りむいた先には、トルネードの音で引き寄せられたであろうモンスターの群れがいた。
そうか、だったら見せてやろうじゃないか。
「めぐみん、俺から離れるなよ? 今度は俺の力を見せてやる」

★★★

――森の奥では、多数のモンスターと、その死骸が散乱している。

中には、動いている死骸の群れの姿もあった。そしてその中心で……

「フハハハハハ、この勇者カズマの敵ではないわ『フラッシュ』！『バインド』！」

「か、格好いい、格好いいですよカズマ!!　胸が、胸がドキドキします!!」

「割と大きな群れだな、まぁいいや、『狙撃』、『狙撃』、『狙撃』」

俺は最優先で遠くの敵を狙う。目の眩んだ敵や拘束された敵は、放っておいても切り刻まれていくからだ。

死骸の大半はコボルト、ゴブリンなどだが、いくらか大型モンスターも混じっていた。

「でも……その……言いにくいのですが……」

「なんだ？　……おいそこのお前『パワード』！『スピードゲイン』！……補助魔法掛けてやったんだからしっかり働けよ、後臭いからどうにかしろ」

俺の言葉に反応したのか、そいつは言葉は発さないが小さく頷く。少し不満気な気がしたが。

「卑怯！　とっても卑怯ですよ！　いえ、魔王みたいな戦い方で格好いいとは思いますが!!」

「なんだ文句あるのか？　仲間を引き連れて戦ってるんだ、どっちかといえば勇者っぽいだろ」

「仲間って言っても全部アンデッドモンスターじゃないですか!!」

そう、先ほど魔法を掛けたのは俺が召喚したゾンビだ。氷で作った剣を渡し、補助魔法を掛けてやったのでこちらのモンスターには遅れは取らない。

そんなゾンビやら、よく分からない何かやらが十数体、俺の指示で動いている。

「っと少し減ってきたか『カースド・ネクロマンシー』！　ほら、しっかり戦ってるだろ？」

唱えた呪文に反応し、地面に黒紫の魔法陣が刻まれる。そして、大小さまざまなゴブリンの死骸に魂が宿る。そいつらが元々持っていた剣を拾い、前線へと向かっていくのを俺は見届けた。

「いやいやいや！、私はてっきり上級魔法で戦うのかと思ってましたよ、カズマはドレインタッチもあるのですから、それでも十分戦えるでしょう!?」

「だって自分で戦うの面倒だし、ドレインタッチしながら戦うのはスキが出来て危ないんだよ。　おっとあそこは苦戦してそうだな」

俺の目線の先では、大きなワニを攻めあぐねるゾンビ達の姿があった。

「ついにカズマという大将が動くのですね。これは見物です」

「『パラライズ』！」

「ずるっ！　それはずるいですよ！　いやまぁ私は好きですが!!」

さっきから文句を言いたいのか感心したいのかよく分からないなこいつは。

ともかく、ワニは俺の魔法を受け、痙攣して動かなくなった。あとはあいつらがどうにかしてくれるだろう。

と、一体のゾンビが俺の方に向かってきた。そろそろ補給の時間だ。

「さっきからカズマは一々戦い方が狡いのですよ、ってなんですかこのゾンビ」

「これぐらいの方が安全でいいんだよ。……っとありがとな」

「ひえっ」

ゾンビが持ってきたのは、動けないように拘束された一撃ウサギ。それを左手で掴み、俺は地面に座り込む。ドレインタッチをするための休憩タイムだ。

めぐみんも辺りをキョロキョロと見まわしてから座り込む。

「このウサギって意外と魔力多いんだよな。満タンまではいかないが、だいぶ回復できそうだ」

「あなたは魔力回復用の敵まで、ゾンビたちに運ばせているのですか。……戦場ニートとはこのことでしょうか」

「やかましいわ、ネクロマンシーは維持するのにも魔力がいるんだよ。そして大軍の将は何もせずに偉そうにふんぞり返ってるのがいいんだ。そうしないと部下に不安を与えることになるからな」

「こ、この男は……いつか家事までゾンビたちにやらせそうな勢いですね」

「……ありだな」
「全然ありじゃありませんよ!! 真面目な顔して頷かないでください!! 家事は私がやってあげますから臭いゾンビは辞めてくださいよ!!」
めぐみんは全力で首を振る。それを横目に、俺は辺りを見回した。かなり森の奥まで進んできたのだが、まだ爆裂魔法の的が見つからないのだ。
「しかし、結構進んでも的ってないもんだな。ほら、あの岩とか結構大きいけどダメなのか?」
「ダメですね。最近の私を満足させられるものではありませんよ。」
前までなら喜んで爆裂魔法を打ち込んでたと思うんだがな。しかし的が見つからないと補助スキルも教えられないらしく、困ったことになったな……。
もう少し進めば山があるのでそっちに行くか。
と、突然『敵検知』に反応があった、『千里眼』を使って確認する。
「……あの大きな獣は……初心者殺しか、どうだめぐみん?あれ相手に爆裂魔法を使わないか?」
「むぅ……初心者殺しですか、相手にとって不足ありすぎなのですが」
適当に拘束して、その間に補助スキルを教えてもらおうと思ったのだが、ダメらしい。なんだか面倒くさくなってきたな。

「……そこまで言うなら一人で倒してくれてもいいんだぞ？　確かお前俺たちの手柄を横取りしたことあったよな？　ほら行ってこい。自力でアクセルまで帰ってきたら認めてやる」
「や、辞めてください!!　というかカズマは私を置いて逃げたり……しま……せん…よね？」
「ちなみに俺の持っているスキルは『潜伏』、『逃走』、『テレポート』――」
「ごめんなさい！　ごめんなさい！　謝りますから置いていかないでください!!」
　めぐみんは俺の本気の表情を見て、怯えたように縋りついてくる。しかし、あまりに大声で騒ぎすぎたのか、初心者殺しがこっちに向かってきている。
「おいめぐみん、お前のせいで初心者殺しが寄ってきてるんだが、何とかしてくれ」
「あなたのせいでしょうが!!　というか私の爆裂魔法は範囲が広くなりすぎて、この距離なら私たちも爆風に巻き込まれます」
　レベルが上がりすぎて逆に使い辛くなるってなんなんだよ。駆けてくる黒い巨体を眺めながら考える。今、俺を護衛しているゾンビではあいつを倒すには力不足だろう。……仕方ないか。
　そう考えた俺は干からびた一撃ウサギを捨て、もう一体の一撃ウサギをゾンビから受け取る。

「仕方ないな、見てろめぐみん、今回はこの俺自身が戦ってやろう」
「ついに来ましたか、今度は正統派で格好いいところ見せてくださいね」
正統派を強調しないで欲しい。おれが悪党みたいじゃないか。謂れのない批判を受けた俺は、派手な魔法で評価を変えてやろうと決意した。
詠唱を終えた俺は初心者殺しに向き直る。向こうも流石に馬鹿じゃないのか、タイミングを図っているようだ。
だが、俺はあいつがそれほど素早くないのを知っている。カウンターでも十分間に合うはずだ。
いつまで経っても動かない俺に待ちかねたのか、初心者殺しが飛びかかる！
その瞬間、俺は魔法を解き放った。
「『アース・シェイカー』ッッ！」
「!?」
俺の呪文と同時に、初心者殺しの足元が突如としてせり上がり、その巨体が空高く放り出される。下からの攻撃に不意を突かれた形となった初心者殺しは、体勢を崩して空中でひっくり返った。
俺は宙を舞う初心者殺しに手を突き出し、満足げに呟く。
「まぁ悪くはない動きだったな。だがこれで終わりにしよう『ライト・オブ・セイ

バー』ッッ！」
「ガウウウウウウウッ……ゴハッ」
　その瞬間、大気を震わせる複数の光剣が出現し、身動きのとれない初心者殺しの巨体を切り刻んだ。
「また、つまらぬものを切ってしまったな」
　無駄に格好付けた俺は、プルプル震える足腰に力を入れめぐみんに振り返る。
「ふあああああ、はぁ……はぁ……本当に格好いいです!!　空中に敵を浮かべて切り刻むなんて!!　本家紅魔族でもここまで格好いい魔法の使い方をする人はいませんでしたよ!?」
「そうだろう、これが全てのスキルを使いこなす、最強の冒険者の実力さ……あれっ」
　宙から初心者殺しの死骸が落ちてきたのを確認すると、力が抜けて倒れこんでしまった。
　同時に俺の周りを不安げにうろついていたゾンビたちも崩れ落ちる。いわゆる魔力切れだ。
「ちょ、ちょっとカズマ、どうしたのですか!?　怪我なんてしてなかったと思うんですが!!」

違うんです。ただの魔力切れなんです。
左手に握ってる一撃ウサギから魔力を吸い取ればすぐ戻ります。
心配そうに駆け寄ってくるめぐみんにまさか、『格好つけようとして一本で十分な光剣を複数本出現させた』とか、『アースシェイカーでの飛距離を上げるために、大半の魔力をつぎ込んだ』なんて言うわけにはいかない。
ここはなんとか誤魔化さなければ、めぐみんと同等まで堕ちてしまう。
そんなことを考えて、重い体でフラフラと立ち上がると、
「ぐうう、これは眩暈だ、俺の、真の力が目覚めようとしているのかもしれない……」
「カ、カズマ……」
正直黒歴史待ったな無しな恥ずかしい言い訳だが、こう言っておけばネタ種族のネタみんは満足するはずだ。
しかし、めぐみんは悲しそうな顔をして、
「……格好いいとは思いましたが、カズマはそんなこと言う人ではありません。……もしかして、無理をしすぎて魔力が切れたのではないですか？」
無駄なところで俺のことよくわかってますねこの人。
……。
いや、いやまだだ。まだ諦めるには早い。

「違うぞ？　流石にあの程度の魔法で魔力切れを起こす俺じゃないさ」
　言ってて悲しくなるが、今は仕方ない。祈るような俺の思いに反して、めぐみんは訝しげに、
「……ではどうして、左手で一撃ウサギを絞っているのですか？」
「ち、ちがう、これはあれだ、実はこいつは俺の半身で――」
　必死の言い訳虚しく、五分後には全てを白状させられた。

★★★

　――あの後、適当なモンスターから魔力を満タンまで吸収した俺達は、森を抜け、岩だらけの山岳地帯に来ていた。
　もっと正確に言えば、俺は絞られた雑巾のように硬い地面にへたり込み、対照的にめぐみんは喜々としている。
「な、なぁめぐみん……もう爆裂魔法の魅力は十分分かった……、だからもういいだろ」
「もう少しで終わります。本当にあとちょっとですよ。それでカズマも普段から爆裂魔法が使えるようになるので頑張ってください」

俺が疲労している理由は、めぐみんの熱心すぎる爆裂魔法トークのせいだ。爆裂魔法の的に普段何気なく爆裂魔法を使っているめぐみんだが、実は常日頃から爆裂魔法の改良を進めていたらしい。効率やら威力やら、格好よさ……はどうでもいいが、ともかくその辺にはとんでもないこだわりがあるのだ。その辺の話に俺が興味を示したが最後、爆裂デスマーチが始まってしまった。

「ではカズマ、3度目のおさらいです。爆裂魔法とはなんですか？」

知識を詰め込みすぎて頭が痛いが、答えないと終わらないのでめぐみんの質問にいやいや答える。

「……爆裂魔法は複数属性の最上位魔法です。火や風系統の魔法の深い知識が特にその習得に大きく関わってきます」

ちなみに俺は『インフェルノ』も『トルネード』も使えるので問題ない。それは俺に爆発系統の適性があったわけではなく、ただ単に満遍なく才能がなかっただけらしいが。

遠い目をしていると、また冷血教師めぐみんが質問を飛ばしてくる。そして俺は答え、質問が飛んで、俺が答え、飛んで、答え、飛んで、答え・・・・・・・。

「では次、爆裂魔法の身振りのやり方は？」

「――――」

「魔力誘導のやり方は？」
「――――」
「威力調節の方法は」
「――――」
……。
「あぁ……」
「カズマ！カズマ！しっかりしてください!!　これで爆裂魔法の補助スキルを覚える準備が出来ましたよ」
目の前の誰かに頬を叩かれているらしい。無理解の浮遊感の中にいる俺には、内容は聞こえても理解はできない。
「あぁ……？」
「ちゃんとしてください。……もしかして眠ってますか？」
よくわからないが、誰かの顔が近付いてくる。そしてその唇が俺の頬に触れた。
キスか……
ん？　まてよ……？
キスかこれ。キスじゃねぇか!!

朦朧としていた意識がはっきりとし、現実の世界に戻ってくる。見ると、赤い顔をして俯くめぐみんがいた。

「……なぁお前、脳の疲労で意識失いかけてた俺に何してくれてんの？　やっぱ痴女なの？」

「ちちち、違いますよ!!　誰が痴女ですか!!　わ、私はただ、お伽噺の様に、王子様はお姫様にキスされて目を覚ますものだと……。」

めぐみんは身を乗り出して、紅い目を輝かせながら必死の様相である。……というかそのお伽噺逆だろ、それだと姫様がヒーローなんだが。

それにしてもだな……。

「……まさかめぐみんがお伽噺をなぞるなんて……お前って本当に乙女要素あったんだな。正直驚いたぞ」

「失礼ですねあなたは!!　どこからどう見ても乙女……って毎回これ言ってますね。……わ、私も元々は乙女なんて糞くらえって思ってたんですよ？　でもそんな私を変えたのは……」

最後まで言い切れなかっためぐみんが、チラチラと俺の方を見てくる。……俺は鈍感系じゃない、だからその意味は分かる。ただ、こんな雰囲気もへったくれもない岩肌地帯で言われても困るし、正直恥ずかしい。だから俺は、

「と、ともかくその話は置いといてだ。爆裂魔法トークは終わったんだな？」
「そう、そうです!!　今のあなたなら爆裂魔法補助スキルを覚えることができるはずですよ。さぁ覚えましょう!!」
　早口でまくし立てるようなめぐみんにつられて、俺は冒険者カードを取り出して確認する。そして爆裂魔法の欄を見ると、
「……おいめぐみん、補助スキルが黒文字ですら表示されてないんだが」
「あ、あれぇ？　おかしいですね……ってああ!!　まだ私が爆裂魔法を使ってないからですよ」
「そ、そういえばそうだったな……」
　スキルを習得欄に出すためには、スキルの事を理解した後、そのスキルを実際に見る必要があるのだ。そんな当然のことも俺たちは忘れていたらしい。何を焦っているのだろう。
　大きく深呼吸をして心を落ち着けた俺は、遠くの石柱を指さして。
「それじゃあやっちゃってくれ、まさかあのでかい石柱で満足できないってことはないだろ？」
「はい！それでは見せてあげますよ」
　そう言ってめぐみんは、バッと身を翻し詠唱を始めた。どうやら今回は詠唱ありで全

力の魔法を撃つつもりらしい。
詠唱が進むにつれ、大気が震え小さく帯電させ、使い手の元に魔力が集結していく。
「……改めて見るとすごいな」
自分が少しだけ魔法に詳しくなったからだろうか？　それとも爆裂ソムリエとして、久々にめぐみんの爆裂魔法を見るからだろうか？
「見ていてください。これが数多の魔王軍幹部を葬った、間違いなく世界最強の一撃、私の爆裂魔法です」
格が違うと深く感じさせるその魔力のうねり。族長の試練を乗り越え、名実ともに次期族長となったゆんゆんが、めぐみんに勝てないといっているのが分かる気がする。
と、めぐみんの杖の先に破滅の光が灯った。
『エクスプロージョン――――ッッッ！』
石柱に向かって一筋の閃光が走り抜ける。
次の瞬間、凶悪な破壊の力が石柱の中に炸裂し、その破片ごと全てを飲み込む。
爽やかな爆風が吹き抜けた後、爆裂魔法の範囲と全く同じだけごっそり削れた石柱が残っていた。
「今日の爆裂は九十九点だな、もしかしたら今までで最高の爆裂魔法かもしれん。その暴虐さを体現した様な衝撃波が、全身を力強く包むこむ。それでいて、どこか優しく、爽

やかな感情を感じさせる一撃だった。ナイス爆裂」

俺が下した採点に、めぐみんは満足そうな笑みで倒れこんだ。

「ありがとうございます！昨日は爆裂魔法を撃つことが出来なくて溜まっていたのですよ。それにさっきのカズマの姿を見ていたら、私も負けてられないと思い、思わず熱がのってしまいました」

満足気なめぐみんの元に近づいた俺は、ドレインタッチで与えようとして……異変に気が付いた。明らかに辺りの小動物やらモンスターやらがいなくなっている。つまるところ危険信号だ。

と、視界の上端を何かがかすめる。ふと上を見上げると、遥か上空に、そいつが浮いていた。

「おいおい……なんであんなのがいるんだよ」

そいつは巨大な翼をはためかせながら、鋭い敵意を向けてくる、巨大な鷲の上半身と獅子の下半身を持つ獰猛な魔獣の名は……。

「グリフォン……ですか！」

アクセルの山岳地帯にはグリフォンなんて住まないはずなんだけどな。魔獣の王様が何やってんだか。

動けなくなっためぐみんは怯えたように震えている。そりゃそうだ、俺だって怖い。

「俺たちって呪われてるのか？　なんでこうもすんなりといかないんだろう。今度こそアクアに解呪魔法掛けてもらわないとな」
「馬鹿な事言ってないで早く逃げましょう!!　しかもこいつは普通の個体より遥かに大きいです。一撃でも貰えば即死ですよ!?」
普段なら即テレポートの詠唱を始めていただろう、しかし今回はそうならなかった。
俺はグリフォンが近付いてくる前に、素早く冒険者カードを操作する。
「ちょっとカズマ!?　何をしているのですか?早くテレポートか潜伏を……」
「大丈夫だ、この程度の敵、めぐみんが出るまでもない、俺に任せとけ」
そう言って、悠然と構えた俺は、今初めて自力で使えるようになった呪文の詠唱を始める。
「……も、もしかして!カズマはあいつを倒す気なのですか？　しかも……その呪文は!」
使おうとしている呪文に気が付いたのか、めぐみんは体を小さく震わせ感嘆の声をあげていた。まぁさっきこいつから教わった詠唱だから気が付かないわけないか。
グリフォンは時折、猛禽類特有の甲高い鳴き声をあげながら、悠然と距離を詰めてくる。王様らしい余裕の有様だ。
程なくして詠唱を終えた俺は、火傷しそうなぐらいに熱い破滅の光を杖に携える。使

うのは二回目だが、制御のためには一瞬だって気が抜けない。
「せっかくめぐみんに教えてもらったんだ、こういう時に使わなきゃ損だろ」
「あ……ああ……!!」
紅い瞳を輝かせ、深い尊敬の色を浮かべためぐみんを一瞥し、俺は再度制御に集中する。
寸でのところまで迫ってきていたグリフォンに短杖を向け、俺は魔法を解き放った。
『エクスプロージョン――ッ！』
杖から伸びた閃光は、グリフォンに向かってほとばしる。
そして、破滅の光が爆散し、その巨体の全てを消し飛ばした。
それはめぐみんの爆裂魔法に比べれば小さなものだったが、グリフォンを消し飛ばすには十分すぎたらしい。
そこまで確認しながら俺は、そのまま倒れて動けなくなった。さっきも魔力を使い果たして動けなくなったが、今回はその度合いが全く違う。指先すら全く動かず、辛うじて声が出せるかどうかといった状態だ。
「ふあああああ、カ、カズマの爆裂は九十五点です。威力は私に遠く及びませんが、自身の持てる全ての魔力を、破壊力に転換したその心意気、そして何より、あのグリフォンを一撃で倒した格好よさを評価しますよ!!　５点分はこれからの精進を期待しての

ことです。これからも頑張ってくださいね」
　めぐみん師匠は心底幸せそうに声を震わせながら、俺の爆裂魔法を評価してくれた。
「ありがとうめふみん、しっかしおまえのきもひがすこひだけわかったきがするよ、ばくれつまほうってきもちいいな」
「ちょっとカズマ、呂律が回っていませんよ!?」
「つかれた」
　正直口を動かすだけで限界だ。全身からごっそり魔力と一部の生命力を持っていかれたらしい。でも、心地良い疲労感を感じる。毎日ポンポン撃ってるあいつの気持ちが少しだけ分かる気がするな。
「さへ……ばくれつまほうもおぼえたし、かえるか」
「そうですね。あんまりこんな場所に長居するのもよくありませんし」
　そう言って俺の視線の先で、めぐみんは生まれたての小鹿の様に起き上がろうとして……顔で地面をキャッチした。
「ぶふっ」
「今！　今笑いましたねこの男!!　というかさっさと帰りましょう、起きてくださいよ」
「さっきもいったけど、からだうごかないからおきられないぞ」
「え？」

そこまで言って、めぐみんは顔を青ざめさせる。多分俺の顔も青くなっているはずだ。

今気が付いたが、もしかしてこの状況……。

「……おれたちどうやってかえるんだ」

「本当ですよ!!　あなたは馬鹿なんですか!?　帰る方法確保してから爆裂魔法を使ってくださいよ!!」

「ばくれつまほうのふくさようで、ばかになったらひい。おまへみたいに」

「こんな非常事態に何を言っているのですか!!　あぁもうどうすれば……」

割と真剣に悩んでいる俺たちだが、端から見れば地面に突っ伏してるアホ二人にしか見えないことだろう。幸いなのは、グリフォンの影響か周囲には全くモンスターがいないことか。しかし、いつ敵が来るか分からないのが恐ろしい。この状況を打破する作戦を真剣に考える。

と、手足は動かせるめぐみんが、指先も動かせない俺の横まで這いずってきた。

「おまへなにしてんの?　もしかしてやがいぷれいをしょもうか?」

「本気でカズマが望むなら、やってあげてもいいんですよ」

「ゑっ!?」

とんでもないことを言い出したせいで、思わず吹き出してしまう。しかしめぐみんは

クスクスと笑っていた。……また、こいつのおちょくりか。
そんなことを考え、プイッと目線を逸らす。
と、仰向けの俺にめぐみんがふんわりと抱き着いてきた。
「……カズマの身体って意外とガッチリしてますよね」
思わず、心拍数が上がっていくのを感じる。冷えた体にめぐみんの体温が心地良い。
自然と身体はめぐみんを受け入れて……じゃねぇ!!
冷静になれ。
初めてはきちんとした場所でやるんだ。
抵抗できないけど……。
あれっ……これ詰んでない？
……。
「はじめては……やさしくしてね……？」
「違いますよ!!　何を勘違いしているのですか!!　口をキスの形にして目を瞑るのは辞めてください!!」
俺の左肩あたりに顔を乗せためぐみんが声を荒げるているが、それどころじゃない。
熱い息が直接顔に当たるぐらいの距離で、密着した体から心臓の音さえ感じてしまう。しかも一切動けないのが、より俺の緊張を助長していく。

「キスしてくれないのか……ざんねんだな」
「そ、そんなに残念でしたか。でしたら……じゃなくて!!　これは真面目な作戦なんです。いいですか、今から私は全力で魔力回復に努めます。ですからある程度魔力が回復したらカズマは私にドレインタッチを掛けてください」
　一瞬唇を近づけようとしためぐみんは、はっとして、そんなことを言ってくる。
……確かにこの状況だとそれが最善かも知れないが……。
「……だったら、わざわざ、だきつかなくていいだろ、けっこう、いしきしちゃうんだぞ」
「そ、そうですか、それはごめんなさい。でもカズマは動けませんよね？　ですから私から直接カズマに張りつく必要があります。まぁ人間マナタイトというやつですよ」
　……確かに理屈としてはおかしくない。俺は魔力回復も遅い方だから、一人で動けるようになるまでとなると、かなりの時間がかかるだろう。その点めぐみんは魔力の最大値が多い分、回復も早い。
　いや、やっぱり納得できない。
「まて、だったら、おれのよこでいいだろ、なんでうえなんだよ」
「……寝るのが一番魔力回復が早いんですよ」
　俺の当然の質問を受けためぐみんが、恥ずかしそうにボソリと呟く。

「はぁ？」
「だ、だから私は今から寝るつもりなんです。で、ですから一人は寂しいですし、地面は硬くて痛いので、カズマに抱き枕代わりになってもらおうと……」
「……つまりおまえは、おれにだきついたままねるつもりか」
めぐみんは、声には出さないが俺の胸の上で軽く頷いた。……まぁこの状況なら仕方ないのかもしれない、実際に最善策な気がする。……童貞の心情的な面を除けばだが。
それにしても、疲労感がヤバイ、意識が朦朧としてきた。
「すまん、すこしだけ、すわせて」
「いいですよ」
ほんの少しだけ、ドレインタッチを使う。
「あうぅ……」
すると、めぐみんが弱弱しい声を漏らした。少しだけ回復した俺は心配になり、
「大丈夫か……？」
「……大丈夫ですよ」
めぐみんはそう言いながら、その華奢で柔らかな体を俺の身体にうずめてくる。その様子はまるで、全てを俺に委ねているようだった。

「本当にいいんだな？　目が覚めたら俺に襲われた後だったとしても文句はいえないぞ？」
「しつこいですね、私がいいと言ってるんだから構いません。襲われてたとしても文句はいいませんよ」
めぐみんはその口を俺の胸に当てたまま、少しだけ楽し気で、安心したような声を出す。
どうやら、おれが口だけで何もしないと信頼しきっているらしい。
……ここまでヘタレと舐められて引き下がれない。
あの日の約束なんて知るもんか。
体力が回復しきったら、動けないめぐみん相手に最後の一線を遠慮なく超えてやろうと思う。
滾る決意を胸に秘め、ゆっくりと目を開くと――
そこには、俺の胸の上で、安らかな寝息を立てるめぐみんがいた。
俺の方に顔を向け、心底幸せそうな顔で眠っている。
「どんだけ俺の事信用してるんだよ……」
俺は呆れているはずなのに、どうしても頬が緩むのを止められなかった。
さすがにこの幸せそうな顔を壊す気はなれない。

……。

もうヘタレでいいや。

そう考えて、今はめぐみんの寝顔を堪能することにしたのだった。

第９話　報酬ください

山岳地帯で爆裂魔法を二人で使って、ひとしきり環境破壊と生態系破壊を行った後。動けなくなった俺たちは無駄に動くことを避け、暫くの間、休み続けていた。そしてある程度の回復が終わった後、眠り続けるめぐみんを背負って、アクセルの街へとテレポートした。

グリフォンを討伐したので報告の義務と報酬がある。そんなわけで冒険者ギルドへ向かう、夕暮れ時の道中。

「んっ……ここは……アクセルの街ですか……、もう日が沈みかけとは……驚きですね」

「おっと起きたのか、平気か？　結構ギリギリまで吸い取らせてもらったからな」

ようやく目を覚ましためぐみんに言葉を掛けると、肩越しに小さく頷いた。

「おかげさまでもう大丈夫ですよ。疲れもだいぶ癒えました」

「そうか、それは良かった。それじゃあそろそろ降りてくれないか？　俺も結構疲労が限界なんだよ」

体調が良さそうな事を確認した俺は、めぐみんに降りてくれるように促す。しかしめ

ぐみんは逆にしがみ付いてくる。
「んっ……」
「どういうつもりだ？　疲労が回復したなら降りてくれよ」
「……もう少しだけこうしていてもいいですか？」
「あと少しだけなら別にいいけどさ、俺は冗談抜きで疲れてるからな？　出来れば早めに頼むぞ」
俺は軽く息を切らしながら、ふと以前にめぐみんを背負った時を思い出す。そういえば、まともにめぐみんを背負って運んでいたのは、出会ってすぐのころだけだったかもしれない。ドレインタッチを覚えてからはおんぶする必要が無くなったからだ。
それだけでなく最近のこいつは、日課の爆裂散歩を俺以外……多分ゆんゆんに頼んでいるのもあって、魔力切れのめぐみんに関わる事自体少なかったのだ。
そう考えると、めぐみんをおんぶするのは本当に久しぶりなのかもしれない。
「久しぶりですね……。こんな風におんぶしてもらうのは本当に久しぶりです。ふと私たちが出会ってすぐの頃を思い出してしまいました」
ちょうど俺と同じことを考えていたのか、めぐみんも同じような話を切り出してきた。
「そうだなぁ、パーティーに入りたいって言うお前に、初めて魔法を見せてもらったとき

は本当にビビったよ」
「当然でしょう。あの時初めてカズマは我が爆裂魔法を見たわけですからね。それはもう……」
「いや？　一発撃てば使えなくなる爆裂魔をどう捨てればいいか悩んだって話だぞ？」
「そっちですか!?　いやもう、捨てられそうになった時死ぬ物狂いでしがみ付いて良かったですよ。実は餓死寸前まで行ってましたし」
　俺たちに拾われるまで餓死寸前だった貧困少女が、今では世界を救った大魔法使いの一人だもんな。感慨深いものがある。
「そういえばそうだったな。何だっけ？『もう三日も何も食べてないのです』だっけ？あと『荷物持ちでもなんでもするから捨てないでください！』とかも言ってたな」
「う……あの時の事は忘れてください。私も生き繋ぐために必死だったのです。……それを言うなら私としても言いたいことがありますが」
　俺の言葉に思うところがあったのか、少し悔しそうな反応を見せためぐみんが何かを言い返そうとしている。
「なんだ？　少なくともお前らと出会ってすぐの頃は、真面目に品行方正な生活をしてたぞ？」
「よく言いますよ。初めてスキルを覚えて帰ってきたかと思えば、人のパンツをス

ティールしてきたくせに」
「うぐっ!?　あ、あれは故意じゃなくて事故なんだから仕方ないだろ」
　確かにそうだった……。事故とはいえ、クリスとめぐみんのパンツを取ってしまったのだ。もしかすると、あの時から俺の最低な評価が決定されてしまったのかもしれない。
「私は今でも本当に事故なのか疑ってますけどね。……カズマが内心一番欲しいと思っているからパンツが手に入ってるのではないですか？　男相手だと普通に装備品を奪えたりしていますし」
「そ、そんなことはないはずだ……ぞ……？」
　違うとは思うのだが……。少なくとも俺は普通に相手の持ち物を捕るのに使っているつもりだ。……深層心理とやらは知らないが。あと男のパンツは死んでもいらない。
「なんでそこで自信なさげなのですか……。まぁでも、私もあの時はカズマをどれだけ最低な男なのかと思いましたよ。一時は本気でパーティーを抜けようかと考えたぐらいです」
「そうだったのか……。まぁそりゃそうか」
　年端もいかない女の子が、遭って間もない男に、公衆の面前でぱんつをはぎ取られたのだ。当然の反応だと思う。

と、めぐみんはそっと、肩に掛ける力を強めてきた。そして柔らか気な声色で、
「……そんな私とあなたが、今ではこんな関係になっているというのは本当に驚きですよ。昔の私は絶対信じなかったと思います」
「こんな関係って……まだ友達以上恋人未満の関係だろ？」
「まだ……ですか？」
「ち、ちがっ、そういう意味じゃねーよ、や、やめろっ！　それ以上そのニヤケ面を続けるならこっちも考えがあるぞ」
肩越しにめぐみんを見やると、嬉しそうに唇をニマニマさせている。凄んでみるが、全くその表情を変えようとしない。それどころかさらに体を擦り付けるように密着させてきた。
もどかしくなってきた俺は、めぐみんを振り落としにかかる。
「お前っ！　いい加減降りろ！　もう十分元気だろうが！」
「いやですー。私を簡単に引き摺り下ろせると思わないことですね。ほらほらーカズマだって密着していて満更でもないのでしょう？　少しずつ頬が赤くなってきてますよ？」
高レベル冒険者として思わぬ握力を発揮するめぐみんを振り落とせない。一応俺も超高レベル冒険者なのだが、疲労のせいか勝てる気がしない。

……確かにおんぶのシチュエーションは悪くないと思っている。太ももや尻を不可抗力で触れるのはかなり気分がいい……うん。少し性犯罪者的な思考になってきたので自重しよう。

ともかく、嬉しいには嬉しいのだが。それとは別に、俺の反応を見て調子に乗っているこいつには腹が立つ。

「赤くなってなんてねぇよ。　勘違いするのも大概にしろ！　お前の平坦な体を押し付けられて誰が喜ぶもんか！」

「おい、誰の身体が平坦でロリっ子なのか聞こうじゃないか」

「俺はロリっ子とは言ってないだろ!!　自分で言いだすってことは自覚してんじゃねーか。ということでお前を背負っても何も嬉しくないんだ。さっさと降りてくれ」

「ぶっ殺」

事実を言われて激昂しためぐみんが首を絞めてくる。それに反抗するために俺も負けじとドレインタッチを仕掛けようとする――――

と、視界の端に見知った顔が駆け寄ってきているのが見えた。

「カズマ！めぐみん！探したぞ！　お前たちはいったいどこで何をやっていたのだ？爆裂魔法が2発聞こえてきたときから心配していたが……」

ダクネスは相当に急いでいたのか、かなりの量の汗をかいている。それにもかかわら

ず、全く息は切らしていない。こいつのバカみたいな体力はなんなのだろう。
それはともかく、今は背中の暴力装置だ。
「あぁっ、ぐえっ、……説明するから背中のこいつをどうにかしてくれ」
「……どうしてめぐみんはカズマに背負われているのだ？　いつものように体力を分けて貰えばよいだろう。というかそもそも元気そうに見えるが？」
ダクネスの訝し気な目を受け、めぐみんの動きが止まった。首を絞めるのを諦めてくれたのだろうか？
ともかく助かった。そう考えた俺がふとめぐみんを見ると……
口元をニヤリと歪めていた。
そして周りの人に聞こえるような大声で、
「爆裂魔法を撃って動けなくなった私に、カズマがあんまりにも激しくするものだから、私も足腰が立たないのです。だから背負ってもらっているのですよ」
「カ、カズマは外で一体ナニをやっているのだ!!　そんなのずる……ではなくはしたないぞ!!」
一瞬頬を赤らめたダクネスが首を振り、真面目な顔で詰め寄ってくる。苛立った俺はめぐみんに向かって、
「お、お前はその紛らわしい言い方をやめろ！　ちょっと体力と魔力を借りただけじゃ

ないか」
「ぐすっ……嫌がる私を強引に手籠めにして、限界まで絞りつくしたのはカズマのくせに……」
「ゴブリンでも分かるわざとらしい泣きまねするんじゃねぇ！　大体お前自身がやれって言ったんだろうが!!　しかも同意の上だろうが!!」
今回の件に関しては本当に俺は何も悪くない。おんぶしているときに尻と太ももを触ったような気がするが、あれは不可抗力なのでノーカンだ。
そんな純真な俺がダクネスに事実を伝えると、驚愕の表情を浮かべめぐみんを揺さぶり始めた。
「ど、同意の上だと……どういうことだめぐみん!!　日頃あれほど私に、エロネスだの変態令嬢だのドMクルセイダーなどと謂れの無いことを言っておいて……やはりお前はえろみんだ！　性欲魔法使いのえろみんだ！」
「誰がえろみんですか!!　私の格好いい名前を変えて馬鹿にするのは辞めてください！　というかダクネスのそれは言われて当然のことですよ！」
そう言ってえろみんは、怒りの矛先を俺からダクネスに変える。ちなみに俺もダクネスのあだ名は妥当だと思っている。
と、ショックを受けたダクネスはおそるおそる……、

「わ、私は普段は清廉潔白なクルセイダーのつもりなのだが……そんなに私は性欲が強そうか……？」
「うん」
「んっ……そんな蔑んだ目で私を見ないでくれ……くぅ・・・・・はぁぁ」
　愉悦を顔に浮かべ体をよじり出した目の前の変態に、呆れた俺は溜息をつく。すると自分のものではない溜息が横から聞こえてきた。
「なぁめぐみん、今のこいつを見てどう思うよ。ちなみに俺は変態だと思う」
「奇遇ですね。私も変態だと思いますよ」
「……うう、野外プレイをした二人に言われるのは納得がいかないぞ……」
「だからしてないっての。……色々あって二人とも爆裂魔法を使っちゃったから、回復の速いめぐみんから体力を分けてもらっただけだって」
　まだ勘違いしているダクネスに俺が苦笑して答えると、めぐみんをじっと見つめて、
「……本当かめぐみん？」
「本当ですよ。……エロみん呼ばわりは非常に不本意なので弁明しておきます。カズマは襲ってきたグリフォンを倒すために爆裂魔法を使ったんです」
「そうだぞ、それで討伐の報告をするために、冒険者ギルドへ向かうところだったんだ」
　ダクネスは思わぬ俺の偉業に驚愕の表情を浮かべる。

「グリフォンを倒したのか……どうやって。いや、いつもなんだかんだ言いながら苦境を乗り越えてしまうお前の事だ。あえて聞くまい。ともあれ冒険者ギルドへ向かう途中だったのなら都合がいい」
「都合がいい？　何か呼び出しでもあったのか？」
「……そういえば、お前たちは外にいて放送を聞いていなかったのだったな。私が探しに来てよかった。皆も随分長い間待っている、急いでいくぞ」
「待て待て、何なんだよ！　せめて理由を教えてくれ」
そんな俺の当然の疑問に、ダクネスは急ぐ足を止めて振り返り、
「やっと魔王討伐報酬の受け渡しの準備が出来たらしい。アクアやミツルギたちが待っている」

★★★

――冒険者達でごった返しているにも拘わらず、静まり返ったギルドの中。
「冒険者、サトウカズマ殿！」
ギルドの受付の前で、他の冒険者の熱い視線を浴びながら。横に並んだ８人を代表して、
「貴方の魔王討伐に於ける助力素晴らしく、冒険者ギルドを代表し、深く感謝の意を申し

上げると同時に、ベルセルク国王より賜りました感謝状を――」

そう言って、俺に深々と頭を下げる受付のお姉さんから、俺は感謝状を受け取った。

――魔王との決着から二週間が経過した今日、ついに表彰と賞金贈呈が行われることになった。

今日まで表彰が遅れた理由だが、魔王討伐の報酬は非常に高額でその準備に相当な時間を要したからしい。

表彰式の代表を誰がやるかで、俺たち達４人、ゆんゆん、そしてミツルギ達３人で少しだけ相談したのだが、ゆんゆんは言わずもがな、ミツルギ達も『魔王討伐を果たしたのはサトウカズマ、キミ本人の力だ』とのことで、代表を辞退した。アクアが出しゃばってこなかったのは意外だったが。

「続きまして！　サトウ殿への賞金授与に移ります」

受付のお姉さんの言葉に、ギルド内の熱い視線が集中する。ここからが本番だ。魔王の討伐報酬でマナタイトの元を取ることはできれば良いのだが……。

「冒険者、サトウカズマ一行！　魔王軍幹部討伐における多大な貢献に続き、今回の魔王討伐は、あなた達の活躍なければ成しえませんでした。よってここに、金二百億エリスを……」

流石に二十億エリスもは……。

「今なんて？」
「にひゃ、二百億エリスです……！」
「「「「にひゃく……!?」」」」
俺達は、思わず絶句した。
俺とアクアは体が震えいつもに増して挙動不審となり、ダクネスはあんぐりと口を開けて固まり、めぐみんは小声でアレを買うだのなんだの呪詛を唱えている。
ゆんゆんは思わず泡を吹き出し、ミツルギ達でさえも、余りの金額の大きさに瞳を泳がせる。周りの冒険者達も驚きを隠せないようだ。
受付のお姉さんもそれは同じようで、深呼吸してから言葉を続け、
「それでは、授与を行います。……行います。ってあれ？」
と、受付のお姉さんが素っ頓狂な声をあげて、カウンターの裏側に振り向いた。
つられてみると、その視線の先には――
報酬の金貨が詰まった大量の袋を我が子のように抱えながら、ギルド職員たちが固まっていた。
「ちょ、ちょっと皆さん！　惜しいのは分かりますが、それはカズマさん達の報酬です。早く持ってきてあげて下さい。　というかそこの職員達！『これさえあれば家のローンが……』とか『山ほどあるんだから一つぐらい……』とか言わないでください!!　上司

にチクりますよ。ってそこ！今ポケットに金貨を入れたの見てましたよ!?」

……なにやら揉めているらしい。でも流石にこの場で持ち逃げする馬鹿はいないだろう。例えいたとしても、絶対取り押さえるが。

少しだけ呆れて溜息をついた後、ふと辺りを見回してみた。

食堂にはいつもは見ないような、高級そうな酒樽や、見慣れない料理人が並んでいた。いつもの席は既に埋まり尽くし、臨時の席まで用意されているらしい。そして、テーブルの上には今しがた出来上がったであろう、豪勢な料理が並んでいる。こいつら……。

現金な奴らを確認した俺は、改めて受付のお姉さんに振り返る。すると先ほどのギルド職員たちが観念したのか、金貨袋を抱えてしょんぼりと並んでいた。

そして、受付のお姉さんから声を掛けられる。

「先ほどは失礼しました。……改めまして、サトウカズマ殿！　その功績を讃え、金二百億エリスを贈呈します!!」

「「「おおーーーーっ!!」」」

お姉さんの言葉を受け、俺たちだけでなく、テーブルを囲んで静かにしていた冒険者達も声をあげる。

そして……。

「まじか、まじかよ!!　二百億ってすげーな!!　奢れよカズマ！」

「うひょーー！　すっごいね！　カズマ様！奢って奢って！」
当然の様に奢れコールが始まる。……しかしまだ奢るわけにはいかない。
今回はいつもと違って、ミツルギ達も報酬の受け取りの対象なのだ。
「おいお前ら！　少し黙ってろ！　俺は今から大事な報酬の分け方について話し合う。奢るかどうかはそれからだ！」
俺の言葉に若干不満気な声があがるが、仕方ない。これは避けて通れない話だからだ。
とはいえ、別に俺に悩むことはない。いつでも用意周到な俺は、報酬の分け方だって予め決めておいたからだ。そういうわけで、特に緊張することも無く、討伐メンバー７人に話を始める。
「……魔王討伐報酬の二百億エリスの分け方だが、一人につき二十五億エリスにしようと思っている。つまりゆんゆんは二十五億、ミツルギ達は七十五億だ。反対意見があるなら言ってほしい」
「「「えっ？」」」
ダクネスとめぐみんは特に驚きはないらしい、それに対して、ゆんゆんとミツルギは驚きの声を漏らした。
「待ってくださいカズマさん！」

「ちょっと待ってくれ」
　俺に向き直ったミツルギとゆんゆんが同時に声をあげた。ゆんゆんは、その凛とした表情を一瞬で申し訳ない表情に変え、ミツルギもゆんゆんをチラリと見やる。
「あ……私なんかがすみません。お先にどうぞ……」
「いやいや、キミの言葉を遮ってすまない。何か言うべきことがあるなら先に言って欲しい」
「あ、いえ……そちらこそどうぞ」
「……いや、君の方が……」
　互いに固ってしまい、お見合い状態になった二人に呆れた俺は、
「……そういうのいらないから、報酬に文句があるならさっさと言ってくれ」
　レディーファーストの精神なのか、ミツルギに先を譲られたゆんゆんが申し訳なさそうに、
「カズマさんは今回の戦いで、相当な額を出費したんですよね？」
「まぁそうだな。ほぼ全財産を叩いたわけだし。」
「ぜ、全財産……。それでめぐみんはこれ見よがしにマナタイトを見せつけてきたのね……」
「……めぐみん？」

そう言うゆんゆんの顔はどこか煤けている。俺が原因の爆裂娘を見やると、何処からか最高純度のマナタイトを取り出し、ドヤ顔を浮かべた。……渡した本人の俺でもムカつくのだから、毎日見せつけられたゆんゆんなら相当だろう。

「と、ともかく、カズマさんの出費のおかげで魔王討伐を果たせたわけなので、報酬は受け取れません。私の報酬は少しでもその補填に役立ててください」

ゆんゆんはおどおどとしながらも目は本気だ。普段はこの世のチョロさを凝縮したような女の子だが、芯の強さは凄まじいものがある。普通に説得しても受け取ってくれないだろう。ちなみに俺は意地でもゆんゆんには報酬を受け取ってもらうつもりである。魔王討伐もそうだが、それ以外の時も何度も助けられた恩があるからだ。

「ゆんゆんはいつか族長になるつもりなんだよな？　だったらこれは受け取ってくれ。村の運営といえば何かと金がかかると思う。二十五億エリスもあれば、あの紅魔の村ももっと良い村に出来るんじゃないか？」

「そ、それはそうかもしれませんが……あまりにも申し訳なくて……。私もあのマナタイトは使わせてもらいましたし……」

「出費の話なら、ゆんゆんだって自前のマナタイト使ってただろ。それに紅魔の里は、もしかすると俺も住むことになるかもしれんからな。住みやすい村にしてくれると助かる」

「そうなんですか……？　でしたら……。うーん、でも……」
ゆんゆんのためじゃなく、他の人のため、という押しが効いているのか悩んでいる。だがまだ決断までは至らないらしい。だったら……。
「頼むよゆんゆん。ゆんゆんの友達としてこれは受け取って欲しいんだ。受け取ってくれたらこれからも友達に――」
「受け取ります」
即決だった。
最初からこう言えば良かった。
「それじゃあゆんゆんにはこの袋を……袋を……おいっ、その手を放せっ！」
尚も抵抗するギルド職員にドレインタッチを喰らわせ、ゆんゆんに金貨の袋を手渡すと、深々と礼をしてくる。本当にいい子だ……。
と、下がっていたミツルギが前に出てきた。
こいつはきっとゆんゆんと逆の理由で出てきたのだろう。俺は大きな溜息をつく。
「……お前の活躍は認めてるけど、魔王を倒したのは俺だからな？　それ以上報酬を増やしてやる気はないぞ。」
「報酬を増やしてもらおうってわけじゃない。むしろ逆の話だ。……今回の報酬は僕達は受け取るべきじゃない……ということで、僕達の分はキミが受け取ってくれ」

思っていたのとは全くの逆の事を言い始めたこいつに対して、
「……どういうつもりだ？」
「どうもこうもないよ。魔王城を攻略できたのは殆ど君達のおかげだからね。魔王軍の幹部と魔王を倒したのは全てキミたちなのに、どんな顔をして僕は報酬を受け取ればいいんだ？　それに君が魔王を分断しなければ僕といえど死んでいたかもしれない。実際危ない所まではいっていた。だからその袋は……」
つまりこいつは、約七十五億エリスを、その謎高いプライドで譲ってくれるつもりらしい。チート持ちの勇者といえど、その金額を簡単に稼ぐことはできないはずだ。そう考えた俺はミツルギの両隣に立つ二人を見やる。
「……ってこいつは言ってるけど、取り巻きＡとＢはそれでいいのか？」
「誰が取り巻きＡよ！　私にはちゃんとフィオっていう名前があるの！」
「クレメアよ！　アンタに覚えられるのは嫌だけど、名前ぐらいちゃんと覚えなさいよ！」
相変わらずどっちがどっちか分からない少女達が声を荒げる。
「私はあんまり乗り気じゃないけど……キョウヤの言うことならそれに従うつもりだよ」
「……一応アンタたちのおかげで助かったのは分かってるからね、納得はしてないけど」

そして、複雑そうな顔をしたミツルギが前に立ち、
「というわけだ、報酬はキミたちが山分けにしてくれ。結局……アクア様を助けることが出来たのは、僕ではなく君だからね……」
「そうかよ……」
こいつはアクアの事を女神と崇め、恋愛感情……かどうかは分からないが、俺に大口を叩いてアクアの救助に向かった。それにも関わらず、見下していた相手に助けられた形となったわけだ。プライドの高いエセ勇者様には耐えられないのだろう。報酬を受け取らないのはそのためだ。
「……サトウカズマ、どういうつもりだ？」
「どうもこうもねぇよ、さっさと受け取れ」
「ちょっ」
七十五億エリス分の袋を受け取り、ミツルギ達三人に投げつけた。予想外の俺の動きにあたふたする三人を横目に、俺はアクアを指さす。
「この馬鹿女神が勝手に家出した時、お前達がいたから無事だったわけだろ？　これはその礼だとでも思ってくれればいいよ。俺は恩を仇で返すような奴じゃないんだ」
「誰が馬鹿女神よ!!　それより余ってるならその金貨私にちょうだいな」
女神の尊厳より金重視かよ。優しい俺が心の中だけでツッコミを入れていると、袋を

抱えたミツルギが。
「キミはどれだけアクア様に無礼を働けば気が済むんだ。　……というか本当に受け取っていいのか」
「いいよ。それに俺はもうあんな危ない冒険をするつもりはないからな。その金で装備品でも整えて、俺が働かなくていいようにモンスターでも倒してくれ」
「キ、キミは勇者になったというのに、まだそんなことを言っているのか……」
「当たり前だろ、俺はこれからは商人でもやってぬるい人生を送るつもりなんだ。死ぬかもしれない思いなんて二度とごめんだ。お前はせいぜい取り巻き二人にチヤホヤされながら一生冒険しててくれ」
　今までの様に危ない冒険してれば、命がいくつあっても足りない。ウィズ先生のおかげで多少は強くなったが、もう一度魔王城を攻略しろと言われれば百回は死ぬ自信がある。それぐらい奇跡のような戦いだったわけだ。
　これだけの資産があれば商人をやっても上手くいくだろう。なにせ俺は、冒険者ギルド登録の際に商人になることを勧められた男なのだ。
　と、何故か真面目な顔をしたミツルギが、
「それは本心か？」
「ん……？　本心に決まってるだろ。まさか俺が人のためにモンスターを倒す男に見え

たか？」

　俺は嫌味を込めて言い放つ。商人になるつもりなのはもちろん本心だ。しかしミツルギがは俺の言葉を無視して、

「……もし君の仲間が、モンスターに攫われたとしたらどうするつもりだ？」

「……金で高レベル冒険者でも雇って、じっくり待つかな」

「もし、その冒険者達がやられたら？」

「……さぁ、その時はその時だろ」

　適当に吐き捨てながら俺は目を逸らす。そんな状況になった時自分でもどうするかは分からない。何処からともなく幸運だけは高い男が現れて、情けなくも必死で抵抗するかもしれないが、それは俺の知ったことじゃない。

「そうか……やっと君という人間のことが分かった気がするよ」

「……何のつもりか知らないけど、俺はお前に分かられても何も嬉しくないからな。報酬受け取ったんならさっさとどっか行ってくれ。お前は宴会とかに参加する奴じゃないだろ」

　だんだん苛立ってきた俺の言葉をまた無視して、勝手に納得し始めたミツルギは小声で呟く。

「……案外、君のような男が本当の勇者なのかもしれないな」

そして、今度はハッキリと。
「サトウカズマ！　どうやら今の僕では君に勝てないらしい。……いつか君にリベンジさせてもらう。この報酬はその時まで預からせてもらうよ。……フィオ、クレメア、行こう！」
そう言い放って、ミツルギ達は冒険者ギルドから出て行った。
……。
「あいつの目標の俺って、やっぱり勇者っぽくないか？」
「その一言さえなければね。やっぱりカズマさんってばカズマさんだわ」
「どういう意味だこら！」
引っ叩かれて空っぽの頭を抱えるアクアを横目に、地面に転がるギルド職員たちから強奪した金貨袋を台に並べて、
「手元には百億エリス残っているけどみんなはどうする？」
俺の言葉を受け、めぐみんとダクネスは。
「いえ、私は結構です。今まで通り私の報酬はカズマが預かっておいてください。今まで通り、仕送りの分と生活費だけ渡してくれればそれで十分です」
「私もそれは不要だ。カズマが取っておけ。というのも、私は今回の活躍により、ダスティネス家当主として、王家から新たな領地と権限を受け取ることになったのだ。それ

こそ、その報酬より価値のあるものだ」
「そっか、だったらこれは俺は貰っておくぞ」
と、元気になったアクアが立ち上がり、
「それじゃあ、この百億エリスは私たち二人で山分けね！」
「そんなことを言うお前は一億エリスで十分だ」
「なんでよーーっ！」
怒りに任せて突っ込んでくる金の亡者、だってこいつに金を渡してもなぁ……
「お前は騙されやすいんだから、素直に俺に金を預けておけよ！　また騙されてニワトリの卵とか買わされても知らないからな。もしそれでお前が借金を作ったとしたら、昨日言ったことなんてすぐに撤回してやる。俺はお前を容赦なく見捨てるからな!!」
「……そうね、案外カズマさんに養ってもらう方が、お金の目減りを気にしなくてもいいのかも……。分かったわ！今回はその報酬はアンタが受け取りなさいな。あとゼル帝はドラゴンの子よ」
アクアは何故かすんなりと納得した。普通の使い方をすれば、五十億なんて使いきれないんだけどな。そこまで頭は回らなかったらしい。あと、俺は別にゼル帝とは言ってない、自爆したなこのバカ。
ともかく、話はまとまった。それと同時にギルド内から歓声が上がる。

「結局報酬の半分を手にしちゃうってすげーなカズマ！　ほら、さっさと奢ってくれ！」
「うひょーー！　すっごい！　いつもの様に褒めてあげるから奢ってよ！　私奢りに期待してお金持ってきてないんだよ」
　俺たちが話をしている間にも、どんどんと注文をしていたらしい冒険者達が声をあげる。ここぞとばかりに高級食品を仕入れてきた冒険者ギルドといい、こいつらといい、調子に乗りすぎだ。
　俺はその場の全員に聞こえるような、わざとらしい大声で。
「いやー、俺は堅実な男だからなー。これだけの大金が入った日は、真っ先に銀行に行ってお金を預けないといけないからなー。悪いなー馬鹿な冒険者どもに奢る金なんてないんだよなー」
「「えっ!?」」
「ま、まって！　私今月もうお金残ってないの！」
「う、うそだろ？　嘘だって言ってくれカズマ」
「そんな……、今日食材を捌ききれなければ大赤字だ……」
「ローンが、おうちのローンが残ってるの！」
　俺の言葉に、テーブルに座っていた冒険者だけでなく、食堂のお兄さん達や、ギルドのお姉さんたちも悲嘆の声をあげる。というか最後のお姉さんはいい加減諦めろよ。

「そっかそっかー、それは残念だったな。せめてお前らの態度がもっとましならなぁ」
「ごめん、ごめんカズマ、いやカズマ様！」
「お願いしますカズマ様！私たちに恵みをください！」
慌てて懇願してくる冒険者達の声を聞いた俺は、わざとらしくドアの前で振り返り、
「おいそこの冒険者ども、この勇者カズマ様に奢って欲しいなら言うべきことがあるんじゃないか？」
「お願いします勇者様！　フルコースを頼んでお金のない私に奢ってください！」
「いいぞ」
近くの席に座っていた女戦士の頼みに二つ返事で答える。
すると、どこからともなく、勇者様コールが始まった。その声は伝染し、加速度的に勢いを増していく。そしてギルド内の空気は一つになった。
もはやこの場に俺の事をバカにする奴はいないだろう。
俺は満足げにその様子を見ながら。
「しょうがねえなあああああああ！」
勝ち誇ったドヤ顔で、高らかに奢りを宣言した。